# 平成２年度(第26次)高校教師海外研修

# 報告書

平成２年12月

国際協力事業団

広　報
JR
90 — 6

JICA LIBRARY
1110415[5]

# 平成２年度(第26次)高校教師海外研修

# 報告書

平成２年12月

国際協力事業団

国際協力事業団
25713

# 序　　文

国際協力事業団（ＪＩＣＡ）では、国際協力に関する啓発事業の一環として、次代を担う高校生の開発教育（国際理解教育）の現場で、研究・実践されている全国高等学校国際研究協議会加盟校の先生方を対象として、昭和40年から海外研修派遣を行ってまいりました。

本年度は、南米に３名、タイに13名、マレイシア・シンガポールに14名、合計30名の先生方に参加していただき、わが国の国際協力の現状や海外で活躍している日本人、あるいは訪問国の経済、社会、教育事情等を視察し、理解を深めていただきました。

ここに、参加者の研修報告を取りまとめましたので、関係各位のご高覧に供します。

平成２年12月

国際協力事業団
総務部長　杉野　明

# 目　　次

1. 参加者氏名 …… 1

2. 報　　告

(1) タイ班日程 …… 5

青森県立八戸北高等学校　宍倉　慎次 …… 6

宮城県立宮城県泉高等学校　鎌本　正人 …… 10

神奈川県立相模田名高等学校　八尋　義人 …… 13

山梨県立山梨園芸高等学校　里吉　孝 …… 16

埼玉県立久喜工業高等学校　荻野　登 …… 19

岐阜県立大垣北高等学校　杉野　茂樹 …… 22

愛知県立半田高等学校　蜷川　喜信 …… 26

大阪府立園芸高等学校　小島　光男 …… 29

広島県立安芸府中高等学校　鳥羽　紘史 …… 32

山口県立奈古高等学校　村岡　章 …… 37

徳島県立板野高等学校　北原　顕彦 …… 40

高知県立高知園芸高等学校　林　久信 …… 45

佐賀県立唐津工業高等学校　中村　寿志 …… 48

(2) マレイシア・シンガポール日程 …… 53

北海道立岩見沢農業高等学校　斉藤　信寛 …… 54

岩手県立水沢農業高等学校　菅原　善致 …… 57

山形県立楯岡高等学校　高梨　敏宏 …… 61

新潟県立長岡農業高等学校　堤　賢一 …… 64

茨城県立水戸農業高等学校　高畑　正人 …… 73

静岡県立島田商業高等学校　市来　福寿 …… 76

三重県立松阪高等学校　片山　茂 …… 82

福井県立坂井農業高等学校　西田　哲章 …… 86

和歌山県立田辺高等学校　池田佐和子 …… 92

島根県立出雲農林高等学校　市場　義延 …… 94

愛媛県立南宇和高等学校　内山　文夫 …… 96

長崎県立諫早商業高等学校　高場　正喜 …… 101

沖縄県立中部農林高等学校　識名　盛安 …… 107

（高国協事務局）
東京都立松が谷高等学校　斉藤　実 …… 110

(3) 南 米 班 日 程 …… 115

栃木県立宇都宮北高等学校　渡辺　光男 …… 116

石川県立工業高校　西川　栄紀 …… 127

兵庫県立芦屋南高等学校　池本　康代 …… 130

1. 参加者氏名

<タ イ 班>

| | 氏名 | 年齢<br>生年月日 | 所属学校<br>住所 | 担当教科 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 宍倉慎次 | 30<br>35. 8. 22 | 青森県立八戸北高等学校<br>青森県八戸市大久保字町道8-3 | 英語 |
| 2 | 鎌本正人 | 33<br>32. 3. 19 | 宮城県立宮城県泉高等学校<br>宮城県仙台市泉区将監10-39-1 | 社会 |
| 3 | 八尋義人 | 38<br>27. 3. 6 | 神奈川県立相模田名高等学校<br>神奈川県相模原市田名6786-1 | 英語 |
| 4 | 里吉孝 | 43<br>22. 1. 12 | 山梨県立山梨園芸高等学校<br>山梨県東八代郡石和町中川1400 | 社会 |
| 5 | 荻野登 | 31<br>34. 3. 21 | 埼玉県立久喜工業高等学校<br>埼玉県久喜市野久喜474 | 電気 |
| 6 | 杉野茂樹 | 46<br>19. 1. 19 | 岐阜県立大垣北高等学校<br>岐阜県大垣市中川町4-110-1 | 英語 |
| 7 | 蜷川喜信 | 37<br>27. 8. 29 | 愛知県立半田高等学校<br>愛知県半田市出口町1-30 | 社会 |
| 8 | 小島光男 | 36<br>29. 6. 18 | 大阪府立園芸高等学校<br>大阪府池田市八王子2-5-1 | 農業 |
| 9 | 鳥羽紘史 | 48<br>16. 12. 26 | 広島県立安芸府中高等学校<br>広島県安芸郡府中町字倉輪多山372-1 | 数学 |
| 10 | 村岡章 | 34<br>30. 7. 30 | 山口県立奈古高等学校<br>山口県阿武郡阿武町奈古 | 農業 |
| 11 | 北原顕彦 | 31<br>34. 6. 20 | 徳島県立板野高等学校<br>徳島県板野郡板野町川端 | 英語 |
| 12 | 林久信 | 41<br>23. 11. 6 | 高知県立高知園芸高等学校<br>高知県吾川郡春野町弘岡下3860 | 農業 |
| 13 | 中村寿志 | 40<br>24. 9. 15 | 佐賀県立唐津工業高等学校<br>佐賀県唐津市石志中の尾3072 | 社会 |
| 同行 | 高田裕彦 | | 国際協力事業団総務部広報課 | |
| 〃 | 村松みどり | | 国際協力事業団移住事業部移住投融資室 | |

<マレイシア・シンガポール班>

| | 氏名 | 年齢<br>生年月日 | 所属学校<br>住所 | 担当教科 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 斉藤信寛 | 41<br>24. 1. 8 | 北海道立岩見沢農業高等学校<br>北海道岩見沢市並木町 11 | 農業 |
| 2 | 菅原善致 | 32<br>32. 9. 21 | 岩手県立水沢農業高等学校<br>岩手県胆沢郡胆沢町小山字笹森 1 | 理科 |
| 3 | 高梨敏宏 | 46<br>18. 8. 28 | 山形県立楯岡高等学校<br>山形県村山市楯岡荒町 2-1-1 | 英語 |
| 4 | 堤賢一 | 49<br>15. 12. 27 | 新潟県立長岡農業高等学校<br>新潟県長岡市曲新町 3-13-1 | 農業 |
| 5 | 高畑正人 | 29<br>35. 12. 23 | 茨城県立水戸農業高等学校<br>茨城県那珂郡那珂町東木倉 983 | 英語 |
| 6 | 市来福寿 | 53<br>12. 3. 30 | 静岡県立島田商業高等学校<br>静岡県島田市 8707 | 商業 |
| 7 | 片山茂 | 29<br>36. 4. 2 | 三重県立松阪高等学校<br>三重県松阪市垣鼻町 1664 | 英語 |
| 8 | 西田哲章 | 41<br>23. 12. 28 | 福井県立坂井農業高等学校<br>福井県坂井郡坂井町宮領 57-5 | 農業 |
| 9 | 池田佐和子 | 42<br>22. 9. 2 | 和歌山県立田辺高等学校<br>和歌山県田辺市神子浜 408 | 英語 |
| 10 | 市場義延 | 46<br>19. 3. 10 | 島根県立出雲農林高等学校<br>島根県出雲市下横町 950 | 農業 |
| 11 | 内山文夫 | 44<br>21. 1. 27 | 愛媛県立南宇和高等学校<br>愛媛県南宇郡御荘町平城 | 社会 |
| 12 | 高場正喜 | 48<br>17. 2. 5 | 長崎県立諫早商業高等学校<br>長崎県諫早市宇都町 8-26 | 社会 |
| 13 | 識名盛安 | 26<br>38. 9. 20 | 沖縄県立中部農林高等学校<br>沖縄県具志市字田場 1570 | 農業 |
| 14 | 斉藤実 | 53<br>11. 9. 5 | 東京都立松が谷高等学校（高国協事務局）<br>東京都八王子市松が谷 1772 | 社会 |
| 同行 | 中川寛章 | | 国際協力事業団総務部広報課 | |
| 〃 | 山田毅久 | | 国際協力事業団移住事業部移住計画調査課 | |

＜南 米 班（ブラジル・パラグァイ）＞

| | 氏　　名 | 年　齢<br>生年月日 | 所　属　学　校<br>住　　所 | 担当教科 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 渡　辺　光　男 | 5 8<br>7. 7. 1 | 栃木県立宇都宮北高等学校<br>栃木県宇都宮市岩曽町 606 | 英　語 |
| 2 | 西　川　栄　紀 | 4 6<br>19. 1. 11 | 石川県立工業高校<br>石川県金沢市本多町 2-3-6 | 英　語 |
| 3 | 池　本　康　代 | 3 6<br>28. 10. 4 | 兵庫県立芦屋南高等学校<br>兵庫県芦屋市新浜町 1-2 | 英　語 |

(1) タイ研修日程

| 月 日 | 曜 | 日程 A M | 日程 P M | 備考 宿泊先 |
|---|---|---|---|---|
| 8月22日 | 水 | 11:00 成田発(TG641) | 15:30 バンコク着 | アリストン・ホテル |
| 23日 | 木 | 9:00 JICA事務所訪問 | 12:00 カセサート大学研究協力<br>(カンペンセン・キャンパス) | 同 上 |
| 24日 | 金 | 10:00 モンクット王工科大学<br>(30周年記念式典出席他) | 14:00 日本人学校訪問 | 同 上 |
| 25日 | 土 | アユタヤ視察 | バンコク市内視察 | 同 上 |
| 26日 | 日 | 12:00 バンコク発(TG114)<br>13:05 チェンマイ着 | チェンマイ市内視察<br>18:30 協力隊員との懇談会 | メーピンホテル |
| 27日 | 月 | 9:00 チェンマイ<br>教員養成学校等視察 | 17:35 チェンマイ発(TG107)<br>18:40 バンコク着 | アリストン・ホテル |
| 28日 | 火 | 9:00 国立衛生研究所視察 | 14:00 日本企業<br>(矢崎総業)視察 | 同 上 |
| 29日 | 水 | 11:00 バンコク発(TG640) | 19:00 東京着 | 同 上 |

氏　　名　　宍 倉 慎 次

所属学校　　青森県立八戸北高等学校

担当教科　　英語

1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

国際理解教育といえば、西欧人と交流し、彼らの文化・生活を理解することである、というふうに視野の狭い見方しかできない生徒がずいぶんと多い。端的には、青森県高等学校教育研究協議会が米国においてホームステイを企画したところ、生徒から「黒人とはいやだ」、「日系人とはいやだ」という苦情が若干出た。

しかしながら、このような苦情を言わせるにいたったのは、恥ずかしながら、我々教師自身の世界的視野が先進国である欧米に偏ってきたからであると言わざるを得ない。

従って、今回この視察にあたっては、中進国タイ国の庶民の生活ぶりを肌で感じることでその実態と問題点等を探ってみよう、そして、それらを生徒に直接的に伝えることによって西欧に偏りがちな国際教育を改善していこうというのが私の目的であった。

2. 国際協力の現場で

参考になったこと・気になったこと

無償援助によって建設された建物、そして数多くの備品、特に大学でのコンピューター関係の提供には目を見張るものがあった。また、農業関係の技術協力により野菜の収穫量の増大、国立衛生研究所の貢献により乳児死亡率の低下がみられたこと等など全てが参考になったことである。ただ、具体的に協力隊が指導している場面を見なかったせいか、今一つ物足りないし、生徒に伝えるにしても現場を見てないので今一つ説得力に欠ける気がする。来年度は是非とも先生方に現場を見せたほうがいいと思われる。もっとも、国際協力キャンペーンで協力隊ＯＢからお話しを聞けるということもあるが。

3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

今回視察させてもらったカセサート大学、モンクット王工科大学、国立衛生研究所、３つともすべてがタイ国の現在の発展に多大な寄与を果してきたはずである。それにしても無償援助の金額の大きさには目をみはるものがあるし、協力の中身も今日中進国となったタイ国には必要不可欠のものだったにちがいない。

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

「タイ国の人々にとっては普通のことで日本人には普通でないこと」というテーマで特に以下に挙げることをスライドを使って報告し、生徒一人一人に感想を述べさせ視野を広めさせる。

(1) バンコク国際空港に到着後、トランク受取の場所がわからず出口からでてしまった。警備員にもう一度中に入ってもよいかと聞いたらいいとのこと。ただし中に免税のウィスキーがあるから買ってきてくれという。ショック。

(2) 空港からホテルに向う途中、スラムがあった。その玄関(？)から1.5メートルぐらいのところに線路があり貨物列車が走っていった。列車が通り過ぎた後、自分の子供ぐらいの子がその線路で遊んでいる。そして、トロッコも日常雑貨を積んで走ってきた。ひどくショック。

(3) また、ビルを解体工事している現場に出くわす。日本ではダイナマイトかブルドーザーで一瞬にして終るはずなのにそこでは、一人でハンマーを持って行なっていた。何カ月かけてやるんだろう。ショック。

(4) 到着した日にホテルの洗面所で洗濯を始めたのはいいがお湯を栓して止めたらパイプから洩れ出した。ＪＩＣＡの技術協力を受けていないホテルだなと苦笑い。

(5) その日の晩、近くの「アライブ・シーフード・マーケット」で夕食。ロブスターには驚かなかったが、一番驚いたのはトイレで用を済ませたらボーイがいて手洗い水を流して待っている。「どうも」といったらチップを要求。払う人がいるからもらう人がいるのか、こんなサービスを考えつかせたのはまさか日本人ではあるまいだろうな（？！）。ショック。

(6) 国際協力事業団に向う途中、あまりにも移動するバスのスピードが速いのでスピードメーターをのぞいたらゼロから針が動かない。ノーヘルで追越していくバイクを見たがこれもメーターはゼロのままである。車間距離はないに等しい。いつ大きな事故が起きても不思議ではない。（帰国後の９月やっぱり大きな事故が起きた）

(7) 屋台で夕飯、たらふく食べて30バーツ、味も抜群。前日はロブスター500バーツ、この差は一体何だろう。観光客はやめにしよう。

(8) 移動中の道端で裁縫中の男性、ミシンは、昭和30年代の型(？)。中古の重機が山積み、フォードのトラクター、小松のブルドーザー、リストアして使ったほうが新品を作るよりメリットが大きいのか。

(9) モンクット王工科大学でＪＩＣＡ提供のコンピューターの数にはビックリ。自分の学校でコンピューター１台買ってもらうのは２～３年待たなくてはいけないのに。

(10) 日本人学校を訪問し、ここ数年での生徒増加が目覚しいということで、校舎が増築されていた。ショックなのは中学校３年時３学期に生徒数が３分の１に減ってしまうとのこと。受験だけの

せいとは思えない。日本人は他国家・他民族となかなか同化しようとしない、できないように思えるのだが ― 。

(11) 米国の中流以上の家庭では、大きなミネラルウォーターのボトルを備え付けて飲んでいるが、同じ様なものが日本人学校にもあった。カセサート大学付属の小中学校にはなかった気がするが ― 。タイ国で最初に水道管を通した時、どうして日本の技術協力を仰がなかったのだろう。

(12) 日本人学校から帰る途中スコールがあった。一番ショックなのは、その強い雨の中、シャンプーしている子供がいたことだ。乾期はどうしているのだろう。

(13) 日本人学校では、小1からタイ語を習うと同時に、中学校高学年では英語が週4時間と英会話が週2時間と外国語教育が充実している。「使える言葉」を目指すのであれば当然のことだが ― 。

(14) その雨でバスの中にいても濡れた。

(15) アユタヤ観光でバイクの5人乗りをはじめて目撃。

(16) その観光をしている時、ずっと5～6台のバイクが我々のバスの後を付いてくる。降りるやいなや「千円、千円」といって、うちわやら絵葉書やらを押売しようとする。ほしいものでリーズナブルな値段なら買ってやるのに、いや、買うのに ― 。日本人を見ればこうやって付いてくる ― いつからこんな状況が生れたのだろう。自分が日本人であることがはずかしい。ショック。

(17) チェンマイに到着。サンカンペインで銀製品の店に入る。以前メキシコで同じ様なネックレスを約5千円で買ったことがある。そのネックレスは2,800バーツ。700バーツでどうだと言ったら、800バーツでどうだと言った。その製品の銀含有率は100パーセントだそうだが、あやしいもの。それにしても、買い方を知らない日本人は2,000バーツぐらいだすのだろうな ― 。何かが間違っている。

(18) タイシルクを織る若い女性たちがいた。1日中仕事して60バーツだそうだ。バンコクへ出稼ぎに行く女性が多いのもわかる気がする。

(19) サムロの若い運転手と仲良くなった。サムロは別名ツックツックともいうが、エンジンはダイハツ製、ボディはタイ国産だろう。自分の車だと思っていたら大部分がレンタルだそうで、1日のレンタル料130バーツだそうだ。ということで「金持ち日本人」を見つければ普通の倍で料金をふっかけるとのこと。私は「友達」ということで正当な(?)料金を取ったそうだ。

(20) チェンマイのガイドは、日本語を話す女性。一番お金を日本人から巻上げていそうな気がする(?)。何か寂しい ― 。

(21) 視察の最終日、国立衛生研究所を見た。ものすごい建物である。日本でもこれだけりっぱなものはないだろう。ＪＩＣＡ様さまである。

(22) そこから矢崎総業までバスで5時間かかった。地図を見れば信じられない程遠回りしている。

貴重な時間をただただバスのなかで悶々としてすごした。

(23) 安い土地・安い労働力。そして、すぐそばに港。絶好の工場立地条件である。労働者は、17～25才までの若い女性。月給3,000バーツだから、タイ国の教員の初任給並みである。労働者にしてみれば矢崎様々だ。ただ、社会保障等どうなっているのかつっこんで聞いてる時間もなかったが、日本で云う「パート」並みでなければよいのだが ― 。

(24) 帰りはＪＩＣＡの高田さんの指示で適切なルートをバスが通って3時間。来年は、日本語の話せるガイドをつけたほうがいいだろう。ちなみにバスの運転手は地図を読めなかった。ショック。

(25) 最後の晩、仲間3人で繁華街へ土産物を買いにでかけた。途中で他の人とはぐれてしまい、ビールでも飲んで帰ろうと思い、軽率にも1人であるバーに入った。ビール1杯それまでは50バーツで飲んでいたが、何とその店は、ＵＳドルで請求してきた。ビールだけではない。訳のわからぬ項目で合計400ドル也。もっとも日本にもこの手の店はあるが ― 。半額に値切って無事帰る。もし逆らっていたら、 ― であろう。いずれにせよ、軽率な行動は慎むべきである。
― ショックから立直るのに1カ月かかりました。

## 5. 所感及び意見

(1) 研修時期及び期間

自分にとっては、問題ありません。学校側も協力的でした。問題がある方がおられれば、その学校の対処の仕方にあると思います。

(2) 研修日程及び訪問先

協力隊が、活躍している場面を是非この目で見たかった。また、渋滞はやむを得ないが、バスの運転手の無知により最終日は移動のロスタイムが非常に多かったので来年は地理に詳しいガイドをつけたほうがいいだろう。

矢崎総業を見学した真意がよくわからない。

(3) そ の 他

国際教育研究協議会に関係し、今年で5年目になります。今年度は僭越ながら全国大会まで開催させていただきました。私が疑問に思うのは、どうして、国際教育研究協議会に関係のない先生方が、あんなにたくさん参加しているのでしょうか。同じ教育現場で生徒を指導している立場だからいいだろう、と言う意見も聞えてきそうですが、やっぱりひっかかります。是非善処してくださいますよう宜しくお願い申し上げます。

氏　名　鎌本正人（José Ken Kamamoto）
所属学校　宮城県立宮城県泉高等学校
担当教科　社会（地理、世界史）

小学校卒業を目前に、チュちゃんの心は揺れていた。家族のために、一刻でも早く働きに出るべきなのか？　村の前に伸びる一本の道路、そのずっと先には、あの大都会バンコックがある。……たとえば、NHKでも放映された「そしてチュちゃんは村を出た」のチュちゃんが、イサーンの大地に染み込む農民の汗を、僕らに教えてくれるであろう。

「毎日、ワーク、ワーク。でも私の人生に選択肢はこれしかないの。」バンコックの片隅で、何かに押しつぶされまいかとする様に、けなげに働いていたミャウが、一人の日本人に託したパスポート用の写真。……たとえば、故郷チェンライのことを語る時、いつも淋しそうな笑顔を浮かべていた少女ミャウが、人間の優しさと哀しさとを教えてくれるであろう。
タイには沢山のチュちゃんが、沢山のミャウがいる。

だからこそ、生徒の前に登場する途上国の姿は、等身大の人間によって描かれる、1枚のカンバスであって欲しいという想いが、こちら側にはある。医者になって高地の医学を研究するんだ、と目をきらきら輝かせていたインド・ラダックの常宿の息子。初めて会ったのに、数十年来の旧知の仲のように手荒く両手を握りしめてきた、アルジェの果物屋のオヤジ。夜な夜なガソリンを含んだ口から炎を吐きながら小銭をかせいでいた、メキシコ市の名も知らぬ若者。めまぐるしき日本の日常の中でも、彼らの表情は決して脳裏から失せることはなく、不思議な一本の糸を提供し続ける。その糸が織りあげるものは、バンコックで大量生産され、みやげ屋に所狭しと並べられるタイのシルク製品ではない。今や完全に姿を消してしまった、チェンマイの織物工場で、娘さん達が心をこめて織っていたかつてのものである。

以上を「ミクロの視点」と呼ぼう。これに対し、日本のODAのシステムを論じる、また南北問題の構造を明らかにする、というのは「マクロの視点」である。私たちの日常における授業の実践とは、常に「ミクロの視点」と「マクロの視点」との交錯であり、双方においてたゆまぬ研究と努力を要求される、長い道程の一部である。
たとえば授業の中で外国人労働者の問題を討論させたとしよう。生徒たちはよく問題点を把握して授業に臨んでくれるが、仮にひとりひとりの人間の感情、人間の顔が欠けた議論になると、ひどくやり切れない思いがする。それは「ひとりの労働力」ではなく、私たちが他者であり続けることを拒否する「人生」が存在しているからなのだ。

だが一方、そこにシステム論が全く欠けていたとしよう。私たちがどんな形でチュちゃんやミャウとかかわろうが、それはただの感情論で終ってしまう危険性を常にはらんでいる。日本の援助でできた一本の道路。それが娘さんをバンコックへ運ぶんだぞ、と声高に叫ぶことは実にやさしい。しかし、誤解を恐れずに言えば、一人の人間の命を救うよりも、百人の生活を向上させる方が優先しているのが現実の社会である。これをどう考えるのか？

近年の日本のＯＤＡに対する批判ラッシュ。その中には無論傾聴に値するものが多く、また耳の痛くなる様な話も多く、たいへん参考になった（亜紀書房「死を招く援助」、勁草書房「される側から見た援助」、岩波新書「ＯＤＡ援助の現実」など）。ただし、我々の生活自体が、そのシステムの上に乗りかかった形で成立しているのだ、という明確な自己認識もまた必要であろう。受験システムの内側にいてそのシステムを批判するケースを想像すれば明白なように、そこにはある種の覚悟と、特に建設的な考えとが必要である。それでなくても、自己を安全な場所へかくまいがちな、安易に「正義」をふりまわす傾向が、今の日本には強すぎるから。

民衆の上に立ったＯＤＡとは可能なのか？　いかなる方法をとればより有効なのか？　そもそも、ＯＤＡは真に必要なのか？　こういった素人考えの発想からスタートして、それでは実際に直接任務にあたっているＪＩＣＡの関係者はどう考えているのか？　少しでも本音が聞けるのではないか、という期待も、当初は少なからずあった。ただ批判さえすれば解決する問題ではない、ということも認識していたつもりではあった。

「様々なＯＤＡ批判が出ていますが、実際はどうなのか自分の目で見てきて欲しい」「途上国の現状にも目を向け、それを生徒たちに伝えて欲しい」研修旅行の前日、オリエンテーションの席上でこの言葉はうつろに響く。何度か日程表に目を落してみる。今の言葉と、この悲惨な日程表との接点を、どこに見出せというのか。主催者側が、旅行の安全を願う気持は理解できる（ただし、個人的には、自らが海外へ行ける特権階級でありながら、自己の安全を配慮するのみで他者の存在を無視することは、はなはだ身勝手な理論だと思っている）。いずれにせよ、私たちは決して「タイの現実を見に行った」わけではない。

ここで、ほんのささやかな要望をいくつかあげておく。

(1) わざわざタイへ来なくても、日本でしっかり勉強すれば事足りる部分が多すぎる。特に協力隊員との懇談会など、日本でも可能であろう（現に、私などは一週間おきにやっている様なものだ）。せめて実際の活動の現場を少しでも見せてくれれば、と惜しまれる。

(2) タイの研修で７泊中６泊がバンコックとは恐れ入った。農村での宿泊を、２、３日以上とり入れてはいかがか。日程表を見るまでは、当然イサーンへ行くものとばかり思い込んでいた。

(3) ＪＶＣが行なっている、スラムの住民との交流会があるが、これのＯＤＡ版はどうか。たとえば学校訪問ひとつとってみても、私たちが向こうの教壇に立ってみるなど、少しでも交流を広げる機会はある。「見せてもらう」ことに全く意義なし、と言うわけではないが。

さて、個人的にいえば、今回の研修旅行はきわめて有意義なものであったのである。それは何よりも ― タイの大地と人々の汗と涙が、またチェンマイの街角で明るい陽ざしに包まれた人々の笑顔が、私をさらに奥なる世界へ誘い込んでいくであろうという、あるはっきりとした予感である。旅行中、御世話をいただいたＪＩＣＡの関係者の皆さんには、まずその見識と努力に心から敬意を表したい。また、同行の先生方との貴重かつ奇妙な出会いも、忘れ難い思い出である。しかしながら、私にとっては、昨年のルーマニア訪問も、今年のタイ訪問も、もはや「思い出」ではないのである。部屋の中では、人気歌手ブンプアン・ドアンチャンの歌うしっとりとしたタイ歌謡の数々が、途絶えることなく続く。同時に、厳しい現実の中でも失わぬ、タイの人々の微笑と優しさもまた、途絶えることがない。なぜかアジアの旅は、人をセンチメンタルにする。
この冬、私はイサーンへ向け出発する。

サワディー・クルップ

氏　名　八 尋 義 人

所属学校　神奈川県立相模田名高校

担当教科　英語

1. 視察に際して特に主眼をおいた点

(1) 相手国に根づいて成長する真の国際協力とはどのようなものか。

(2) タイ王国の社会や人間を形成してきた特徴的な要因は何か。

2. 国際協力の現場で参考になったこと・気がついたこと

(1) 援助について

国立衛生研究所やカセサート大学の研究機関など日本国内にもない立派な施設で成果を上げたいと言う日本人研究者がいるように、もう「技術を教えて、援助してやる」というのではなく、国境を越えて対等な立場で力を合わせてゆくことが本当の国際協力だと思いました。ただ、こういった研究的協力を申し出る専門家は多いでしょうが、青年海外協力隊のような普及的協力を希望する人は少ないだろうと想像します。そこで、これから民間協力（ＮＧＯ）の活動をもっと支援してゆけばよいと思います（89年度から政府より補助金が出されていますが）。政府から政府への協力は外交の一環であり、我々納税者から、また援助を受ける人々へのパイプが繋がっているかどうかは、あまり意識もしません。ところが民間協力であれば、協力の材料は至る所に転がっており、帰国してからの活動も、実感を伴った貴重な開発教育になると思います。

(2) タイの教育について

タイの学校では年に一回「教師の日」があって、その日には生徒が花を一輪ずつ持ってくる。また、教室の入り口には厚紙がぶらさげてあり、それには「あなたのお父さんとお母さんは、あなたが一生懸命に勉強することを希望しています。」と書かれている。このように大人と子供の触れ合いが大切にされている教育環境がうかがえました。義務教育では各学年につき約百万人ぐらいの生徒がいるが、中学校レベルになるとこのうちの40％、つまり四十万人しか進学しない。政府は９年間の義務教育制を検討しているようですが、さらに高校進学となると中卒者の50％で二十万人だそうです。工業化に備えてエンジニアの育成が深刻な問題になっています。「この現状は日本より30～40年遅れている。」とゴーソン・モンクット王工科大学学長が話してました。そういえばバスの運転手が道路の表示が読めず、何度も引き返したのは、タ

イ全体の識字率の低さによるもののようです。カセサート大学付属の小中学校を訪問したときには暖かくもてなされ、たくさんの授業も見せていただきました。小学生の教室では30人ぐらいの児童が活発に授業を受けてました。片隅にはもうひとつの教卓があり先生が採点をしてました。小学校では落ちこぼれを出さないようにこのようなティームティーチングが行なわれているそうです。ここの校長先生は女性で「日本と日本人が勤勉でとても好きだ。」と話され、「ホームスティを希望している生徒の交流（交換留学）を是非したい。」と熱いラブコールを寄せられました。欧米志向の強い日本人がタイへ行きたいと思うかどうか、はなはだ難しい問題があり残念です。

(3) タイの社会について

私達がバンコクのアリストンホテルに着いたとき、部屋のテレビではあるお寺の式典の様子が映しだされていました。タイのテレビはタイマスコミ公社が2局、陸軍が2局、首相府公報局が1局の計5局ですが、それは全チャンネルの独占中継のようでした。タイ王国の元首であるラーマ9世（19歳で即位、現在62歳）の前に市民が一人ずつひざまづいて挨拶をしていくだけのことですが、こういった国家的、あるいは宗教的な儀式はよくテレビで放映されているそうです。王室に、とりわけ王妃に寄せる国民の信望がよくうかがえました。

旅行中に国際協力事業団事務所でお聞きしたことなどを参考にして考えると、タイには2本のしっかりした柱があるようです。その一つが、この立憲君主制で、歴史と伝統を有する独立国の形を守ってきました。逆に「変わらざるタイ社会」とか「身分社会から脱し切っていないタイ社会」とも言われますが、これはサクディ・ナー制（全国土の領有主を国王とし、国王が領有する土地を国民に下賜し、その土地面積を以て位階を定めた身分規定法）によるものです。タイに行く前にはナーイと呼ばれる官服を着た人達（官史、軍人、警官など）が、絶対的権力を行使しているのではないかと思いましたが、実際にはそのような状況は見られませんでした。史上空前の3年連続10%を越える経済成長率をあげている社会ですから、固定した支配階層はないのかも知れません。ちなみにタイの首相はチャチャイという退役陸軍大将（68歳）で、内閣はタイ国民党、社会行動党、民主党、民衆党、連合民主党、大衆党の6政党による連立内閣です。なお、共産党は非合法です。もう一つの柱は、タイ国民の90%以上が仏教徒であるということです。タイの仏教は小乗仏教と呼ばれますが、因果応報と功徳の思想が含まれています。つまり日常生活の諸現象はすべて前世における善行、悪行の結果であるとするものです。現在の支配階層の人達は前世において功徳をたくさん積んだ人であるという考えにつながり、その地位を利用して汚職しても当たり前ということになります。被支配階層にとっては支配階層に対する不満、反抗心も生じないので精神的に平穏なわけです。貧富の差も小さくなりそうにありません。

私達がチェンマイの寺院に行ったとき、小さな籠に入れた雀を10バーツ（60円）でしきりに売り付けようとする大人と子供に出くわしました。この雀を放してやれば功徳を積むことになるからだということでした。このように、功徳を積むことが個人的な目的であることも小乗仏教の特長のようです。「全体社会の向上につながらないようです。」と、日本人学校の校長先生が言われたことを思い出します。

日本には抽象的な学問を高度なこととし、実用的なものを軽視する傾向があると思います。大学生も論文の題にはやたらと難しい言葉を使います。高校生はそんな大学生を目指し、ただひたすら机上の勉強に没頭します。ここらでもっと身近な事象や具体的な問題を高校の授業にも取り入れていってはいかがでしょうか。例えば、沖縄県の名産である泡盛は100％タイから輸入した米で作られているということをタイで知りました。どんなに些細なことでも深く調べてゆけば、知的な想像力はどんどん広がってゆくと思います。まして現在、社会問題の代名詞といっても過言ではない国際協力を高校生に考えさせれば、彼らは色々なことを感じながら視野を広げてゆくことでしょう。開発途上国で最も大切なのはやはり人材の育成、つまり教育だと思います。同じように援助する側の我々先進国にとっても大切なのは相手の国をよく知ることではないでしょうか。国際協力事業団の方々には色々な情報を全国の高校に提供してくださるよう是非お願いします。

氏　名　里吉　孝

所属学校　山梨県立山梨園芸高等学校

担当教科　社会

1. 視察等に関して特に主眼をおいた点

(1) タイ国について、東南アジアとしての地理的な状況・開発途上国としての政治的経済的状況などを自分の目で見、肌で感じること。
（気候、日常生活、産業、経済、政治、教育、宗教、ものの考え方など）

(2) 日本（ＪＩＣＡ）の経済・技術援助の現状、現地における役割、今後の課題等について理解する。

(3) 青年海外協力隊員の活動状況を見たり、悩みなどを聞くことによって一層の理解を深める。

2. 国際協力の現場で

(1) 参考になったこと

ア．最初の見学場所であったカセサート大学の研究所において、私よりもはるかに年配の方がタイの農業を取り巻く諸課題について真剣に研究なさっている姿を拝見し、頭の下がる思いであった。このことは他の見学場所においても同様であった。また、日本の大学に留学し、現地の大学や研究所で活躍している方にも何人かお会いし、嬉しく感じた。

イ．幸運にも日本の100％の援助で設立されたと説明を受けた、ＫＭＩＴＬの30周年記念式典に参加する機会を与えられ、得がたい経験をすることが出来た。この大学はタイで最も新しい国立大学として認可され、しかも工学系の大学としては最高の評価を受けていると伺い、感銘を受けた。

ウ．チェンマイで青年海外協力隊員４名（男３、女１）と懇親を持つ機会が与えられたが、日本での安定した職場を退職し、敢えて不利な条件の開発途上国に飛び込んで奉仕的な活動を志した心意気に感動を受けた。ただ、２年の期間はやや短く、3年は欲しいような感想を持った。

(2) 気になったこと

ア．日本の最先端の機器と技術を提供し援助していると聞いているが、タイの現状から見てそれらの定着や活用などが自力でどのくらいなされるか。それらが一般市民まで行き渡るにはまだ時間がかかりそうな印象を受けたが。

イ．協力隊員の帰国後の就職や生活保証。

3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

社会科の教員として、開発途上国に対する援助について生徒に指導していながら、その具体的な内容の一端を今回の研修で初めて知った次第である。また、協力隊員の活動についても知っている者はごく一部に限定されてはいないか。ＪＩＣＡ等の活動内容について多くの人に知っていただくために、パンフレット類だけでなく、副読本等を作成し高等学校なり各教育機関に配布し、更に一層の啓蒙を図ることが必要である。

4. 今後の教育指導に活かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

(1) 写真をスライドに編集し、授業や他の発表の機会に活用したい。

(2) 機会があれば、高等学校国際教育研究協議会の機関紙に載せたり、研修会などで発表したい。

5. 所感及び意見

(1) 研修時期及び期間

8月22日～29日であったが、後半の3日が学校の授業にかかったので、前にずらしていただければありがたかった。期間はもう少しゆったり取って10日ぐらいでも良かったのではないか。

(2) 研修日程及び訪問先

ア．ＪＩＣＡの計画によって様々な所を見学させていただいたが、交通事情や運転手の力量などにより、移動に時間が取られ研修時間が十分に取れなかったのが残念であった。

イ．タイの農村の生活に直接触れるような研修もあって良かったのではないか。

ウ．アユタヤ・チェンマイの見学は有意義であった。チェンマイにおいて時間に余裕があれば更に市民生活や宗教など研修出来たと思われる。

エ．せっかくの機会であるからタイ一国だけでなく、あと一国ぐらい近隣の国を含めての研修でも良かったのではないか。

(3) その他全般的な所感

ア．添乗員としてお世話いただいたＪＩＣＡの高田・村松様、現地で見学場所などの折衝に当たっていただいたＪＩＣＡの職員の方にお礼を申し上げます。

イ．タイの自動車の80％が日本製、いたる所に日本企業の看板が目についた。日本企業の進出はここ2～3年目覚しいと聞いたが、企業の利益は日本に持ち帰り、代わって国が援助す

る、いくぶんの矛盾も感じないわけではなかった。いたる所に華僑の店があったが、その地にしっかり根をおろした中国人の大陸性と島国日本の地域性・国民性を感じた。

ウ、バンコクの町並みはほこりっぽく極めて雑然とし、車と人の波は独特の喧騒を形成していた。しかし、それは活気に満ちたものであった。また、近代的なものと伝統的なもの、そしてスラムとまさに開発途上を伺わせるのに十分なものであった。北部のチェンマイは町を行く人々の顔の印象が我々に近く、山が見え、寺があり、なにか故郷に帰ったような安らぎを覚えた。タイ人は国王を中心に誇と自尊心を持ち、貧しくても卑下する様子も見えず、ベンツとおんぼろ自動車が一緒に走っても一向に気にしている様子も見えなかった。

エ、タイは日本と同じ仏教国ながら、その様相はかなり異なったものであった。寺は塔と本堂で構成されていたが、塔は円形で材質もコンクリート・レンガを中心に作られ、色彩はきらびやかで周囲の民家と著しい対比を見せていた。敬虔な仏教国のせいでだろうか、テレビ・雑誌とも女性の裸を強調するものは見かけなかった。

オ、日本人は財布のひもがゆるいのであろうか、見学に行った観光地では日本人を見ると片言の日本語で物を売り付けようとする光景が見られた。アユタヤの日本人町の跡でガラスの宝石を押しつけられ、断わるのに難儀をした。日本人の観光のあり方について考えさせられた。

カ、我々の行動はタイの人にどのように映ったのであろうか。私にとっては研修のつもりであっても、タイ人にはただの観光客に見えたと思うが。ほんの一週間程度で、しかも車の中から眺めた程度で「タイはこうだ」ときめつけることは、危険この上ないこととは思っている。

この度の研修旅行を通して、国際理解は先ず相手と直接ふれあい、相手を「好き」になることから始まり、同じ人間としての共通性と歴史文化・政治的経済的な違いを認めあうことが大切であることを感じた次第である。

私自身、タイとタイ人に好感を持ったことは言うまでもない。

氏　名　荻野　登
所属学校　埼玉県立久喜工業高等学校
担当教科　電気

私が、今回の高校教師研修に参加することになったのは、恥ずかしながら全くの偶然であった。本来、私が申し込んだ海外研修は埼玉県東部地区の自由研修だった。
ところが、幹事校の先生に申し込んだところ、今回の研修でタイ班の欠員があり、ぜひ参加して欲しいと頼まれた。応募期限も過ぎていたため、何もわからないまま忙しく応募したのがきっかけである。

私は、大学を卒業した後、メーカーに入社し、電子機器製品の設計、輸出をしていたことと、教師になって卒業生の数名が海外で仕事をする話を聞いていたことで、外国の情勢に関心があった。現在、日本はＧＮＰで世界二位であり、それに伴って、政府開発援助（ＯＤＡ）を拡大してはいるが、企業の海外進出の増加による経済摩擦や、思想の違い等によるジャパンバッシングが強まっている。その中で、私なりに国際理解教育の必要性を感じており、自費で何回か渡航し、生徒に還元していたことも今回参加した理由の一つである。
今回の研修の目的は、現代社会の抱えている多くの課題解決のための発展途上国の正しい認識と援助の視察である。そして帰国後、時代を担う高校生に、教育の場を通じ国際理解を深めさせることである。私としては、メンバー14名中、唯一、工業高校で電気を担当しているということで、タイ人の国民性及び技術力の程度に主眼をおいて視察してきた。

主なことについて書いてみると、まず初日はホテルに16時30分頃到着。庶民の生活を理解するため、近場のスクンビット通り、ブルーンチット通りを約10㎞自分の足で歩いた。露店、小売店、食堂、スーパー、映画館、交通機関等を視察した。この時驚いたことは、警官が22時頃から急にいなくなってしまったことである。しかし何事もなく、不安は感じなかった。また、困ったのは、地図を見せて道を聞いても、地図の分かる人がいなかったことである。店で話をするにも、英語を話せる人が少なく、話せる人がいても独特のアクセントの癖があって理解しずらかったことである。
この体験でタイの治安の良さと教育水準の低さを感じた。そして、この体験が今後七日間研修する上で大変参考になった。後で聞いた話であるが、義務教育は小学校までということである。したがって、年輩の人はたぶん地図の見方もわからないし、簡単な英語もわからないのだろう。そして、視察する度に、いろいろな所で大学まで教育を受けた者と受けざる者の間で貧富の差が大きいことを感じた。

二日目は、カセサート大学カンペンセンキャンパスに視察に行った。そこでの印象は、日本が忘れかけている活気のある授業、明るく楽しげな学生達、実生活に結び付いた教育、大学の研究所と農牧民との連携が存在していたことである。すばらしいと思った。

三日目は、モンクット王工科大学カラバン校に視察に行った。この大学は工学分野においては、トップクラスの大学であると評価を受けている。さすがに日本の大学でも見ることのできない高価な測定機器がたくさんあった。その機器は日本からの国際援助によるものである。しかし、授業内容は日本の工業高校のレベルから、最先端技術の手前まであって、何となくアンバランスな感じを受けた。「どれだけ測定機器を有効に使いこなしているのか」「段階的な部分を飛び越えて最先端の技術を学べば、先進国の技術にすぐに追いつくと思っているのか」と疑問に思った。何だかこの国の縮図を見た思いがする。

四日目は、観光ということでアユタヤ遺跡に行ったが、特に印象はなく、できることならフリーで研修したかった。

五日目は、タイの古都チェンマイに飛び、青年協力隊員4名に会った。偶然にも私の自宅近く出身の坂本さんという、ラジャマングラ工科大学教授の助手をしている人に会った。彼にモンクット大学で疑問に思ったことを聞いたところ、大学教授の平均的な知識は日本の大学生程度であり、一般の大学では、ほんとうに必要な測定機器がそろっていないことであった。その時、私は国際援助の難しさというものを痛切に感じた。

また、隊員の中には大学を出たばかりの女性がいたが、国際協力のため異国の地に来て、その国の人々のために尽くしている姿を見て頭の下がる思いがした。

六日目は、チェンマイ教員養成学校にいった。ここでの特徴は、教員養成とはいっても他の学科の人気が高いということである。教員は経済的な理由から人気がなく、また尊敬もされないということを別の所で聞いてがっかりした。それと同時に何ともいえない共感を覚えた。

七日目は、矢崎総業チャチェンサオエ工場を見学した。そこでは、自動車のワイヤーハーネスを作っていて、ほとんどタイ人の生活パターンとは異なる日本式の生産性の高い技術が導入されていた。例えば、二部制の導入、時間短縮のために工場用地の両端に建てられた食堂、流れ作業等の生産管理である。

中でも特に印象に残ったのは、従業員のほとんどが若い女性であり、腹の大きい人もいて、子供が生まれる直前まで働くということである。男性よりも女性の方が働き者で、真面目であるということを前もって聞いてはいたが、何となく「おしん」の時代をおもいだした。

全体を通して感じたタイ人の印象は、政治的にも経済的にも安定しており、気候的にも恵まれているため割合のんびりしていて、考え方が楽観的であるということである。学校も会社も週休二日制で、労働時間も短く残業があっても翌日に回す。一般生活では、一時間位は誤差の範囲であり、スコールがあればその場で、髪の毛や体を洗う人もいる。法律においても建前と本音があり、日本では考えられないことが起こっている。日本の援助についても、表面的には感謝しているが、先進国が援助するのは当然という考え方である。国王に対しても表面的には敬っているが、本音を聞いてみると違っている。前にも述べたことであるが、技術の習得についても楽観的である。

タイ人の男性は、一生に一度は仏門に入るたいへん信心深い国民であるが、小乗仏教であるため、自分本位の考え方をする人が多い。ここにもタイ人特有の考え方のベースがある様に思われる。また、タイ人は中国人や日本人にはチャイニーズ、ジャパニーズ価格というものを設定し、法外な料金を要求するが、白人には一目おくというアジア人独得の気質も兼ね備えている。

この様な日本と違った異国の風土の中で、日本企業の利益第一主義のアブソーバーとして、ＪＩＣＡの職員や協力隊員が、タイ国のために尽くしている姿をみてたいへん感銘を受けた。
まだ国際的には、「日本の援助は金は出すが、人的援助は少ない」と言われている。少しでもＪＩＣＡの職員や、青年協力隊員を手助けする方法として、外務省と文部省が連携し、職業高校の職員を夏季休暇を利用して派遣できる様になればよいと思う。そして、公務員から青年協力隊に参加しやすい環境を作り、民間企業にも広げていけば、幅広い国際協力及び理解ができる様になるのではないだろうか。

そのためには、国際協力のプロジェクトやＪＩＣＡ、青年協力隊員の活動等について、さらにいろいろなマスメディアを使って一般大衆に知らせる必要があると思われる。自分としては微力であるが、授業の中で、スライドを使いながら、今回体験したことを話したいと思っている。
最後に、わがままな教員13名を連れていって面倒をみてくれたＪＩＣＡの高田さん、村松さんに感謝をすると同時に、タイという国にも感謝したい。この国には、日本では、得難い自由気ままな生活が存在し、人間生活のもう一つの理想的な姿を見ることができたからである。

氏　　名　　杉 野 茂 樹
所属学校　　岐阜県立大垣北高等学校
担当教科　　英語

## 1. はじめに

このたび国際協力事業団（ＪＩＣＡ）主催の高校教師海外派遣研修タイ班に参加する機会を得た。８月22日～29日の８日間、タイ国の首都バンコクと北部の古都チェンマイを中心として、ＪＩＣＡの援助を受けている大学や研究所、バンコク日本人学校、民間企業などを訪問観察し、さらにチェンマイ在住の海外協力隊員との懇談などの研修をした。この研修を通して、タイ国の様々な現実を認識し、日本との協力関係の実態を把握した。そして今後、日本とタイとの関係はどうあるべきか、さらには国際理解はどう推進されるべきか、などについて考えさせられた。

## 2. ファースト・イムプレッション

北は青森県、南は佐賀県からの教師13名、ＪＩＣＡから高田さん、村松さんの総計15名が、８月22日午前11時、タイ航空機641便にて成田空港を出発した。６時間30分フライトした後、バンコク・ドン・ムアン国際空港に到着した。タイと日本の時差は２時間、タイが２時間遅れとなるので、到着の現地時間は午後３時30分であった。入国手続きを済ませ空港から外へ出ると、気温35℃のムッとした暑さに包まれ、街路樹には黄色やピンクの花があざやかに咲き乱れ、家屋のまわりにはヤシの木が林立しているのが見られ、いよいよ南国へ来たのだという実感を抱いた。バスに乗ってバンコク市内へ向ったが、走っている車、つまり乗用車・バス・トラック・オートバイのほとんどが日本車であり、たまに日本車の中にドイツのベンツ車が混っているという光景にまず驚き、日本とタイ国との経済的つながりの強さを知った。バスの窓からは、あちこちでビルの建設ラッシュが見られ、発展途上国のエネルギーが感じられた。

高速道路から市内へ入ってバスは鉄道の線路沿いを走っていたが、突然その線路の反対側に、さびたトタン屋根の小さな家屋が線路にへばりつくように建ち並び、住民の人達は線路を道路がわりに使っている光景が目に飛びこんできた。一方では高層ビルや高級ベンツ車、他方では貧民窟というコントラストの中にタイ国のかかえる厳しい現実の一端を垣間見た。
バスがバンコクの中心街へ入ると、車の多さに圧倒された。車はジーゼルエンジンが多いせいか黒煙をまき散らし、オートバイのけたたましい音も入り混って、通り全体がやかましく埃っぽいという印象を受けた。排気ガス規制はあるもののほとんど守られていないということである。しかし、

市街の人々は一様に明るく生き生きとしており、発展途上国らしい活気に満ちあふれているように見えた。

午後5時ホテルに到着し、鍵をもらって部屋へ入るとクーラーがよくきいており、ほっと一息ついた。やがてボーイが鞄を運んできてくれたので10バーツ（60円）のチップを渡した。タイ国ではサービスに対してのチップは習慣である。6時に夕食をとるためグループで市街へ出かけ、シーフード・レストランへ入った。シュリンプ、ロブスター、チャーハン、野菜のいためたもの、タイ・スープ、タイ・ビール、いろいろな種類のフルーツとタイ料理に舌鼓を打った。ただ、トム・ヤム・クンというタイ・スープのあの独特の強いにおいと辛さにはとても馴染めそうもなかった。

## 3. 主 な 研 修

(1) カセサート大学カンペンセンキャンパス

バンコクから西北80キロ、ナコンパトム県カンペンセンにあるカセサート大学を訪問。タイ国農業教育の最高機関であるカセサート大学の総合研究センター、農業機械センターにおける研究拡充と農業開発の実態を視察した。

① 両センターの主たる研究内容

ア．作物改良のための生物工学と育種（総合研究センター）

イ．農業環境と品質保証技術（総合研究センター）

ウ．農業機械化技術の開発（農業機械センター）

② 日本からの平成元年度における協力規模

ア．専門家派遣は長期が6名、短期が11名、研修員派遣は5名。

イ．機械供与は1億2,700万円。

(2) モンクット王工科大学ラカバン校（ＫＭＩＴＬ）

ＫＭＩＴＬは1961年に日本（郵政省、ＮＴＴ、ＮＨＫ、東海大学）の技術協力によって電気通信訓練センターとして発足して以来、専門学校を経て、1970年に国立工科大学の第一キャンパス（ラカバン校）に昇格し、1986年には独立した新国立大学となった。全国から理系の優秀な生徒を集めて人材育成につとめている。ＫＭＩＴＬの科学・技術分野における人造り教育は、タイ国政府が経済・社会開発を推進していく上で極めて大きな役割を演じることが期待されている。ＫＭＩＴＬ設立30周年記念式典に出席する機会を得たが、ゴーソン学長の演説から人材の育成、とくにエンジニアの育成がタイ国にとっては急務であることがわかった。一人当りのＧＮＰ2,000米ドルの経済水準を支えるためには、タイ国は西暦2000年に13万人の技術者が

必要であると推定されている。しかし現状では、技術者の保有数は全国で3万人強である。今後10年間にタイ国は10万人以上の技術者を、すなわち毎年1万人以上の技術者を生み出す必要がある。このことがタイ国の大きな課題になっているとのことである。

① 協力目的

電気通信・放送・データ通信・機械工学の4分野において、KMITLの教育・研究活動を強化し、タイ国における同分野の発展に資することを目的とする。

② 日本からの平成元年度における協力規模

ア．専門家派遣は長期が5名、短期が26名、研修員派遣は6名。

イ．機械供与は5,300万円。

(3) バンコク日本人学校

創設が昭和31年であり、世界中の日本人学校84校の中で歴史が一番古いとのことである。生徒数は小学校・中学校あわせて1,402名で、日本政府から教科書が無償で送られてきて、日本の教育基本法にのっとって、日本人が日本語で教育を行う。従って日本の学校への転校、日本の高校への進学が可能である。

我々が訪問した8月24日は夏休み中であり、校舎には生徒も先生も誰もおらず、学校長より学校の説明を聴き、キャンパスを案内してもらった。現在タイ国への進出日本企業は約800社にもおよび、生徒数がどんどん増えるということで、現在の校舎の隣りに8億円を投じて増築工事がなされていた。

## 4. タイ国から学んだこと

タイ国は日本と同様、歴史と伝統を有する独立国である。それにタイ国民の約94%が仏教徒（小乗仏教）で信仰心が厚く、男性は仏教の戒律に従い、生涯のうちに一度は授戒を求めることが守られている。それが原因であるかどうかはわからないが、一般に国民の人柄は明朗かつ温厚であり、国内の治安も極めて安定している。

経済面では、GNPは1989年で655億ドルと日本の40分の1、一人当りでは1,174ドル（約17万円）と日本人の20分の1であるが、年間経済成長率はここ2年間は10%をこえ、驚異的な成長をとげている。貿易収支は恒常的に赤字であるが、バランスのとれた外交を展開するなかで、観光収入と海外資本の入超のために総合収支では黒字基調となっている。

このように経済力においては日本におくれをとっているタイ国であるが、国全体が発展途上国から先進国へ脱皮しようとする意気に燃えていて、貧しくてもプライドを持ってたくましく堂々と生き

ていくという姿はまぶしいくらいであった。先進国になってしまって、物質的繁栄の上に何不自由なく暮らしている我々が忘れかけようとしている大切な何かを見つけたような気がする。これからは物質的援助だけでなく、若者達の人的交流を盛んにし、文化的交流・精神的交流をもっともっと積極的にすすめることが課題ではなかろうか。

氏　　名　　蜷 川 喜 信
所属学校　　愛知県立半田高等学校
担当教科　　社会

1. 視察に於ける主眼点

東南アジア諸国の中で、経済的に急成長をとげている国の実態をこの目で見たいと思った。そして日本との関係は、国家レベルの援助面においてだけでなく、国民的感情の上でどうなっているのだろうか。という素朴な疑問を自分なりに探ってみたいと思った。

2. 国際協力の現場での感想

国際協力とは単に資金・機材・施設等を富裕国から貸与するだけではダメなことは周知のことである。では、それに人材（技術者など）派遣を加えれば良いのであろうか。例えば、タイ国は私の目からみても非常に自尊心・誇りの高い国家であろう。そのタイ国に対する援助（各種のプロジェクトなど）において現時点で最も重要な問題は、わが国が先進国の立場から、いわゆるわが国自身の利害から（過去の援助がすべてそうだったとは思わないが）おこなってきた援助協力を見直しすべき時期にきていることではなかろうか。
確かにいままでおこなってきた援助は、飛躍的な成果をもたらしていることであろう。しかし、これらを継承・継続してゆくだけで本当によいのであろうか。わが国の、いや先進国的な尺度やリズムをもって推し進められた援助協力はなかったであろうか。タイ国が望んでいるから、あるいは世界的情勢のうえから必要だからと両国政府が判断したから、 ― などの理由で援助協力していいものであろうか。

タイ国は現在、日本がかつて60年代に体験した種々の矛盾をはらんだ高度経済成長時代に突入しようとしている。工業発展優先による公害汚染やスラム街住居の低所得階層の存在など解決しなければならない諸問題が内包されていると思う。
今本当に必要な援助協力は、タイ国自身の歴史的発達過程のリズムを考慮して、かつ日本が経験した同じ過ちを繰り返さないように慎重に助言してあげることではないであろうか。

3. 紹介すべきプロジェクト

≪カセサート大学研究協力フェイズⅡ計画≫

農業開発に関する基礎的かつ実践的技術研究センターが非常に充実していて、日本の研究者にとっても、日本国内でできない研究が可能であると思った。

≪国立衛生研究所プロジェクト≫

タイ国内のみならず東南アジア諸国の中心的拠点としての研究所となってもらいたい。

## 4. 今後の教育指導に関して

(1) 海外青年協力隊の活躍

協力隊として活躍されている方々から直接話を伺って、学校の生徒達にその実態と意義について話してゆきたいと思った。

(2) タイ国内の学校と日本の学校との交流提携

カセサート大学の付属校の校長先生から「将来的に日本の学校との交流をしたい。」という話しがあったが、現在の各都道府県単位での教育委員会を介しての交流提携ではなく、もっと直接的な学校間の交流が実現できないものであろうか。そうすれば、生徒間にある民族的違和感を緩和できるのではないかと思った。

## 5. 全般的所感

(1) 時期及び期間

可能ならば、8月の末ではなく上旬にしてもらいたい。なぜならば研修を終えて帰国するとすぐに新学期が開始されて、非常にあわただしいと思った。

(2) 日程及び訪問先

あまりにも内容を盛りだくさん過ぎて、移動の時間をもう少し考慮にいれて、研修の重点を教育関係に絞った日程にして欲しかった。

(3) 個人的所感

国際協力事業団の職員の方々のご苦労によって、無事に研修を終えることができ、非常に感謝いたしております。本当にありがとうございました。

私個人にとりまして東南アジアは始めてであり、衛生的な不安やら民族的に対する興味が入り交じっておりました。ところが、あにはからんや、飛行機に乗った時から帰国後も、あの一種独特の香りに包まれて、正直なところ参りました。食事も今流行のエスニック風のものが多く、馴染めませんでした。でも、いい経験になったと思います。

研修全体は、短期間という制限の中で精力的に廻ったと思います。欲をいえば、教員の集団なので、もっと現地の先生達や生徒達との懇談の機会を増やしてもらいたかったです。そして現

地の学校をもっと廻りたかったです。先生や生徒達の生の声をもっと聞きたかった。

この研修を通して得た経験を今後の教育活動に微力でも生かしてゆきたいと思っております。

氏　名　小 島 光 男

所属学校　大阪府立園芸高等学校

担当教科　農業

海外研修派遣などわが身にはとんと縁の無い話と思っていましたが、国際協力事業団のおかげでタイ国での貴重な体験をさせて頂きました。本当に有難うございました。同行して頂いた、村松、高田、両氏の心遣い、現地スタッフの皆様のサポートに対して重ねてお礼申し上げます。

さて折角の海外旅行、事前学習は関係書籍の講読に始まり領事館での資料あさりタイ語学習と続けば、我ながら見上げたもの。残念ながら、出発直前に行われた「近畿地区高校生国際交流セミナー」（二泊三日、150名）の事務主担者として夏休み返上の毎日、頭も体も海外旅行どころではありませんでした（そういえば青森から参加の宍倉先生、全国大会の事務局ご苦労さまでした）。せめて旅行ガイド位は買って行こうと書店に行くとそこは黒山の人だかり、海外旅行を10倍楽しもうとばかり盛りだくさんの写真と記事で溢れた旅行書の山、なんとなく気後れがして買えずじまい、そんな訳で事前学習は事業団から送って頂いた資料の精読だけ、こんな状態で臨んだ研修ですので、以下の文章はあくまで私の独断と偏見によるものとしてお読み頂ければ幸いです。

タイといえば東南アジアの米どころ、運河を行き交う小舟は食べ物から日用品まで満載し、住民はその生活の基盤を運河無しでは語れない。今時こんな調子で紹介すれば、わが国はフジヤマゲイシャと紹介しなければバランスが取れない。タイは東南アジアきっての優等生、経済成長は連続して年10%を越え、国内の政権闘争は別として外交的には360度等距離外交路線を堅持し、もはや開発途上国どころか日本を手本に中進国と呼べるだけのめざましい実績を上げている。しかし空港からホテルまでのわずか1時間弱の車窓からの眺めに、私はショックを受けた。荷台に鈴なりの人を乗せ疾走するトラックの群れ、スラムとおぼしき住居群、高層ビルの建築現場、最新式を誇る電気製品の巨大な看板、等。現在の日本で見慣れたものと遥か昔の出来事となってしまったことが一度に突きつけられたのである。そこには一種の懐かしさと同時に「まだこんなことを」という驚き、「日本といっしょやいっしょ」という安心感、見ないで済めば悩まずに済んだ貧困の現実、この国では日本の常識は通じない。

到着したその夜有志で夕食会。伊勢海老の豪華版お一人900バーツ（¥5,400）はちょっと贅沢かな、でもボーイさんは親切だったしチップは一人10バーツづつ集めてえーと、面倒だ100バーツ（¥600）あげちゃえ。そして翌日、ＪＩＣＡ事務所でのレクチャー。「タイの平均月収はいくらぐらいですか？」「3,000～5,000バーツを目処にお考え下さい。」。ちょっと待て、月収3,000

バーツといえば日当100バーツのはず。金満日本人、成金日本人、思い上がった日本人、東南アジアで浪費、現地経済混乱、やれやれ自分もそんな片棒を担ぐなんて、でもあのボーイさん嬉しかっただろーな。

こんな調子で研修は始まった。連日バスに揺られ見学へ、そしてそこに存在する立派な施設とそれを使いこなそうとする人たち、また継続して指導に当たられるＪＩＣＡ職員のみなさん、そして青年海外協力隊の若い隊員の皆さん。本当にご苦労の連続のはずなのに、その言葉からはタイの明日への希望に溢れた思いを感じました。

僅か一週間の滞在でタイの全てが分かる訳でもないが、そこには確かに我々が日本で日々営んでいる生活と同じことが繰り広げられているはずなのに、フォーリナー（外人）の私には、自国の価値観に捕らわれついつい極端な事例に目を奪われ、貧しさ、曖昧さに翻弄され自分自身の中で消化仕切れなかった。折角の一週間、もっと自分のペースでタイを味わいたかった。派遣ということ、団体旅行ということ、大阪の代表ということ、ちょっと気取ってバスに揺られ過ぎた。そのバスさえもトラブル続きで、時間ばかり過ぎてしまった。今にして思えばただただ後悔、タイを10倍知る方法をもっと研究しておくべきだった。

そこで今にして思う、「ＪＩＣＡタイ国研修派遣を10倍効果的に体験する方法。」

(1) 自己負担金は自己投資と考えよう。

どうせ「顎足付き」ではないのだ、飛行機代だけでも助かったと思い、その分現地で使おう。ではいったい何に使うのか、もちろん情報にである。７日間の滞在でガイドが付いたのは２日だけ、しかもガイド（案内）らしいことはあったかなー。あの長時間のバス移動、車窓からの景色の中でも質問したいことは山ほどあった。ＪＩＣＡの予定に入って無いなら自分達で雇えば良かった。何たって人件費は安いのだ。つまらんおしゃべりより的確な解答を得られる情報源としてのガイドはやはり全期間付いてほしい。

(2) 時は金なり、時は金で買え。

１日２カ所の見学、なんと余裕のあるプランと思いきや、どうして、朝７時集合、夕７時解散などという事になるのか。ここはタイです。としか言い様が無い。細かいことを言い出せば問題点はたしかにある。しかし現実がそうであるならそう受け入れるのがタイで暮らす法。公式な日程は半日で終わり、後の半日は個々の関心にそくした研修に費やすべきだ。そこでタクシーの登場。私の場合、専門が園芸（草花）なので、熱帯での園芸生産及び販売は最大の関心事であった。市内を何度か走るうちにナーセーリ（園芸店）が目につくようになり、何カ所かは手元の地図に書き留めたので時間があればタクシーで行く事もできた。見知らぬ土地（特に外

国）でのタクシーに勝るものはない。半日貸切り契約をして行きたいところを最初に指示すれば、後はラクチンラクチン。タクシーはすべてホテルで手配してもらえばまずまずのはず。路線バスや徒歩も本当の市民生活に触れられていいけど、短期の訪問者にはそれにもまして時間が惜しい。

(3) 調べるより聞く方が早い。

たとえそれが到着後であっても、自分の情報源は開拓すべきである。現地職員、協力隊員などから自分に合った情報の糸口を引き出して、明日のプランを立てることは出来る。要は現地の人間に勝る情報源は無いのだ。

はてさて思わぬ方向に筆が進んだが、私自身は東南アジアの国々が貧困から抜け出し、一刻も早く民主的で福祉に目を向けた国作りを成功してほしいと願っている。しかし現実の社会は、持てる国が持たざる国の資産を当てにし、持たざる国もまた目先の利益のためにそれを切り売りしている場合が多い。ここで我が日本はその悪玉としての役どころを負わされてしまう。たしかに車窓から見えた広大なエビの養殖池。現在は枯れ株の林となった、かつてはマングローブの生い茂っていたであろう海岸線など、それらのさきには上得意としての日本が見え隠れする。しかし自分自身の全てをこの地での職務に費やし、さらにはこの国に惚れ込みその一生をこの地で過ごさんとされる方もおられるのである。援助とはつくづく難しいものである。問題を指摘することは容易であっても、いざ改善策をといわれても。ただ今の私には、アジアの国々（人々）に対して正しい知識と日本もアジアの一員であるという自覚を持った生徒を、一人でも多く卒業させていくことが、その答えの代わりに成るようにより一層努力していきたい。

氏　　名　　島　羽　紘　史
所属学校　　広島県立安芸府中高等学校
担当教科　　数学

## 1　はじめに

タイ班の編成は、北の青森、宮城、神奈川、山梨、埼玉、岐阜、愛知、大阪、広島、山口、徳島、高知の各府県と九州の佐賀県からの13名とＪＩＣＡより高田、村松さんの計15名です。出発は、残暑のまだ厳しい８月22日(水)で、旅行シーズンの終りとはいえ、成田空港は出入国の人でいっぱいでした。普段はもっと混雑しているとのことです。広島県出身の私と高知の先生二人は新宿ワシントンホテルに泊って、そこからリムジンバスで成田に着きました。他の人達は友人のところ、恩師のところ、自宅から、スカイライナーで集合されたようです。何人かの先生は海外経験も豊富で出国手続など慣れた様子で落ち着いているようですが、海外に出かけるのが初めての私は、昨日の説明会で年齢が上ということで団長という役目を命ぜられたこともあって、なおさら緊張していました。

成田 ― バンコク間は６時間であるが、時差が２時間あるので午前11時半に飛び立った飛行機は、バンコクの午後３時30分、ロドムアン空港に到着しました。生水を飲まないようにという注意に従って、さっそく10バーツで水を買って飲んでいた先生がいました。すぐにチャーターした中古のバスに乗り込み、不安と期待を抱きながら外国での第１歩を踏みだしました。
バスにはカラフルな絵が描かれて、おもちゃを大きくしたような乗り物でした。エアコンは良くきいており、宿舎までの窓の外の風景はタイ国紹介の本で読んでいたものの、まさしく「百聞は一見に如かず」で建物、車等は異国情緒たっぷりでした。外車にまじってトヨタ、ニッサン車の多いなか、広島のマツダ車を見つけて、つかのまの郷愁をおぼえました。

片側２～３車線の巾の広い道路ですが側溝は完備されていません。サムロといってダイハツの軽三輪車ミゼットを乗客用に改造した乗り物が、バタバタと大きな音をたてて通りを疾走する光景は、いかにもバンコクらしい。市内バスの正面に大きく書いてある番号で行く先が決まっているそうですが、ドアは開けたまま、あるいは外してあるのか、車検制度の整った日本では考えられない風景ですが、危険な反面どこかのどかな感じがしました。線路の片側にトタン屋根のバラック建築が続いていましたが、30年くらい前の広島駅前のようであり、貧富の差が大きいようにみえた。午後６時頃、スクムビット通りから少し入ったところにあるアリストンホテルに着き、夕食は近くの海鮮レストランで豪勢に新鮮なエビ、カニ、タイのビール、クロスターで全員無事到着を祝し、乾杯しました。

## 2. ＪＩＣＡ・タイ事務所での説明

日本大使館に隣接しているＪＩＣＡ事務所を訪問、係からタイ国の政治、経済、教育、文化、社会について説明があり、海外視察に際しての主眼であるＪＩＣＡの海外協力の実態を知ることができました。

タイ国は立憲君主制の国家で、チャクリ王朝９代目のプーミポン現国王がトップに立つ国です。国王は三軍の総師権をもち、国教である仏教の最大の守護者であり、重要な国家的行事を司る。この国において、絶大な影響力をもつ存在です。
首相はほとんど軍部の出身者で占められ、実質的には軍の意向を反映した政権が続いています。議会制民主主義を建て前としながらも、頻繁にクーデターが繰り返され、憲法は1932年に制定されて以来、20回以上も修正されてきたという不安定な政治の歴史があります。現在のチャチャイ首相も政党、軍、国王、財界の支持とバランスの上に成立しています。過半数を制する政党がなく、連立政権が続いています。ちなみに共産党は非合法で、総選挙の投票率は平均40％、国会は二院制です。ＧＮＰは日本の$\frac{1}{40}$、一人当たりでは$\frac{1}{20}$で、教育は６・３・３・４制で、義務教育は小学校６年間です。識字率は91％、エリート養成の大学は（大学生の数は同世代の人口の10％ぐらい）国立16校、私立25校です。経済的には労働人口の７割を農民が占める農業国ですが、近年、急速に工業部門が伸びて、ここ３年連続で経済成長率は２桁です。

繊維産業はすでに衣料品がコメを押さえて輸出のトップに立つところまで成長してきているし、他の製造部門でも人件費の安さに引かれて日本や台湾、香港からの投資、工場移転が急激に増えています。対日感情は基本的には良好ですが、我が国の経済のオーバープレゼンス、タイ人のプライドが重なり、複雑な側面も指摘されています。
ＪＩＣＡの事業については、専門家156名、プロジェクト22件、開発調査16件、無償資金協力12件、研修員年間350名、開発投融資10件、協力隊員38名です。これほどの大事業であるとは知りませんでした。驚嘆するのみです。

## 3. カセサート大学カンペンセン・キャンパス視察

バンコクの西方80㎞にあるタイ中部のナコンパトム県カンペンセンにあり、タイ国農業教育の最高機関です。
カセサート大学の総合研究センターは、研究能力の拡充を通して農業開発に寄与する研究を行う目的で設置されました。協力の要請については、研究の強化・充実のため研究計画および農業の普及、

機械化計画の協力をしています。主なものは、作物の改良のための生物工学と育種、農業機械化技術の開発、農業環境と品質保障技術等です。日本の国立大学で博士号を取得された方が研究、指導の中心的役割を果たされています。近くにある付属小中学校も授業参観しました。タイ国では年1回、先生に感謝する日があるそうですが、日本にもこういう日がほしいものです。
日本の学校との交換留学のようなことを強く希望しています。
また、中学校の義務教育化の必要性を強く訴えています。

4. ＫＭＩＴＬ（モンクット王工科大学）30周年記念式典参加

簡単な式典でしたがゴーソン・ペッスワン学長が司会、挨拶と全部とりしきるという日本とは違った方法で開催されました。日本の援助、具体的にはＮＴＴ、東海大、ＮＨＫ、ＫＤＤ、そしてＪＩＣＡに対して深く感謝されていました。
日本でいう東工大にあたる大学で、エリート・エンジニア養成に力を入れており、ここの卒業生は企業から引っ張りだこだそうです。
タイ国の人材育成としての大学に対して、ＪＩＣＡの専門家には多大の貢献をしてもらっているが、タイ国の研究者が日本に留学するための門を少し広げてもらいたいというコメントがありました。

5. 泰日協会学校（バンコク日本人学校）

丁度20日間の夏休みで日本人の校長（タイ側と日本側の二人の校長がいる）の説明がありました。この学校は日本政府に認められたものであり、タイ国政府からも公認された小・中学校です。教員は2年以内にタイ文部省が認めるタイ語講座（120時間）を履修しなければならない。このことは他の在外日本人学校には見られない特殊なケースであります。生徒は東京近郊からが60%、やはり悩みは高校進学、高校教育のようで、中学2年が終ると日本に帰る生徒が多いとのことであります。広島県は帰国生徒特別選抜枠をもっている公立高校があり、保護者の希望に十分答えていると思います。日の丸を入学式・卒業式等で時折掲げることができると喜びに満ちた表情でいわれたのは印象的でした。
当地でスコールをはじめて経験したした。話しには聞いていたが激しい雨でした。

6. アユタヤ視察とバンコク市内視察

貸し切りのマイクロバスが遅れて出発、アユタヤまでトロトロ走るので予定の時間に遅れましたが、

これで立腹してはいけない、タイ時間、タイ時間。車内から見る風景はどこも見る価値のあるものばかりでした。完成したばかりの資料館、博物館、アユタヤ時代の仏像、木彫の壁など多数収納、展示してありました。日本人町跡は17世紀前半、朱印船貿易にたずさわった山田長政ら日本人約2,000人が住み、日本人町を形成していたといわれています。現在は「アユタヤ日本人町の跡」と記し、山田長政を祀った小さな神社をとり囲んだ公園ができていました。日本人ほどタイ人はその存在を知らないようです。土産売が、しつこく売りつけてきて、ことわるのに大変であったが相手も必死であり、私もついに協力してしまいました。

7. チェンマイ

バンコクから約700 km、海抜300 mの高さにあるタイ国第二の都市で、北部で一番大きな街であります。飛行機でバンコクから1時間、日本でいえば京都や金沢といったところで、シルク、木綿布、銀製品、傘、木工の産地で有名です。山の中腹（1,073 m）にある有名な寺院、ワット・プラタートは時間がなく登れなかったが（チェンマイを訪れる観光客は必ず登るというものであり、残念に思いました。）、市内の古い寺院をいくらかみてまわりました。ある古い寺院でカゴに入ったスズメを売っているのに気づきました。これは食用にするのではなく、寺院に参拝したあと、その徳を他の生き物にも分かち与え、さらなる幸福を呼び込むためのパフォーマンスに使われるものでありました。さっそく20バーツで買った2羽をその場で、カゴを開いて空に放ち、幸福を呼んだわけです。

夕方から4名の隊員と懇談しながら夕食をともにしました。チェンマイ教員養成学校で日本語指導の三浦義章さん、メジョー農科大学でコンピューター指導の小暮洋一さん、ラジャマングラ工科大学で印刷機械関係の指導の坂本晋さん、同大学の陶器指導の樫村久美子さん、皆さんともによく頑張っておられ、外国の発展に充分寄与されている様子がうかがわれました。私達の指導の当面の課題は、この青年達の後継者を育てるということでなければと強く感じました。
チェンマイ教員養成学校では広島大学で研究された教授が通訳で詳しく説明して下さいました。
学生の服装は清そで白いブラウスで黒いスカート、簡単なジーパンに白いシャツといった日本と同じような姿です。どの学生も真剣で、自信をもっているように見えました。時代の流れか、新設された観光科がとても人気があるとのことです。

タイ国7泊の海外研修でありましたが、私にとって非常によい体験であり、教えられることの多い研修でありました。
日本の海外協力は大切であるということがよくわかりましたし、特に青年海外協力隊の活躍ぶりに

は尊敬の念を表したいと思います。視察のみならず、タイ国の人情や気候・風土にも肌で触れることができ、本当に充実した訪問でありました。国際理解教育に携わる者としてこの経験を生かして、今までにもよく言われてきた指導の目標を記して終ります。

"日本と諸外国との生活や文化の違いを正しく理解して、自分と異なる考え方や、生き方をする他者の存在を認め、それらを尊重することの出来る能力や態度を養うこと。"

私達13名は無事、元気で研修を終了しました。

いろいろ、お世話をして下さった関係各位に心から厚くお礼申し上げます。

氏　　名　村岡　　章
所属学校　山口県立奈古高等学校
担当教科　農業

タイのゆったりとした時間の流れ方とこまやかな人情に接して以来、日常の多忙さに振りまわされ、自分自身を失ってしまいそうな日々をおくっている私にとって、ふと私自身を振り返えることを教えてくれています。"マイペンライ"という言葉が、タイ人批判の言葉としてよくでてきますが、私にとっては苦になりませんし、反対に、自分自身を見失わないためのお呪いのように響いています。

今回のタイへの研修は、私にとって２度目のタイ行きとなりました。１回目は、タイ北部の農業・農村の事情を知るために、約１週間チェンマイ北部の山村に滞在し、農村を見て歩いたり、農業の体験（田植えや除草）をしてきました。この時は、農業高校で作物を教えていたので、米の生産現場、農民の生活が知りたくて、同僚の教員と２人でいきましたが、日本企業の進出と農村の貧しさに驚き、一方、すばらしいタイの若者と友達になれたことが収穫でした。今回は、ＪＩＣＡの海外研修の機会を与えられ、タイと日本の関係をしっかり捉えて帰りたいと考え、参加しました。特に、批判的に言われているＯＤＡの実情とタイ人の日本人感、そして、我々日本人のタイにおける姿をこの目でしっかりと学んできたいと思い参加しました。そうすることにより、我々日本人の生き方が自ずと見えてくると思うからです。そんな思いを持ちながら参加してみて、多くの驚きや落胆、そして、考えさせられる場面にでくわし、たいへん重いタイ研修になりました。

ドムアン空港を降りたち、宿舎に向うなかで、まず第一の衝撃を受けざるを得ませんでした。それは、スラムが昨年より広がっていることとビル建設がすさまじい勢いで進んでいることです。しかし、それにもまして、衝撃を受けたのは我々同行の教師の行為です。我々が冷房のきいたバスで空港から宿泊場所に向っているとき、鉄道沿いに密集してスラムがあり、様々な生活風景を見ることができました。水浴や食事、子供たちの遊ぶ風景など、そんなスラムの風景を何のわだかまりもなくパチパチとフラッシュつきのカメラで写真に撮る神経 ― 日本人のタイ人に対する姿勢が如実にあらわされている。ワクワクとした気持ちが一変にふっとんでしまい、これからはじまる研修旅行の行方を暗示しているようで、暗たんたる気持にならざるをえませんでした。

第二のショックは、到着したその日の夕食（私は、定刻集合という約束事を守らなかったため、参加できなかったのですが）。旅行客相手のシーフード・レストランで900 B（バーツ）の食事をしたと聞いた時です。900 Bといえば、東北タイでの約半月分の給料に相当する額である。「ちょっ

と、リッチに」という範囲を越えていると思います。残念ながら、これが我々教員の現実と考えなくてはなりません。第一日目のカセサート大学カンペンセンキャンパス。農民のための技術を開発しようとしている研究機関と思われました。職員の熱意がつたわってきましたが、仕組みと機構が農民にどのように浸透し、どのように活用されているかが知りたいと思いました。気になった点として、ＪＩＣＡのマークがはいっている青い色のシールを、何故、供与した器材に貼らなくてはならないのかが疑問でした。このシールは２日目に行ったモンクット王工科大学ラカバン校でも見ることができました。青いシールのついた器材を使って学ぶ時、また、仕事をする時、どんな思いがするのだろうかと、ふと考えてしまいました。

たしかに、技術系の大学において、技術水準の高い日本に対する期待は相当なものであり、実際に、器材の供与や技術援助は行なわれ、成果を上げつつあるのではないかと思われました。（しかし、その成果はどちらの方向に向って走って行くのだろうか。）チェンマイの教員養成所で聞いた『タイの若者の志向が、第一が工業系、第二が医者、第三が商業系、そして第四に農業系である。』と聞くとタイが急激な工業化を推進し、東南アジアの中心国を目指していて、それが達成されつつあると感じられます。そして、「日本のように」というタイの若者の志向があるように思います。とにかく、タイの国中が日本製の自動車、オートバイ、家電製品等の品物で埋めつくされているんですから。

帰国後、「日本人ごっこ」（日本大使の娘になりすましたタイの少女の足跡を追うノンフィクション）という本を読みましたが、日本人は「憧れの的」になり、タイは日本の「豊かさ」を目指しているのではないかと思われます。しかし、私はタイの人々に日本の「豊かさ」を目指して欲しくありません。なぜならば、今回の研修で私がひそかに楽しみにしていたことに、前回の研修で知り合った民間の農村開発プロジェクトに参加していた青年たちに会うことでありましたが、残念にも再会することが出来ませんでした。それは、たった１年半の間に、一人は日本の商社のタイ事務所に就職してしまい、もう一人は日本人のタイでの土地買収のガイド役として働いていると聞いたからです。日本の「豊かさ」がタイの人々の生き方を狂わせているのではないだろうか。

帰国してから、最初のＨ・Ｒでタイでの出来事を生徒たちに話しているとある生徒がひやかしで、「先生！女買ったやろ。いくらやった？」と聞きました。やはり、東南アジアは買売春の国であるという認識は深く浸透しています。私は、カラワンというタイのフォークグループのミュージックテープが取り持つ縁で、売春宿の片隅で、従業員の人々と家庭的な雰囲気で食事をとる機会がありました。しかし、カラワンというグループが貧しい農村部の人々のために歌っているんだということを知らされ、この売春宿の従業員の人々が農村部からやってきて、50Ｂのミュージックテープを

高いと驚き、彼等の口から「貧しいものは助けあうんだ」と聞かされたとき、日本人である私には言う言葉もありませんでした。せめて私に出来ることは、学校において、タイの農村事情のスライドを使った授業や民間の農村開発プロジェクトで作られた民芸品の販売等をとおして、タイの人々の状況を知らせ、かつ、我々日本人のあり方を考える機会を作ってゆくことだと考えています。

氏　　名　北 原 顕 彦
所属学校　徳島県立板野高校
担当教科　英語

1　視察等に関して特に主眼をおいた点

日本の資金的・技術的・人間的援助がタイ国において、どのように現地の人々に受け取られ、活かされ、定着しているのか

昭和30年代後半の高度成長以来、日本は工業で国をおこし、大量の工業原料を東南アジアを含む世界中の国々から輸入し、その一方でこれらの国々に工業製品を輸出してきた。東南アジア諸国には（今回バンコクの路上での日本車のように）日本製品が満ち溢れている。彼らにとって物質的には非常に身近な国ではあるが、では日本や、日本人に対して好感を抱いているのだろうか。昭和40年代中葉、当時の田中角栄首相がASEAN諸国を訪問した時、バンコクにおいて学生を中心とした大規模な反日デモ、日本製品の不買運動、日本企業への投石があったことからわかるように当時から余り芳しいものではなかったと思う。

我が国は機会あるごとに「日本はアジアの一員」であると歴代の首相が言ってはきたが、私はこの言葉が現実を100％反映しているとは思わない。一般的に日本人は欧米人には卑屈なくらい低姿勢で、また意欲的に情報を取り入れ、「舶来品」という名の商品を買うが、アジアの人々に対しては傲慢なくらい高姿勢で、また無関心である。更に、海外在住の日本人は大抵日本人ばかりで固まって集団で生活・行動し、なかなか現地の人と交わろうとしないし、また、現地の言語や文化を積極的に学習したりもしない。東南アジア諸国において華僑が政治的、経済的に支配的な影響力を及ぼしているにもかかわらず、現地の言語を習得し、文化や宗教・価値観を尊重し、現地人の社会に解け込んでいてそれほどの摩擦を生んでいないのとは好対照である。

近年我が国は国際的な援助には「金は出しても人は出さない」と批判されることがよくある。キリスト教の「よきサマリア人」の教えが、社会の根底に存在する欧米諸国には寄付という金銭面だけではなく、人的な援助を尊ぶ風潮がある。「困った人がいたなら、まず自分に何ができるのか」それを真剣に己に問う人々が必ず社会にいる。
しかし、人的援助は何も西欧諸国の専売特許ではないはずだ。我が国からタイ国を含む発展途上国へ出かけ、現地の人々に解け込み、技術や情報を教える一方で赴任地の言語や文化を理解するという相互理解がどのように行われているのかに特に主眼をおいた。

## 2. 国際協力の現場で

### (1) 参考になったこと

カセサート大学をはじめ、日本人技術者の研究・協力がタイの農業技術・生産性の向上に大きく寄与している点

カセサート大学に隣接する農業改良普及所において、2～4週間単位の短期農業技術講習、関係図書・ビデオ・スライドの刊行、ラジオ番組の放送を繰り返し行い、実際に農業に従事している人々が生産性の向上に結び付くような情報を提供している。

大学への進学率が今なおひとケタ台のタイ国においては、いくら大学内での研究が進んでもその研究の成果がすぐ一般農家の生産性向上には結び付かない。研究成果を普及するために農家の人を講習会（授業料無料）に招き、研究成果を伝達する。簡単に来ることのできない人や、参加した講習以後の新しい情報の欲しい人のためにパンフレットを発行している。

### (2) 気になったこと

最先端の技術供与・援助が相手国の国民全体の生活水準を上昇させることができるのか

8月24日の午前中、KMITL（モンクット王工科大学）を視察したとき、私達がそこで見たものは、内燃機関の効率、排気ガスの分析実験、学生一人に一台の割合で使うことのできるコンピュータを使っての学習、ファイバーケーブルを使った光通信の実験、マイクロウエーブ送受信実験など日本の大学工学部でのカリキュラムと全く変わらない内容であった。ところが、大学から一歩外へ出れば、もくもくと黒煙をはきながら街角を疾走する自動車、建設現場での人海戦術による建築工事、故障がよく発生する公衆電話、過変調気味のラジオ放送など最先端の技術の発展ぶりに一般市民の生活がついていっていないように思う。バンコクに着いて間もなく喉が痛くなって、自動車の排ガスの凄さに驚き、排ガス規制について尋ねたところ、規制する法律はあるのだが実質上機能していないとの由。その法律を厳密に実施すると、例えばバンコクの市営バスの殆どが動かせなくなるというのである。大気汚染がひどいため、交通整理の警察官の肺ガンによる死亡率が異常に高いというのである。

技術供与・援助の際、相手国（政府、およびその関連機関）はコンピュータ技術にしろ、バイオテクノロジーにしろ、何しろ現在日本で最新、最先端のものを欲しがっているようであるが、一般国民の生活向上に結びつかない技術などというものは所詮、その国には根づかないだろうと私は思う。日本では何か新しい技術が生まれ、商品化して採算性があることがわかったとき、メーカーはその製品をコマーシャルに乗せ、消費者に買わせようとする。やがて需要が生まれ、後発メーカーは遅れを取り戻すため、より安く、より高性能な商品を開発・販売して競争する。

また、消費者側もより安く、より良いものをメーカーに要求するので、メーカーもその要求に応じ切れなければ、たちまち他社との競争から脱落してしまう。これは、戦後行われたメーカー各社の競争の中で、洗濯機、冷蔵庫、カラーテレビ、自家用車、電卓、ＶＴＲ、ワープロがどのように普及していくと共に、安くなったか思い出していただければ、すぐわかっていただけると思う。

ＪＩＣＡも既によく気づいていて、このようなことは何も今更私が言うこともないとは思うのだが、技術供与・援助の際、相手国（政府、およびその関連機関）には、日本の技術進歩の裏にはメーカーの競争と消費者の飽くなき要求があることをもっと強調する必要があると私は思う。

3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

タイにおけるＮＩＨ（国立衛生研究所）の研究成果

８月29日午前中に見学した国立衛生研究所において、タイ国を含む熱帯地方で頻発するデング熱、黄熱病、回帰熱等の治療用薬剤、ワクチンの中で私が最も関心を持ったのは、毎年夏、日本でも発生し、時には死者を出す日本脳炎ウイルスに対するワクチンであった。当地タイ国においても日本脳炎は一般的な病気らしく、その予防、治療の研究は日本からの研究援助とあいまって非常に進んでいるようである。日本脳炎ウイルスに対するワクチンがタイ国で発明されたことは日本脳炎のご本家である我が国では余り知られていないので、これをＰＲすれば日本国内で大いに関心を呼ぶと思う。

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること。

今回収拾した資料を元に生徒の目をもっと東南アジアに向けてやりたい

今回の研修旅行で訪問するまでの私を含め、かなりの日本人は東南アジア諸国について殆ど知らない。都市部では物貰いの子供たちがたむろし、農村部では水牛が泥田の中で耕作しているぐらいにしか思っていない。これは情報の欠如が大きな理由だと思う。自分で撮影した写真やパンフレットを折りに触れ授業に活用して、東南アジア諸国に対する興味を持てるようにしたいと思う。

5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

時期は、８月中旬に出発するほうがよいと思う。

期間は、チェンマイでの滞在期間をあと一日長くしたらよいと思う。

(2) 研修日程および訪問先

今回のものでよいと思う。

(3) その他全般的な所感

現地のバス運転手は道路をよく知っている者を雇ったほうがよい

ＪＩＣＡが配布した、「タイ研修日程」表の上では時間的余裕は非常にあるはずなのに、予定通り着いたことは殆ど無かった。例えば８月28日の午前中、バンコクのアリストン・ホテルからＮＩＨ（国立衛生研究所）まで約２時間で到着するはずだったのに、実際には３時間半もかかってしまった。現地の運転手に地図の見方を知らないものが多いのには驚いてしまった。地図を見ればもっと短い距離で行ける道があるにもかかわらず、自分の知っている道しか走らない。地図を見せて、現在地を訊いても、「わからない」という返事。私自身の感覚ではとうてい考えられないものだった。同日の午後、訪問予定だったタイ矢崎総業への到着も大幅に遅れ、工場内の視察は文字通り駆け足だった。たまりかねた我々は、帰路は地図を見ながら運転手に指図してバンコクまで帰ったが、実のところ我々の地図も余り詳しいものではなかった。

一つの目的地から次の目的地への移動に関して、交通機関は時間通り運行するのが当然だと考え、また何事にもせっかちな我々日本人の国民性を痛感する機会を与えられたという点では評価できるが（これもひとつのカルチャーショック）、なお改善点であることには変わりがないと思う。

英語が通じないのにとても弱った

大学などの一部の場所を除けば英語はあまり通じない。ホテルのフロントデスク係の女性にしても、"How much ？"くらいならともかく、少しこみいった文、例えば"The water coming out to the bathtub is not hot."等になるともうお手上げで、四人の係のうちの英語に堪能な一人に助けを頼む始末。随分不自由な思いをした。きちんとした文で言ってもわかってもらえないことが多かったので、しまいには、"Water, please."" Soy sause."のように単語を並べるようにしたほうがはるかに伝わり易かった。

冷静に考えてみれば、タイ国は日本同様、西欧諸国に植民地化されなかった数少ないアジアの国であり、英語を学習する中学校への進学率が約40％、限られた見聞からではあるが自国語であるタイ語があれば国民同士のコミュニケイションに問題はないようなので、インドにおける英語のように、共通語として外国語が入り込み、定着するチャンスはないようである。

日本との人的交流を望んでいる人がいた

8月23日午後に訪問したカセサート大学の中には附属小・中・高等学校があり、そこへも視察訪問する機会があった。校内視察（授業参観）のあと校長を含む教員と懇談を行ない、高校生の交換留学を希望しており、日本側の相手校を捜しているとのことだった。これが実現すれば非常に素晴らしいことだと思う。日本人の大人同様、日本の高校生も東南アジアについては殆ど知らない。高校レベルでの交流をはかり、両国の将来を担う若者の相互理解を促進しなければいけないと思う。

氏　名　林　　久信
所属学校　高知県立高知園芸高等学校
担当教科　農業

私達１５名は平成２年国際協力事業団が行なう高校教師海外研修派遣教員としてタイ国視察研修をしましたので報告させていただきます。

目的

開発途上国に対する正しい認識と国際協力理解を深めると共に我が国の国際協力の現場や、訪問国の実情を直接視察して、開発教育（国際理解教育）が一層効果的に実施されることを目的として参加いたしました。

研修内容

事業団事務所訪問、カセサート大学視察、日本人学校視察、タイ国国立衛生研究所視察、モンクット王工科視察、日本企業視察（矢崎工業）、

ＪＩＣＡタイ事務所にて

概況１９５８年９月大使館内に設置され、１９８６年４月現在地に開所、敷地面積１７４０㎡延床面積９６１．３６㎡、受付、電話交換、守衛、清掃、施設管理業務等は外部に委託。年間予算１０億円、構成人員、日本人１４名、現地補助員１７名。

事業内容

専門家派遣、プロジェクト方式技術協力、開発調査、無償資金協力、帰国研修員同窓会、開発投融資、協力隊員派遣事業等。

タイ王国概況

タイは歴史と伝統を重んじる独立国である、タイ族は中国西南部から南下、王国の基礎は１３世紀のスコータイ朝によって築かれアユタヤ朝、トンブリ朝を経て現在のラタナコーシン朝に至る。１７３２年の立憲革命により、専制君主性から立憲君主制に移行した。

政治について

立憲君主制、元首：プーミポン．アドウンヤデート国王、首相：チャチャイ．チュンハワン退役陸軍大将、内閣：タイ国民党、社会行動党、民主党、民衆等、連合民主党、大衆党の６政党による連立内閣。政府機構１４省庁。国会：２院制、上院議員定数２６７任期６年、２年毎に１／３改選、首相の推薦により国王が任命。下院議員定数３５７、任期４年直接選挙。政党いずれの政党も保守政策面で大同小異、共産党は非合法。地方行政については県、郡、村、県知事はバンコク首都圏を除いて内務大臣による任命制。

外交について

ＡＳＥＡＮの結束の強化、日米等西側先進国との関係強化、中国との良好な関係の維持、近隣諸国との関係改善及び共産圏諸国との経済外交の強化を基本路線として１４１カ国と外交関係をもっている。

軍事について

総兵力２５．６万人、１８～３０才の男子は２年間の兵役義務で陸、空、海、の３軍からなり国王が国軍を統帥している。

経済について

１９９０年度国家予算は３３５０００百万バーツ、観光収入、海外資本の入超が経常収支の赤字を上回って総合収支として黒字基調となっている。

教育社会について

１９７８年より６．３．３．４制を採用、義務教育は小学６年間、大学は国立１６校私立２５校。

以上のようなタイ事務所資料を頂き、タイ国を理解する上で役立ちましたご親切有難うございました。

視察研修について

事務所資料タイ事情を頭において視察研修に望みました。各大学ではＪＩＣＡ職員を始め協力隊員の活躍を拝見して、他国での活躍に頭の下がる思いをしました、タイ国はまだまだ技術水準は低い様に思えましたが、ＪＩＣＡのさまざまな協力、経済的援助、人的協力によって、多いなる活力に満ち近い将来飛躍的な進歩の期待できる国だと思います。モンクット王工科大学のゴーソン学長先生の、人材育成が急務と語られる真面目で誠実そうな人柄、タイ国発展の礎となるような思いをしました、国立衛生研究所では新しい機械や施設となっており日本人協力者の力添えによって研究が成されている姿を見てこれがが国際協力だと思った。カセサート大学研究協力では農業技術向上生産性向上に努力している姿が伺えた。

日本人学校視察においては、企業進出と共に児童生徒数の増加など日本とタイ国との深いかかわりあいを感じました。

まとめ

タイ国の現状をかい間見て国際協力の重要性も感じた、まだまだゴム草履で生活する人々、繁栄と貧困、ダンプが土を満載して国道を走る、セラード開発や工業団地造成、広々とした養殖場、道端で売る鳥の丸焼き思い起こせばまぶたに焼き付いています。

タイ国民は日本の企業進出、無軌道な観光客の増加、対日感情は基本的には良好といわれるが、経済面でのオーバープレゼンス、タイ人のプライドが重なり複雑な側面を指摘されると聞く。

今後は旅行者の節度、企業経営者の良心、協力者の心、思いやり、相手を理解する心、相手の国の事情を理解し、思いありのある、暖かい国際協力をして頂きたいと思います。

事務所の方々ご指導頂いた皆様方には感謝の気持でお礼申し上げます。一緒に研修された各県の先生方にはご健勝にて活躍下さい、ありがとうございました。

氏　　名　中 村 寿 志

所属学校名　佐賀県立唐津工業高等学校

担当教科　社会

1．視察等に際して特に主眼をおいた点

(1) タイは列強によるアジアの植民地争奪の際、緩衝国となって東南アジアで唯一の独立国である。しかしながら依然として今日でもモノカルチュアの経済である。この経済構造から脱却させることが難しいといわれているが、その要因はなにか。

(2) 海外援助によって開発途上国がどの様に変っていったか。

(3) タイ国の気候、風土等の自然的情況に触れ、経済、文化社会教育事情等を学びとる。

2. 国際協力の現場で

(1) 参考になったこと

〔タイの経済・社会〕

伝統的に米、タピオカ、砂糖、天然ゴム、スズなどの一次産品供給国のいわゆるモノカルチャ経済国であるが、近年農業の就業人口60%を基盤としつつも中進国の仲間入りをしている。

貿易収支は輸入超過で赤字だが観光収入等によって総合的には黒字を計上している。経済成長率が過去3年連続2ケタを計上している。経済成長を物語るかのように、バンコク市内いたるところにビル建設のラッシュ、大型トラックによる資材の輸送等で経済の繁栄ぶりがうかがえた。

1961年の第1次から現在の第6次までの経済計画によって社会資本の整備に重点がおかれているとのこと、社会資本の充実に力を入れることは、国の財政にゆとりが出てきたことのあらわれだろうか。タイ国の経済が今日めざましく発展していく情況をみて、援助国であるわが国にとり、喜ばしい限りである。

〔教育・文化〕

日本の教育制度と同じ（6、3、3、4制）をとっている。ただし義務教育は小学校6ケ年だが、近く中学校義務化の予定である。

カセサート大学、モンクット王工科大学、日本人学校、教員養成学校を訪問し、授業風景を見学した。生徒の勉学に対する意欲が強く感じられた。

## 3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

### (1) タイ・モンクット王工科大学　ラカバン校（ＫＭＩＴＬ）

〔沿革〕

1960年８月ノンダブリ電気通信訓練センター設立のため日本技術協力協定がタイ王国政府と日本政府との間で調印。

1961年にわが国の技術協定によって電気通信訓練センターとして発足した。

1970年に専門学校を経て、国立工科大学１キャンパス（ラカバン校）に昇格

1986年　ＫＭＩＴラカバン校がモンクット王国立総合（工科）大学（ＫＭＩＴＬ）に昇格する。

1990年８月ＫＭＩＴＬに対する日本協力30周年記念祝賀会開催。

〔大学の目的〕

電気通信等に携わる技術者の養成

〔大学の要請・背景〕

タイ国政府が経済社会を推進していく上で、大きな役割を演ずることが期待されており、同大学の教育、研究活動の一層のレベルアップを図るためわが国に対し、技術協力を要請したものである。

〔わが国の協力機関〕

郵政省・ＫＤＤ・ＮＴＴ・ＮＨＫ・東海大学

〔現状・目標達成〕

タイ・モンクット王工科大学（ＫＭＩＴＬ）は今やタイでもトップクラスの一流名門大学との評価が高い。ここに入学してくる学生もクラスで上位の生徒である。ここでも時代を反映してか情報関係に人気が集中していたようだ。ハイテク・コンピュータを専攻する学生が多い。

〔見学施設〕

コンピューターセンター

機械工学科

シリントーン王妃アカデミックセンター

〔専門家派遣実績〕

昭和35年から平成２年８月現在で長期専門家　61名

### (2) 気になったこと

イ．タイ国への経済援助にもかかわらず、日本や日本人が必ずしも十分かつ適正に理解されているとは言い難く、まだ十分に経済大国としての国際的責任を果たしていないとの声もきかれた。

援助をただ押しつけるのでなく、あくまでほんとうに地域の住民のためのものになっているかという基本的な視点が、今問われている様な気がする。

ロ. 堀割りの美しい古都　チェンマイ

バンコクから北へ700 km、山々に囲まれた海抜300 m の盆地に位置するチエンマイは〝北方のバラ〟と称される美しい街だ、人口 120 万、城壁の一部が残り堀を巡らした旧市街を人力車がのんびりと走る、人々の表情も穏やかで、ほのぼのとした人情に接することも多い。のどかな古都、日本でいえば小京都とでもいう風情だ。街の歴史は古く13世紀にランナ・タイ王国の都としてメンライ王King Mengrai 王朝としたのが始まり、再三にわたりアユタヤやビルマの攻撃をうけついには18世紀にビルマの支配下になったが、その間も独立した王朝を保ち、廃虚にはならずにすんだ。当時から伝わるタイシルクやコットン日傘、銀製品、木彫り製品の手工芸技術は今、なお継承され、名産地となっている。14～15世紀に建立された寺院も多く残り、修業中の若い僧侶は、声をかけると気軽に応じて、すがすがしい。日本の奈良、京都にも似たチェンマイ。日本人が忘れかけていた郷愁の念をさそうような町だ。今後古都チェンマイが開発・都市化されて、古い街並みや伝統工芸がなくなってしまうことがないように祈りたい。

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えて

(1) タイ国における地理及び経済社会等についてスライド、写真、資料等を使って説明する。

(2) 私たちがとるべき国際理解教育がどうあるべきかを考えさせる。

(3) 国づくり、人づくりに貢献できる広い国際的視野と逞しい創造力をもった青少年育成に微力を尽くしたい。

5. 所感および意見

(1) 研修の時期については申し分ないと思うと思う。8月下旬位にとったほうが研修する私たちにとっては都合がいいのではないかと思う。7月中旬から8月中旬までは海外旅行者が最も多いと聞いている。どこの空港でも混雑が予想され、入出国手続き等にもまち行列ができ時間がかかりそうである。旅行者の多いピーク時をさける意味でこの時期はベスト。

(2) 研修日程

8日間の日程、妥当な期間である。これ以上長くなると身体のコンディション、健康管理も難しい。

(3) 所感

今回の研修でタイの国が身近かに感じるようになりました。国際理解教育をするためには、まず相手の国を知る（文化価値感の違いを知る）ことから始まると思います。

異文化にふれ、貴重な体験をさせていただきました。

最後に、同行され、たいへんお世話になりましたＪＩＣＡの二人の職員の方に紙面をかりて厚くお礼を申し上げたいと思います。

(2) マレイシア研修日程

| 月　日 | 曜 | 日程 A　M | 日程 P　M | 備考 宿泊先 |
|---|---|---|---|---|
| 8月22日 | 水 | 10:00 東京発（JL721） | 15:50 クアラ・ルンプール着<br>18:00 日程等打合せ | ホテル・フラマ |
| 23日 | 木 | 10:00 JICA事務所訪問 | 14:30 鋳造プロジェクト視察 | 同　上 |
| 24日 | 金 | 10:00 協力隊員視察<br>（ALAM SHAH日本語教師） | 14:30 職業訓練指導員・上級技能訓練センター（CIAST） | 同　上 |
| 25日 | 土 | 09:30 JICA派遣専門家視察<br>（UPM 水産） | 市内見学 | 同　上 |
| 26日 | 日 | 09:00 クアラ・ルンプール ➡<br>（マラッカ経由） | 18:00 ジョホールバール<br>19:30 協力隊員との懇談 | ホテル・ラササヤン |
| 27日 | 月 | 10:00 協力隊員視察<br>（自動車整備） | 13:30 ジョホールバール ➡<br>15:00 シンガポール | ケインヒル・ホテル |
| 28日 | 火 | 10:00 JICA事務所訪問 | 14:00 日・シソフトウエアセンター視察<br>19:30 シンガポール教師との懇談 | 同　上 |
| 29日 | 水 | 10:00 日本人学校視察<br>（中学校） | 22:25 シンガポール発<br>（JL710） | 機　中　泊 |
| 30日 | 木 | 06:05 東京着 | | |

氏　　名　斉藤信寛

所属学校名　北海道岩見沢農業高校

担当教科　農業

1．視察等に際して特に主眼をおいた点

私は東南アジアの旅行は初めてなため、見る物全てに興味がありました。その中で特に主眼をおいたことは、発展途上国と称されているマレーシアにおける経済政策についてです。現在の日本は戦後急激な経済成長を遂げ、今や世界を代表する経済大国となったわけですが、マレーシアは日本同様に戦争を体験し同じアジアにおいて、経済の成長及び人々の生活状態はどうなのか、といった点について、わずかな旅行日数であるが、聞くとは違い、自分の目で直接見れることは非常に意義あることで、今後日本が果たすべき役割について、参考になったと思います。

2. 国際協力の現場で

(1) 参考になったこと

ア．現在マレーシアには日本からの協力隊員が年間100名程派遣され、現地において、あらゆる分野で国境の枠を越え、親身になって技術指導されている現場を直接訪問したことについて思うことは、協力隊員は興味半位のような安易な気持ではこの仕事は勤まらないということです。現地の人を指導する訳だから、まず、言葉がわかり、話せること。また、人々の生活状態を理解すると共に、生活習慣も理解しなければならないと思います。その他、その国について色々理解しなければならないと思いますが、協力隊員はわずか2年間というわずかな期間にもかかわらず、言葉は勿論のこと、現地の人になりきったような状態であり、本当にボランティア精神で指導に当られていることは非常に頭が下がる思いです。現在、私の学校にも協力隊員を希望している生徒がおり、その生徒のため、また、他の生徒に対しても非常に参考になりました。

イ．日本語教育についてであるが、日本における英語教育は中・高と6年間の学習期間があるにもかかわらず、英会話を満足に話せない者が多いのが現実である一方、5年間の日本語教育で、ある程度の日常会話を話せられるようになるとのことである。教師の教え方にもよると思うが、それ以上に生徒が真剣に学ぼうとする気持が大きいのではないかと思う。現在の日本での英語教育は進学中心であり、今後更に国際社会の世の中になることを考えれば、英会話の必要性が大切になってくると思う。このことは私自身にも言えることで、

今回の研修で、外人と接して英会話の無能力さを感じ、はずかしい思いをしました。

(2) 気になったこと

ア. 協力隊員が任務を終えて日本に帰ってからの仕事についてであるが、私が以前クラス担任をしていた時の卒業生で、ある農機具メーカーに就職し、その後協力隊員になる希望を持ったのですが、隊員になるためには現在の就職先を退職しなければならないし、帰国後再び同じ会社に入れるかどうかわからないとのことで、結局、協力隊員を断念したことがあります。現在、このように一般企業に就職し、その後協力隊員として活動している人が沢山いると思うが、その人達は帰国後どうしているのだろうか。教員の場合は休職という措置がとられていますが。

3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

現在、日本の農業技術は世界の中でもトップクラスだと思いますが、その中において近年脚光を浴びているのがバイオテクノロジーです。世界の農業国の中で、現在ほぼ安定した農業生産を上げている国では、今後、この技術が導入され、農業界だけでなく、他の産業と深く結びついて、位置づけられていくものと思います。

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

宗教の必要性についてですが、イスラム教徒は信仰が厚く、1日に5回のお祈りをし、身を清め、精神統一をはかるというが、日本ではそれほどまで信仰を厚く持っている者はごくわずかで、ほとんどの人は無信仰に近い状態ではないかと思う。それが青少年の非行を多くしている原因の一つでもあると思われます。

現在、小学校では道徳という時間はあるが、中学校以上は、その様な時間は宗教学校でない限りありません。今後、週に1時間でもよいから、精神統一の時間を作ることが必要ですし、また家庭教育においても、幼児の時からしっかりした躾教育をしなければならない。そのためには親の教育がより以上に必要になると思う。

5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

全国的な視野に立って研修時期を考えれば今回の時期になると思います。また、期間について

も、少し長いように感じましたが、研修目的を考えれば10日間前後が妥当だと思います。

(2) 研修日程および訪問先

今回の訪問先は都市中心であったが、幅広い理解を深めるためには農村地帯も訪問先に入れた方がよかったと思い、少し残念な気がします。今回のメンバーを見ると農業教科の先生が５～６人位いたので全員が同じ所を見ることも必要ですが、その他に選択コースもあった方がよいと思います。また、日程的には１日に２ケ所訪問ということでゆとりのある日程だったと思いますが、昼食時間が長かったと思います。

(3) その他全般的な所感

ア．実際にマレーシア、シンガポールの素顔を自分の目で確められたことは理解を深めると共に今後の教育に非常に参考になったと思いますので、この様な機会を計画させて下さったＪＩＣＡに感謝すると共に再び、他の国を訪問したい気持です。

イ．参加者が日本全国から来ており、また、その数も14名と少なく、親睦が深まると共に各学校の事情を知ることができ解散後も親交を深めていきたいと思います。

ウ．マレーシアは発展途上国の中でも比較的経済が安定し、人々の生活状態も安定し、国の産業も農業から重工業へと先進国への仲間入りを進めているようであるが、アフリカにおいては食糧不足のため、毎日のように飢死する人間が出ている状態を考えれば、日本を含めた先進諸国はこのような国に対し、今以上の国際協力と資金、技術面での援助が必要に思われ、日常、今後の日本を背負う生徒を教育している我々教師の責務として、世界平和のために、的確に理解し、教育する必要があると思います。

氏　　名　菅 原 善 致

所属学校名　岩手県立水沢農業高等学校

担当教科　理科

1．視察等に際して特に主眼をおいた点

(1) 現地の社会構造と日本の技術協力の意義

(2) 相手国の協力要請と協力現場での待遇

(3) 協力隊員の活躍と協力にかける意気込み

(4) 文化、習慣の違いにおける問題点

2. 国際協力の現場で（参考になったこと・気になったこと）

(1) マレイシア鋳造技術協力事業

金属工業開発センターの1部門である鋳造部門に専門家を派遣し人材育成のための技術指導を行っていた。年中気温の高い地域なので日本の製鉄鋳造工場を考えるとさぞかし悪条件の中の作業と考えていたが、実際の現場を見ると、機材の配置や施設の構造に工夫を凝らし大変すっきりして研修し易い施設であった。私が住んでいる地域に鋳造工場が沢山あるのでたかが鋳造という気持ちがあったが、あのすばらしい施設を持ってもまだ自動車の部品を製造するのは難しいと聞き、日本の技術力の高さを実感するとともに現地の人々の意欲を感じた。

(2) ALAM SHAH（男子中等学校）

マレイシアの教育構造はイギリスの教育の形態が残ったものであり、マレー系のエリート養成学校の1つである男子中等学校を訪問した。寮教育は多くの面で効果が現れるのだろうが、宗教・気候・学力向上に合わせて大変厳しい生活をして訓練されていると感じた。日本語教師として3名の女性が活躍していたが教育にかける情熱は日本にいる教師以上のもので、勤務時間外も日本語指導を行い、まったく日本語を知らない生徒を日本語で引き付け教育効果を挙げている。教科書も自分達で作成したと聞いた。

国策として日本語教育に力を入れていると聞くが、なぜ日本語を覚え、どの程度日本語習得を期待しているかという点に疑問を感じた。

(3) 職業訓練指導員上級技能訓練センター

視察時センターは休みで、施設見学と説明だけであった。立地条件もよいすばらしい施設で

コンピュータ関係、機械関係の設備の充実されたセンターであった。教育プログラムを日本から持ち込んで現地にあったものに作り替えているそうであるが、日本研修を終えた現地職員が

積極的に活躍しているのが印象的であった。技術の進歩を短時間に吸収し普及させることの難しさを感じた。

(4) ＵＰＭ水産学科

淡水魚の養殖研究のために派遣されている専門家に説明を受けた。海老の養殖はよく聞くが、新しい分野の養殖として研究しているのであろう。こじんまりとした施設で基礎研究を進めていたが、周囲の理解と協力を受け目標を持って頑張っていた。

大学の施設見学で、産業の中心となるゴムや油やしの実習園、コーヒー等の研究園を見ることができたし、熱帯地方の過酷な労働を知ることができた。

(5) 麻薬患者更正施設

タイに国境を接していることもあり麻薬患者が14万人もいて、見学施設には400名の患者を収容していた。日本であれば考えられない所であるが、監視の緩い刑務所の中での職業訓練のように感じた。協力隊員は自動車整備を指導していたが、日本ではスクラップ以下の車体を溶接して再生している姿を見て現地の国情と協力隊員の技術力を感じ取った。

(6) 日・シソフトウエアセンター

日本の援助で設立されたセンターで、日本の専門学校のように感じたが教育組織的にはもう少し上級の学校である。ビルの１フロアーを使い小さい規模であるが、最先端のコンピュータ設備を次から次に導入し、日本の同等の施設より教育条件は整っていた。また、教室や廊下に日本語の掲示等があり日本の習得にも努力していると感じた。携帯電話を持ち歩く市民の多さを見ても、国を挙げて情報産業には力を入れ優遇していることがわかる。コンピュータ産業の技術革新はすさまじく、常に最新の技術を習得しなければならないが、これといった資源を持たない国ではすばらしい選択だったと思う。現在は日本の協力で日本の機器が導入されているが、協力事業が終了した段階で最先端の機器の導入をスムーズに行うことができるかが問題であると思った。多くの技術者を養成し開発実績をあげていくのが急務であろう。

(7) シンガポール日本人学校

世界最大の日本人学校で、教師は文部省から派遣され国際協力という意味あいからは少しはずれるが、職員および生徒の父兄を考えると外国で頑張っている人々の様子を知ることができ

た。場所が外国にあるというだけで日本の学校とまったく同じであるが、生徒を見ると好き好んで来ているわけではないが、同じ日本人の仲間と教育を受け生活しているので安心しているといった様子であった。

学校は外国の中にある日本であり、その中にだけ隠っているのであれば特に努力はいらない。しかし現地住民との関係等が個人・学校ともに大切なようで、国際交流の指導案が机の上にあったのが、意味深かげであった。

(8) 協力隊員との懇談を通して

多くの青年海外協力隊員と話す機会を得、国際協力への考え方、意欲そして活動上の問題や感想を直接聞くことができた。各種機関誌等で読んではいたが、直接当事者から話を聞くと複雑な気持ちの移り変わりや、努力の様子が伝わり頭の下がる思いであった。電車の中のポスターなどを見て協力隊を知ったそうであるが、学校や経験者から教わる機会を逃し自分の中に潜んだ意識に気づかないまま時期を逃してしまう若者が多くいるのを残念に思う。

3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

開発途上国というと、非常に貧しく古い社会を名実ともにそのまま引き継いでいる国で、国際協力とは生活の根本に関わる低レベルの技術援助をするというイメージを持っていた。そういうイメージを解消させる情報が少ないので、日ソフトウェアセンター等の高レベルのプロジェクトを紹介するのもよいと思う。

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

研修を通して、普段は知ることができない現地のようすや協力現場を知ることができた。沢山の資料と写真を得ることができたので、自分が体験したことをまとめ、生徒達や国際理解担当者へ伝えていきたい。

5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

多くの事情からこの時期に決まったようなのでいいと思う。

期間についても申し分がない。

(2) 研修日程および訪問先

2カ国を研修でき有意義な研修であったが、長距離移動中に現地の平均的な農村をよく見る機会が欲しかった。

(3) その他全般的な所感

研修以前に考えていたことと、研修を終えて知ったことには多くの隔たりがある。途上国と呼ばれている現地は幾分発展しているとは思っていたが、それはあくまで自分が学生時代に学んだ社会知識に過ぎず、時代の進歩をまったく考慮していなかった。外国の教科書で古い日本を紹介しているのに腹を立てたことがあるのに、自分達が同じような間違いをしているのが滑稽に思えた。

両国ともにエリート養成のための教育組織が存在し、大変優秀な人材が多く輩出されていることは、日本に留学してくる人たちを見て分かっていたことであるが、優秀な技術者研究者がいるその国へ技術を教える人を派遣するということが、日本人が優秀で教えるのだという考えからしか結び付かなかった。しかし協力の現場を見ると、日本からの技術者は一技術者に過ぎず、人不足のため新技術の伝達のために働いていたのではっとした。両国ともに教育を充実させ中間層を育成させればよいと思った。

シンガポールのロウ記念館で歴史の展示があったが、英国の植民地時代の展示に比べ日本の侵略が光音効果を駆使した何倍の規模で派手に展示されているのには驚いた。いかに日本の行為が批判されているか肌身で感じた。

日本の国際協力はこれからも変化をしていくのだろうが、私自身、時代に合わせた協力、その国に応じた援助、日本が日本であるがゆえに協力できることなど多くのことを考えるようになった。

このような貴重な機会を与えてくださいました国際協力事業団と、まったく地の利の分からない我々を導き、充分に研修させてくださった職員の方々には心から感謝申し上げます。

氏　　名　高 梨 敏 宏

所属学校名　山形県立楯岡高等学校

担当教科　英語

1．視察等に際して特に主眼をおいた点

(1) 我が国のマレイシア、シンガポールに対する援助の実態を知ること。

(2) マレイシア、シンガポールを自分の目で見、書物から得られないことを肌で感じとること。

(3) マレイシアにおける「ブミプトラ政策」、「ルック・イースト政策」の実態を知ること。

(4) シンガポールの「世界の自由貿易港」として栄えた歴史的背景。

(5) 使われている言語について。どんな英語がどの程度使われているか。

(6) 対日感情はどうであるか。

2. 国際協力の現場で

(1) 参考になったこと

ア．ＪＩＣＡが政府開発援助資金（ＯＤＡ）を開発途上国の発展と国民の生活水準向上のため、年次計画に従い種々のプロジェクトを実施してかなりの成果をあげており、日本は世界一の援助大国になり、国際社会における日本の貢献は大きく、誇りを持つと同時に、今後ますます日本の責任も重大になっていることを痛感した。これらの国々への援助が、世界平和のためにいかに大切であるかを高校生に伝え、国際理解教育に役立てたい。

イ．日本の若者達にとって「国際化」といえば、先ず英語や仏語を身につけて欧米諸国へ出かけて行くことを意味し、アジア諸国は経済的には必要だが、文化的、社会的には「見えない」また「見る必要がない」国々であるという構造が依然として強い。しかし、アジア諸国とのつながりは重要であることをいろんな面で実感してきた。アジア諸国は日本との接触を心から求めているのである。

ウ．開発途上国への援助と言えば、過去においては物質的、金銭的援助が中心であったが、近年ではＪＩＣＡが現地の関係機関と連携を密にして、専門家、協力隊員を派遣する人的な面での援助に重点をおき、現地の研修員の才能開発に力を入れていることを知った。

エ．英語教師の立場から言うと、「発音の正確さ」よりも「話す材料」「何を話すか」に重点を置いた英語教育の重要性を痛感した。この国際化時代においては、自分の考えをはっきり言える英語でなければならないのである。

(2) 気になったこと

ア．マレーシアにおいて「ルック・イースト政策」に基づいて、中等学校での日本語教育、日本への留学が行なわれているわけだが、一方では従来からのイギリス志向がいまだに根強く残っており、日本帰りの留学生たちの活動の場が保障されていると言えない点など、この政策が徹底していないように思われる。イギリス志向が強いこの環境の中で、日本の援助が今以上に心の通い合ったものになるように願うものである。

イ．各プロジェクトにおける専門家が帰国した場合、技術の向上と安定化が心配される。プロジェクト終了後の定期的な相互交流をもっと徹底すればよいのでは。

ウ．現地の人達の仕事、研究に対する熱意、意気込みが不足しているように思われる。国民性なのかもしれないが。その意識改革と人材育成にはかなりの労力と時間が必要であろう。

エ．今回の研修で、現地のマレー人と話す機会はあまりなかったので、この国の民衆の意識というものを肌で感じとれなかった。一般の人達と話す機会があればよかったと思う。

3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力

(1) アラム・シャーにおける日本語教師達

「ルック・イースト政策」に基づく日本語教育、日本への留学がさかんになっており、日本語への関心が高まっている。マレーシアのエリートが集まっている学校らしく、生徒達は礼儀正しく、学習態度もよかった。将来マレーシアの要職につく子供達だろう。全寮制で、お祈りの時間、学習の時間などもきちんと決められており、日本の子供達ならとても耐えられないだろう。協力隊員の東さん、尾形さん、小林さんの３人の若き女性が活躍していた。大学進学はほとんどが欧米で、日本に来るのは少ないと聞いてがっかりした。

(2) 国立麻薬リハビリテーションセンター

ジョホールバールにあるリハビリテーションセンターで、協力隊員の六郷さん（静岡県出身）が自動車整備を通して麻薬患者の更生を図っていた。患者達の作っているバンドが「上を向いて歩こう」を演奏して歓迎してくれた時は目頭が熱くなった。精神的にも肉体的にも大変な仕事だと思った。六郷さんは澄みきったまなざしで自信と誇りを持って仕事の内容を説明してくれた。こういった「人と人とのふれあい」の国際協力に深い感銘をうけた。

(3) 日本・シンガポールソフトウエア技術研修センター

シンガポール政府は、経済の急速な発展に伴い、従来の労働集約産業から、知識集約産業に移行する必要性から、情報処理技術者を養成するため研修センターを設立し、それに関する技術協力を我が国がおこなっている。大変この協力はうまくいっており、現地の人達もよろこんでいる様子だった。

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策あるいは材料として考えていること

(1) マレーシア、シンガポールにおけるＪＩＣＡの技術協力及び協力隊の活躍。

(2) 写真、スライドを通して各訪問先の紹介。

(3) 山形県の「機関誌」、学校の研究紀要への投稿。

(4) “How to Speak”（どのように話すか）よりも“What to Speak”（何を話すか）に重点を置いた英語教育、言い換えれば自分の言いたいことをへたな英語でもいいから堂々と話す態度の育成。

5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

東北地方は８月22、23日頃から２学期が始まるので７月下旬から８月上旬にかけてが望ましいが、全体的にみればやむをえないと思う。９日間の期間は適切である。

(2) 研修日程および訪問先

ア．マレーシア、シンガポールの両国があり大変よかった。日程的にもゆとりがありよかったと思う。強いて言えばマレーシアの内陸地だけでなく海岸の方に行く行程があってもよかったのでは。

イ．学校訪問、現地で活躍している人達との懇談会、シンガポールの教師とのパーティーなど、内容的にバランスがよく大変よかった。特にシンガポール教師とのパーティーは歌や踊りもあり大変和やかであった。

(3) その他全般的な所感

ア．マレーシアではマレー人、中国人、インド人などの複合民族国家でありながら、それぞれの文化、伝統、習慣を守り、相互にそれらを尊重し、認め合って平和に暮らしている点、国際性においては日本より進歩していると思った。

イ．うっそうと繁った街路樹のあるオーチャード通り、シンガポールは緑の濃い大都会でした。

ウ．自分の意志を伝えるための英語の重要性を生徒に強調していきたい。

エ．このようなすばらしい機会を与えて下さったＪＩＣＡ関係の方々に心から感謝致します。中川さん、山田さんお世話になりました。

氏　　名　堤　　賢一
所属学校名　新潟県立長岡農業高等学校
担当教科　農業

## 1．はじめに

海外研修、マレーシアと聞かされても瞬間に思い浮かぶものがありません。

海外旅行、外国人、外国映画・外国文学・外国の歴史、などの言葉から受けるイメージは決まって欧米諸国であり、とりわけ、外国、というとアメリカと言う概念のみが成り立っているかのごときです。

毎日、新聞やテレビの報道を見聞きするにつけ、アメリカ、中東湾岸情勢、欧州が主体であり、なかでもアメリカ大統領のことが報じられない日はありません。アジアのニュースは少ないのです、マレーシアについては先日、一回だけ中国問題にからんで「中国はマレーシアと国交を回復した。」とだけ解説抜きで聞いたそれだけです。

ところで、五、六年程前にＡＳＥＡＮ諸国の合同教育視察団が訪日された際、全寮制の農業自営者養成高等学校である、新潟県立興農館高等学校を視察されました。この視察団は中等学校の校長先生方が主体とのことですが、平均年齢が35,6歳と若く、二十歳代の教頭、女性の校長先生も何人か含まれていました。活気に満ちた視察団で、生徒の中に入り込み「これは何か、目的は、方法は」と英語で話しかけられ戸惑っている生徒に、英文のメモが渡され面喰らいながらの実習・授業でした。

民族、服装、言語、宗教がそれぞれ事なる人の団体です、丁度、イスラム教の断食に当たっている時期で何人かは食事を摂らず、日中、何時間も寝て休むので視察の行程を組むのに苦労したと、案内役の人から聞きました。

今回、マレーシア、シンガポール研修視察の機会を得て、多様なアジア人が、どのように協力しあい、民族の調和と安定・平和をもたらし、経済の発展を遂げて行くかについては、人造り、教育の力の大きい事を認識して経済大国、日本が発展途上国の要請を受けて青年海外協力隊を派遣し、各分野で多くの成果を上げている様子を視察し報告します。

## 2. マレーシア、シンガポール視察研修日程

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 8月22日（水） | Lv．Tokyo,Narita JL719 | 13:30 | Lv.Singapore | SQ120 | 21:00 |
| | Ar.Singapore | 19:15 | Ar.Kuala Lumpure | | 21:50 |

8月23日（木） JICA　事務所訪問　　鋳造プロジェクト視察

8月24日（金） ALAM SHAH　中高等学校視察　　（英国式全寮制エリート教育）

CIAST （職業訓練指導員・上級技能訓練センター）訪問

8月25日（土） MALAYSIA 農科大学JICA派遣水産専門家訪問

8月26日（日） JOHOR BAHRU 協力隊員と懇談会

8月27日（月） 薬物依存症更生センター視察（自動車整備技能訓練指導員訪問）

8月28日（火） JICA SINGAPORE 事務所訪問

日・シソフトウエアセンター視察、シンガポール教師との懇談会

8月29日（水） シンガポール日本人学校視察　（海外日本人学校では世界最大規模）

8月30日（木） Ar.Tokyo,Narita JL710

3. マレーシアの概要

(1) 地勢、気候

マレーシアは、マレー半島の南半分の西マレーシアと、ボルネオ島の北西部を占める東マレーシアからなり、北緯1度から7度の間に位置します。国土の総面積は約33万㎢、日本の約90%に当たり、70%は森林です。サバ、サラワク州はボルネオ島に在り、国土の60%を占め、熱帯雨林地帯です。気温は24℃～33℃くらいで、四季の変化がなく3、4月は高温、多湿、となり、10月から2月に雨が多く雨期です。

(2) 人口、人種

総人口1,740 万人、そのうちおよそ80%が半島マレーシアに住み他の約20%が東マレーシアに住んでいます。

人種構成は、49%がブミプトラ（土地の子）と呼ばれるマレー人であり、32%が中国系、9%がインド系、白人など他の人種が10%となっています。

(3) 宗教・言語

マレーシアの国教は、憲法でイスラム教と定めていますが、また、個人の信仰の自由も認められています。マレー人はイスラム教徒、中国系は仏教徒、インド系はヒンズー教徒と大別できます。しかし土着信仰やキリスト教もあります。

多民族国家であるため多数の言語が使用されているが、マレー語を国語、公用語と定め、政府による一本化政策が押し進められています。

4. ＪＩＣＡマレイシア事務所訪問

ＪＩＣＡ事務所は首都KUALA LUMPUR の官庁街の近代的なビルにあり、次長より説明を戴いた。マレイシアの政治・経済および日本・マレイシア関係について概要を報告します。

(1) 政治体制

基本政体：立憲君主制〔13州（半島マレイシア11州及び北ボルネオのサバ、サラワク両州）と連邦直轄地（クアラ・ルンプール及びラブアン）よりなる連邦国家〕

元　　首：アズラン・シャー（第９代国王、89．４就任、ペラ州サルタン）。任期５年。サルタン会議において互選。

首　　相：マハディール・モハマド（第４代首相、81．７．16就任、ケダ州出身）

議　　会：二院制

上　院　議席68

任期３年。42名は国王任命、26名は州議会指名。

議長：アバン・ハジ・アハマド・ウライ（88．７就任）

下　院　議席 177（次回総選挙時より 180 議席）

任期５年。直接選挙（小選挙区制）。

議長：モハメッド・ザヒール（82．６就任）

(2) 政　党：人種又は地域を基盤とする12政党で構成される国民戦線（ＢＮ）が与党（連合与党）。

| | 政党名 | 下院議席数 | 党首 |
|---|---|---|---|
| | 国民戦線（ＢＮ） | １３５ | マハディール |
| | ＜内訳＞ | | |
| 与党 | 新統一マレイ国民組織（UMNO BARU） | （７１） | マハディール |
| 与党 | マレイシア中国人協会（ＭＣＡ） | （１７） | リン・リォン・シク |
| 与党 | マレイシア・インド人会議（ＭＩＣ） | （６） | サミー・ヴェル |
| 野党 | その他の政党 | （４１） | |
| 野党 | 民主行動党（DAP） | ２４ | チェン・マン・ヒン |
| 野党 | ４６年精神党 | １３ | ラザレー |
| 野党 | 汎マレイシア回教党(PAS) | １ | ファジル・ノール |
| 野党 | 無所属 | ４ | |

(2) 政情について

内政面の不安定要因としては、建国以来（1957年8月31日独立）の人種問題があり、'69年5月13日、人種暴動が起きている。各人種間の融和を図りつつ、相対的に貧困なマレイ系の経済的地位を上げることが歴代政権の最大課題となっている。

現在の政局は、1986年の総選挙の結果マハデイル首相の率いる国民戦線（ＢＮ）が圧勝した。

新党（ＵＭＮＯ　ＢＡＲＵ）新統一マレイ国民組織の結成とその体制がためについてＵＭＮＯは違法な団体との高裁判断を受けて、88年2月15日、「マ」首相の下でＵＭＮＯに代わる新党「ＵＭＮＯ　ＢＡＲＵ」（新統一マレイ国民組織）が結成され（ＵＭＮＯに代わり、ＢＮ構成党としても承認された）、旧党員が改めて新党への入党申請を行うという党再生措置及び党中枢組織の体制固めが図られることとなった。ＵＭＮＯ　ＢＡＲＵは、10月28～30日、約5,000名の党員及びオブザーバーを集め初の党大会を開催。大会では党規約（旧党規約にほぼ同じ）が採択された。ＵＭＮＯ　ＢＡＲＵはその後、時の経過とともに一般にＵＭＮＯと呼称されるようになった。

この間、旧ＵＭＮＯ反主流派の一部（ムサ、ラザレーを含む）は、ＵＭＮＯ　ＢＡＲＵへの入党を拒否する等反マハディールの立場をとっていたが、12月には主流派及びムサ前首相を含む反主流派が共に出席して両派和解のためのフォーラムがジョホールで開催され、その席上和解のための6項目の決議が採択された。89年1月13日にはＵＭＮＯ最高評議会で右決議を受入る旨の決定がなされ、1月31日、ムサ前首相はＵＭＮＯ　ＢＡＲＵに入党した。

なお、マハディール首相が89年4月17日に明らかにしたところでは、ＵＭＮＯ党員数は1,281,633名である。

(3) 麻薬問題

「マ」における麻薬問題は、(1)中毒患者が約10万人（潜在的な患者を含めると推定約30～50万人）に及ぶこと、(2)中毒者、常習者の多くが若年層であること、(3)犯罪に結びつきやすいこと、等を理由として極めて深刻な社会問題となっており、政府は、麻薬乱用防止キャンペーンの強化、中毒者収容・更生施設の拡充等を積極的に推進しているほか、密輸、不法所持等の取り締まりに際しては、違法者に対し厳罰を課す（危険薬物法－Dangerous Drugs Act は、15グラム以上のヘロイン又はモルヒネ、200グラム以上の大麻（マリファナ）を不法所持している者は死刑に処せられる旨規定）との極めて厳しい姿勢で対処している。因みに、これまでに危険薬物法違反で死刑を執行された者は、86年7月に処刑された豪州人2名、89年7月の英国人を含め約60名にのぼる。

なお、マハディール首相は、87年6月に国際麻薬会議議長を務める等麻薬問題に関心が高い。

(4) 外交について

非同盟・中立外交を掲げ、ＡＳＥＡＮ地域内協力推進を基調にしている。

ＡＳＥＡＮ協力はマレイシア外交の最重要な柱であり、緊密な２国間・他国間協力が進められている。

シンガポールとは1973年６月、通貨の等価交換停止。証券、銀行分野などの分離が進み、利害対立する面もあるが、マハデール政権発足後は関係は進展している。

タイとは石油の供給、タイ米の買い付けなどで経済関係が発展。

フィリッピンとはサバ領有権を巡り歴史的な戦いがある。アキノ政権は領有権を放棄する事を決め上、下両院に法案を提案したが事実上、廃案になった。

イスラム世界との連帯を重視、イスラム諸国会議の主唱国の１つである事から歴代首相は中東諸国を訪問している。パレスチナ国家を承認、マレイシアＰＬＯ事務所を大使館に格上げ、アラファトＰＬＯ議長がパレスチナ国家大統領としてマレイシアを正式訪問しているなどイスラム諸国と緊密な関係がある。

英連邦加盟国であり、長い植民地時代の関わりを持っている。英連邦を時代遅れの機構として脱退も検討していたといわれたが、マハディール首相は1989年10月英連邦首脳会議をクアラルンプールで開催して有益な側面もあると再評価する発言をして注目された。

対日関係については、マハティール首相は「ルック・イースト」（東方政策）を掲げ、経済発展のため日本・韓国を見習う政策を推進している。

89年５月、竹下首相（当時）がＡＳＥＡＮ５カ国歴訪の一環として訪問。

88年４月と10月にマハティール首相が来日（非公式）。11月ラフィダ貿易産業相が来日し通産省に熱帯産品の関税撤廃など市場開放で協力を要請。このほかマレーシア側は円高に伴う円借款のドル建て債務の膨張に対して、旧借款の無償供与化など融資条件の改善を求めている。

日本はマレーシア最大の貿易相手国で、88年の貿易額は対日輸出47億1000万ドル、同輸入30億6000万ドル。輸出は原油、液化天然ガス、木材など１次産品。

日本からの直接投資は88年度４億5400万ドルで、対マレーシア最大の投資国。

(5) 産業について

スズは世界の生産量の30％を占めるが、72年の７万6000トンをピークに減産。

世界的な供給過剰から85年10月、ロンドン金属取引所、クアルランプール・スズ市場（ＫＬＴＭ）がともに取引停止となり、スズ鉱山の半数が閉鎖となった（ＫＬＴＭのみ86年２月３日再開)。

石油生産は76年から急増し、86年に日産50万バレルの大台に。同８月の石油輸出国機構（ＯＰＥＣ）合意に呼応して87年は49万7900バレルに削減。しかし88年は54万バレルに回復した。国営

石油会社ペトロナスが油田所有権、採掘権を持つ。

ゴムは世界生産量の約33%を生産し第1位。88年の生産量は166万トン。

ヤシ油は世界生産量の61%。88年の生産量は503万トンで、このうち434万トンを輸出。

木材（丸太）はサバ、サラワクから大半が日本向けに輸出されている。国家プロジェクトとして政府が70年に設立したプロトン社は85年9月、83%出資、三菱自動車の技術協力で、初の国産車「サガ」を販売し始めた。

5. マレイ人最優先政策（ブミプトラ政策）とLook East Policy（東方政策）

ＪＩＣＡ事務所次長の駒沢氏は「このビルのオーナー、実は、マレーシア人系企業なんですよ。」「ほかに、ゴム園や旅行会社なども経営していて、青年海外協力隊の仕事もよくやってくれるんですよ。国策なんですよ。」と話し、説明して頂きました。

ここまで、車で30分ほど走ったのですが、商店、食堂、ビル、銀行、町並はことごとく漢字で書かれた店の看板だけが目に付ました、華僑の町、経済の実権は中国系なんです。

マレイシアは人口構成比で、49%がマレイ系、32%が中国系、9%がインド系、その他白人等10%、ですが多数を占めるマレイ系人種は貧困の者が多くて、経済基盤が弱いんです。現在の首相マハティールが1965年の人種暴動の原因を追及しながら、出版した「マレー・ジレンマ」という著書の中でマレイ系人種は遺伝的に他の民族より劣っている、その原因は閉鎖的社会の中で近親婚の割合いが高い事により、人種的に活力が劣っていると説き、その弱いマレイ系人種のために、政治、経済、教育などの面で他民族に優先して保護をしなければならない事を政策として掲げた。これがマレイ人最優先政策（ブミプトラ政策）です。

その中には、マレイ系人種が中国系やインド系よりも貧困が進んでいる事から各人種間の経済格差を埋めようとする人種間協調を目指すものとして、1990年を目標にすべての企業の雇用構成をマレイ系50%、中国系40%、インド系10%とし、また、産業の資本構成比をマレイ系30%、非マレイ系40%、外国系30%とする。

マレイ語を公用語として、マレイ語による国語統一を計る。

マレイ系を政府機関職員にして採用する。

大学入学選抜試験でも、成績順にすると中国系ばかり入学することになるので人口比率で入学させるなどの政策です。

ここ数年間、経済は順調に伸び、経済成長率は7～8%の成長率を続けて、労働力も不足であるため人口増加政策を取っています。国民の平均年齢も35才程度ですし、人口の伸び率も3%ほどで、非常に高く、若々しく活気に満ちた国です。人口増加政策を取っている、めずらしい国です。

人口100万の首都、クアラルンプールでは、開発が進み新しい国際級の高層建築や高速自動車道ができて東京の新宿を見る感がしました。
しかし、経済が進展している現在は問題が表面化しないが、非マレイ系の住民からは、反発も強いようです。

もう一つの政策はマハティール首相がみずから打ち出した「Look East政策」といわれるものです。
長い植民地時代の影響から、立国のお手本は凡てイギリスでした。全て西欧に学んできたのです。
マレイシアはアジアの民族です。同じアジア人が東洋に眼を向けたとき、アジア民族の先進国があるではないか、西だけが先進国ではない、「東を見よ」と西欧一辺倒からアジアの先進国、日本、韓国に学べと政策転向をした、このことが「Look East Policy」（東方政策）です。
これは、日本や韓国の労働者が勤勉であり効率の良い社会を作っている事に学ぼうというものです。
マハティール首相は、このためには、教育、人造りを重視して行く方針を立て、日本の労働倫理、経営哲学を学びこれをマレイシアに応用して産業発展を遂行しようとするものです。
そのために産業技術研修生を計1,870 名、留学生（大学、高専）計、735名を1982年より日本で受け入れ、今年までに上記の数に上っています。
社会、風土の異なる、伸び伸びした環境の中でどこまで日本の技術、労働倫理が反映されるか、成果を上げるには、まだなお、多くの努力と時間を必要としそうです。

6. ＪＩＣＡ　マレイシアの協力概要

(1) 日本のマレイシアに対する技術協力は、1987年には前年比12%伸び、1988年はさらに34%の大幅増となった。また、ＪＩＣＡベースの技術協実績は、1953～88年累計で393.8 億円でこれは全体の4.6 %を占め、援助供与先国の第四位でした。また1988年度のマレイシアに対するＪＩＣＡベースの技術協力の実績は49.8億円で、全体の5.1 %を占め、援助供与先国の第五位でした。マレイシアから見た場合、1987暦年において、我国はマレイシアに対する最大の援助供与国で、ＯＤＡシェア78.5%とになっています。アメリカ、オーストラリア、イギリスなどの国が援助から手を引いた事もあって、日本の割合が高まった。マレイシアの国民一人当たりのＧＮＰはアジアでは、日本、香港、シンガポール、韓国に次いで第五位です。ゴム、ヤシ油、錫、石油など一次産品の輸出が50%を占めるが、工業化を着実に進展させてゆくには日・マの友好関係が不可欠と思われます。

(2) 青年海外協力隊（Japan Overseas Cooperation Volunteers）

派遣実績1966から1990年まで男；571名　　女；222名

他の国に比べて女性隊員が多いのは、親日的で治安が良く、日本語教師、保健衛生や、教育文化部門の要請が多いためです。

1990年派遣中100名　　西（半島）マレイシア62名　うち　女性隊員30名

東マレイシア：サバ、サラワク州　38名。うち　女性隊員16名が活躍中。

農林、自然保護、公害防止関係の協力が多いのは当然としても、日本語教師14名、幼稚園教師・保母12名、療法士、医療関係などが年々増加しているのは、日本の教育文化を取り入れ豊かな人造りを目指すのは、マハティール首相は医者出身だからでしょうか。

7.　ＣＩＡＳＴ（職業訓練指導員・上級技能訓練センター）視察

1981年、鈴木元内閣総理大臣がアセアン諸国を歴訪し、「アセアン人造り」への協力を提唱した。その中で、相手方指導員（カウンターパート）を日本で研修して、日本から専門家を派遣して、端的に言うならば、金属、機械、電気、プラスチィック類、加工、計測制御、一切と日本的監督技法（ＱＣ手法）や指導技法も含めて技術移転しようとするものです。1983年から協力が開始され、1987年に協力期間を延長して技術協力が続いている。

建物建設22億円、機械設備供与13億円、鋳物、金属加工から指導技法まで14部門の専門家を日本から派遣しています。マレイシア工業化の担い手となる技術教師の育成機関で、職業訓練学校の職業訓練の先生を養成する学校です。

マレイシアは大きな期待を持って職業訓練学校を10校に増やす計画です。

アジア新興工業国で国産自動車を造れるのは、韓国とマレイシアだけです。この事で国民の工業化への意欲の高揚を計ろうとするもので、日本の三菱自動車とのライセンス生産です。エンジンとか電子部品などは日本からの輸入だとは言え、マレイシアのプロトン社で組み立てられていることは、れっきとした、マレイシアの国産車です。「Ｐｒａｔｏｎ　ＳＡＧＡ」という名前でマレイシア国立博物館のロビーに展示してありました。1300～1500 cc, 日本円にして 120 ～ 160 万円くらい。将来は日本や韓国のような工業国にするという方針が、少しずつでも浸透してきたその証が国産車「プロトン・サガ」に代表されているのだと思う。

8. アラムシャーの中高等学校視察

ラオ校長以下12名の先生方から大歓迎を受けました。青年海外協力隊員の、女性日本語教師、3名が活躍しておられました。この学校は、英国式の全寮制で、1学年4学級、1学級の生徒数30名、下級中学3年間、上級中学2年間の5年間の就学期間ですが、更に大学予科2年間を含む国立の中高等学校です。マレイシア全州から国の統一入学試験を実施して秀才を集め、教育しているエリート達ですので学習意欲は極めて高く、過酷なまでに厳しい学校生活や寮の生活様式です。40分授業の1日9時間制で、休憩は昼食休み時間30分だけです。寮での生活時間も殆ど自由時間はありません。

生徒数は600人程度なのに、教員73名、寮関係職員75名と、教職員の数も多く、施設設備は古いながらも、充実していました。国家有意の人材を養成する教育に掛ける熱意を窺い知ることができました。マレイシアでは、このような国立学校を全国で28校設立しており、更に建設を予定している。この生徒の全員が大学に進学する、イギリスの有名大学にも20%くらい進学する。H・Rにマレイ語で努力、栄光、勝利、前進、成功などの学級の前が付けられていたり、英語はマレイ語とほぼ同じ程度に読み書き出来たり、日本が明治時代に西欧の教育制度を導入して、国家の発揚発展を計ったのに模しているかに感じました。

9. おわりに

今回、マレイシア、シンガポール研修視察に参加し、新しい視点で東南アジアを見る観点を養うことができたように思う。また、ＪＩＣＡの事業内容についても、青年海外協力隊の活躍とその重要性について理解を新たにし、深めることができました。

原料輸出国から工業国への脱皮、多民族を抱えての融和強調策、経済格差の是正、などの問題解決に関しても長い時間と努力が必要であると思うが、いずれにしても「人造り、教育の重要性」が揚げられている。アジアの先進国、日本に寄せる期待は大きく、工業技術や、生産の効率化を計る事のみでなく、勤労意欲、生活倫理、日本の文化、治安の良さ等、アジアという同じ地域に住む、同じ民族として、国造り、人造りのお手本になっている事を考えたときに、逆に日本の工業化、開発のあり方、経済倫理や教育のあり方はこれで良いのかと、考えさせられる事もあり、日々の教育活動にまた、新たな視点を見だした思いがします。

氏　名　高畑正人
所属学校　茨城県立水戸農業高等学校
担当教科　英語

はじめに

国際協力事業団（ＪＩＣＡ）のお骨折りにより、平成２年８月22日より30日までの９日間、マレーシア・シンガポールへの海外研修に派遣される機会を得た。東南アジアの旅は、私にとって初めての体験であり、見るもの聞くものすべてに新鮮な驚きと感動の連続であった。また、ひとりの日本人として国際協力における日本の立場を大いに考えさせられる旅でもあった。以下、この旅から感じ得たものを簡単にまとめてみたい。

1．視察等に際して特に主眼をおいた点

日本のマレーシア・シンガポールに対する技術協力の実態、特に専門家や青年海外協力隊の活動状況の把握、無償資金協力によって完成させられた施設等の視察、そして、両国の産業、社会制度、教育事情など、これからの国際理解教育の一助となり、私の中にある机上の空論的な国際理解から脱するためにも、自らの目で確かめつつ研修させていただいたつもりである。

2. 国際協力の現場で

(1) 日本の国際協力の概要

マレーシア

マレー人、中国人、インド人などの複合多民族国家であるが、国家政策として「ルック　イースト政策」（日本にならえ）をとり、日本からの多大な技術協力を受けながら、現在急速に発展している国である。単なる物質的援助にとどまらず、いわゆる「人づくり」（現地人指導員育成）を目指してマレーシアの研究員を熱心に指導しておられる日本の専門家や協力隊員の姿を見た。特に、最近の機器を用いての栽培、工具の制作、鋳造、自動車の修理など大きな成果をあげている。専門技術を学ぶため日本に派遣されるマレーシア人も多い。

シンガポール

既に相当レベルの経済発展を遂げている国であるので、高い技術水準を背景とするニーズに即応した技術協力を推進している。「先端技術」や「生産性向上」に焦点をおき、コンピュータソフトウェア技術、ロボテックスなどハイテク分野の協力を重要視している。シンガポール

はアセアン・太平洋諸国の第１の中心国であるので、今後、日本とシンガポールがお互いに協力し合い、さらに遅れている近隣諸国への技術援助を目指している。

(2) 気になったこと

我々日本人は、意識、情報とも欧米志向に偏りがちで、発展途上国の実情については、それらが抱える社会的、経済的諸問題等、十分理解されていないのが現状である。また国際協力における物質的、資金的援助の話題は、マスコミ等でもよく見聞きするが、マレーシアに見られる「人づくり」の観点での協力は、残念ながらあまり知られていない部分でもある。同じアジア人でもお互いに知らな過ぎる面が多々あるので、より人間的レベルでの心の交流や文化的な交流と相互理解が必要だと思う。国際協力の現場で何より大切なのは人と人との関係である。

## 3. 我が国の協力ぶりをどのように理解すべきか

ＪＩＣＡマレーシア事務所、シンガポール事務所において日本の両国に対する技術協力の実態、社会経済状況等について説明を受けた。長年にわたり実に多くの援助、協力がなされ、それぞれの国の実情に即したプロジェクトも既に多数完了し、また新たなプロジェクトを目指して日々努力する専門家や協力隊も多い。近年、開発途上国に対する我が国の援助（ＯＤＡ）については、単に金銭的、物質的援助に過ぎない等いろいろな批判も聞かれる。確かに金銭的、物質的援助は必要欠くべからざるものであり、カネ・モノがなければ何の援助もできない。しかしここで我々が誤解してならないことは、金銭的、物質的援助はあくまでも過程であり究極の目的ではないということである。我が日本が目指すものは、『人づくり』『国づくり』にある。母国日本を離れ私生活を犠牲にし、決して快適ではないだろう異国での生活を強いられながらも『人づくり』『国づくり』を目指して汗を流される専門家や協力隊の姿を目の当たりにして、単に金銭的、物質的と批判するようなことがどうしてできるだろう。

## 4. これからの国際理解教育のあり方

将来、海外へ出て仕事をしたいと考えている生徒も多いことだろう。しかしその殆どは非常に漠然とした形で夢想しているに過ぎない。彼らには、まず、海外でどのような仕事や活動の場があるのかを具体的に示す必要がある。その意味で、今回のような実地の研修はたいへん有益であった。専門家や協力隊の現場活動の実態を授業や資料展示を通して伝えたい。またそれぞれの分野のエキスパートになること、これが国際協力の第１歩であることも教えたい。

私は英語の教員であるので、言葉については人一倍関心を持っている。国際協力の最大の壁のひ

とつは、言葉の問題である。マレーシアという多民族国家における言語の状況を教えることも大切である。いろいろな民族によるアクセントの違いはあるものの、とりあえずは民族間の共通語として英語が機能している。このありさまを理解することは、英語を学ぶ意欲をさらにかきたてることだろう。

## 5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

ＪＩＣＡとしてのプログラムの都合があるのでやむをえないと思うが、無理を言えば、高校現場としてはもう１週間程度早めていただければ、帰国後の整理、２学期の準備など余裕が持てると思う。期間は内容的、体力的に考えると妥当だと思う。

(2) 研修日程および訪問先

午前、午後それぞれ１カ所ずつの訪問視察でしたので時間的余裕もあり、理想的な研修ができた。マレーシアの都市部周辺を中心とした研修でしたが農村部の視察も出来たなら“マレーシアの素顔”も理解でき、また違った意味で国際協力の意義をとらえることが出来たかも知れない。

(3) 所感

最近、国際交流がとみに叫ばれている。そのような世界事情の中、日本を離れ、専門技術を教えながら身を持って国際交流をしておられる方々の姿を拝見し、単なる口先だけでの国際交流では何の役にも立たないことを改めて痛感した。専門家や協力隊員の地道な努力の積み重ねこそが、人と人との相互理解を生み出し、発展途上国の国民生活の向上につながり、ひいては国家間の強い信頼関係ができるものと思う。

学校現場において国際理解教育に携わる者として、将来ある生徒たちには、十分に国際交流の大切さを教え、少しでも多くの若者が国際協力に関心を抱いてくれるよう指導していきたい。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えてくださいましたＪＩＣＡの皆様そして茨城県高等学校国際教育研究協議会に、この紙面をかりて心から御礼申し上げます。特に同行されたＪＩＣＡの中川氏、山田氏には細部に至るまでお世話いただき感謝あるのみです。ありがとうございました。

氏　　名　市 来 福 寿

所属学校　静岡県立島田商業高等学校

担当教科　商業

研修旅行前を含む日記より。

6．18　国際理解教育内田先生よりシンガポール・マレーシア視察の話打診あり。

6．26　必要書類の健康診断の為生駒内科へ行く。

7．5　旅券申請。浜松の静岡県西部県民サービスセンターへ。

7．17　国際協力事業団松下氏より正式決定の電話あり。

7．20　「アジアの熱い風」共同通信社　読了。1984年発行で少し古いが新聞記者によるアジア（中国・韓国を除く）各国の報告。

★アジア関係特にマレーシア・シンガポールの新聞記事を切り抜いている。

7．25　ＪＩＣＡ広報課及び三栄トラベルに電話し日程について聞く。

7．27　海外旅行の静岡県への届け。

★トラベル英語会話より抜き出し単語カードに記入。

8．2　ＡＥＴ（ASSISTANT ENGLISH TEACHERS）のジェフ・ティラーさん5月にマレーシア旅行。マラリアの薬が余っていると聞き8錠もらう。（かなり僻地に行くのかも知れないと思ったため。今から思うと全く勘違いであったようだ。）

8．14　三栄トラベルより出発前日のワシントンホテル宿泊の件で電話あり。

8．15　マラリアの薬出発1週間前であるので服用す。

「ラジオ英語会話」は休まず聞いている。自分の力はせいぜい「続基礎英語」位であるが。

旺文社「でる順・英単語2000」の単語勉強。

8．17　ＪＩＣＡより受信。説明会・共済・研修ほか「国際協力」誌。「日本の経済援助」読了。山本剛士著　現代教養文庫　（経済援助のあり方など。かなり批判的なものあり。経済援助に関係して知らなかった事が多く、勉強になった。）

「新・東南アジアハンドブック」のマレーシア・シンガポールの項読む。国際文化会館・松本重治監修・滝川勉編　講談社　（この本はボリュームがあり、とりあえずマレーシア・シンガポールの経済関連の部分のみ読んでおく）

8．18　ＣＡＮＯＮのＥＯＳ購入。（使い慣れたカメラでも良いが恐らく団体行動では素早い撮影が要求されると想像したため）

8．19　携帯用再生専用カセットプレーヤー購入。書店で「百万人の英会話」（テープつき）購入。

★旅行ガイドブック　昭文社発行「マレーシアの旅」「シンガポール」読む。歴史・文化・政治経済にもふれている。

8．20　三栄トラベルより出発時間変更の件。

8．21　ＪＩＣＡでの打ち合わせ　自己紹介（マレーシア行きは全国各県より14名。農業５名、英語４名、社会３名、理科、商業各１名）　盗難麻薬について注意　ワシントンホテル宿泊は９人。

8．22　ＪＡＬ717便13:30発　シンガポール・チャンギ空港着18:53。21時発　クアラルンプール・スパン空港21:55着　時差１時間。　チャイナタウンに接したホテル「フラマ」23:15着。近くで遅い夕食、ドリアンを初めて食す。

8．23　ＪＩＣＡ事務所訪問　旅程・訪問先説明受ける。　あまり注意して聞いていなかった事柄が訪問後にその重要性に気付いたりする。

★「複合多民族国家」「労働人口が少ないので増やしたい」「青年海外協力隊の活動」「技術移転の個別専門家」「マレーシアの麻薬患者の問題」「ルックイースト政策と日本語教育」「イスラム化とブミプトラ政策」など。

午後シャーアラムの大工業団地へ。広々とした感じ。団地への往復の車の量も多い。オートバイ専用道路もある。

★ＳＩＲＩＭ（Standards and Industrial Research Instistute of Malaysia）

マレイシア標準工業研究所の略。　このＳＩＲＩＭ（シリム）に所属する金属工業開発センターの一部門である鋳造技術部門を日本が協力。基礎産業の一つとして鋳造技術の重要性を理解。マレイシア政府は部品の国産化をはかるため基礎産業を育成しようと努力している。日本側派遣専門家、研修員受け入れ、供与機材などについて。

帰路シャーアラムのモスクへ立ち寄る。外側からの撮影のみ。

8．24　午前シャーアラムスクール見学。　ラオク校長先生より学校説明。協力隊員の日本語教師東貴子さんの説明。尾形有紀子さんの授業見学。男子全寮制。国内から優秀な生徒を集める。40分の９時間授業で休憩時間もなく（途中少しある）、次の授業の先生が廊下で待っているとのこと。生活時間の説明ではお祈りとか自習とかが多く、厳しい教育が行われているように見える。原則的に落第はないようだ。生徒に持ち点があり、良いこと悪いことで加減されるとか。クラス担任は生徒の成績をコメントし、各生徒の寮の親代わりをするメントールに渡すので生徒個人の人物については詳しくないと聞く。

午後ＣＩＡＳＴ訪問。ＣＩＡＳＴは、The Center for Instructor and Advanced Skill Training（職業訓練指導員・上級技能訓練センター）の略と知る。　1981年に、当時の鈴木善幸首相がＡＳＩＡＮ人造りへの協力構想を提唱、それに応えてマレイシア側が提案したもの。マレイシア政府は貧困の根絶と社会の再編成を目指すという。それには技能、労働者の養成が必要である。そのための各種訓練施設の指導者を養成するという目的を持っている。

説明を受けたり見学するまでは単なる職業訓練所と思っていたが、いわばここは先生を育てる学校と理解す。日本から建物建設・機械設備供与し、国際協力事業団（ＪＩＣＡ）から７科14部門の専門家を派遣していると知る。昨日のＳＩＲＩＭでもそうであったが、カウンターパートという言葉など、このような研修で初めて理解できた言葉がかなりある。一つは自分の英語力のなさやこれまであまり関心がなかったからかもしれない。　また見学で説明を受ける中で、プロジェクトとか技術移転とかの言葉から国家間の政治がからむ問題を意識することがかなりある。これは当然のことか。

★ここでの見学ではＳＩＲＩＭ同様、国産車「プラトンサガ」が話題にのぼる。やはり自動車は関連産業の裾野が広いから当然である。クアラルスプールのタクシー（赤と青のツートンカラーの方）にプラトンサガを見る。ＡＶ教材の作成は自分の仕事と関連があり興味があったが詳しく見れず。

夜、クアラルンプール市内マレー料理の夕食とマレー民族舞踊を見る。

８．25　クアラルンプール南方のセルダンにあるマレイシア農科大学見学。　本部で説明を受けたりスライドを見る。　学生8493人広さ1200haと聞く。マイクロバスが大学構内に入るとともに、そびえるヤシの並木の美しい風景を見る。ゆったりとし、緑豊かである。こういう所で勉強できたらと思う。海洋水産部の瀬野さんの研究所に行く途中、まずゴム園見学。現在「商品」という科目を指導しているので、その次に見た油ヤシにしても実際に見ることが出来たのは幸いであった。写真をかなりとる。旅行全体では36枚どり16本、フジの「パノラミック（24枚どり）」５本使った。ゴム園でインドのタミール人労働者を導入した歴史を思い起こした。マレイシアに来てヤシを見るのは嬉しい。ヤシにも種類がかなりありそうだ。ココヤシが普通のヤシとか。外来語事典によるとパームとはヤシ科の植物の総称となっている。油ヤシは、特に油を多く出すから油ヤシの油が狭い意味のパーム油であろう。目的の瀬野さんの研究所ではコイの養殖を見た。稚魚である。金魚も研究。金魚は沈性？粘着卵とかで生徒に面白いとか。計画した仕事が自分の任期を過ぎても契約通りに果たせるようにしなければならないとの瀬野さんの言葉が記憶に残る。

午後　土曜日のため企業など午後休み。　クアラルンプール市内見学。

「マスジット・ジャメ回教寺院」　中央広場「連邦事務局・最高裁判所・中央郵便局」

「内乱記念塔・国家記念碑」　異国情緒を味わう。国家記念碑の独立戦争で戦死した兵士の記念碑が印象に残る。

「錫製品工場見学」「民芸品センター」「国立博物館」「中央駅」

クアラルンプール最終日。夕食後、チャイナタウンのペタリン通りの夜の賑わいを団長の斎藤実先生と見て回る。

8．26　我々のマイクロバスにはＢＡＳ　ＰＥＳＩＡＲＡＮと書いてあり。ガイドは、麦球雄（マイキュウ　ホン）さん。ときどきインド人のＫ．ＳＵＮＤＡ　ＲＡＪＩ（スンダ・ラジ）が乗る。本日Ｋ．Ｌ発ジョホールバルへ移動。実を言うと工場や学校ばかり見てきたのでマレイシア農大は別としてヤシの茂る田舎を見たかったが、研修で来ているのであって観光気分であってはならないということ。　赤土の道を行く。ＪＩＣＡ中川さんに鉄分の多いラテライトと聞く。バスが揺れるので撮りたかった農村風景が撮れず残念。

★マラッカに立ち寄る　古い中国寺院「青雲停」　「オランダ広場」「セントポール教会」「サンチャゴ砦」。ガイド書にあるようにエキゾチックな趣あり。曇天のため見たかったマラッカ海峡の海の風景がはっきりせず残念。　マラッカ後休憩地で果物食べる。種類多し。

6時ジョホールバルのホテル　ラサ・サヤン着

7:30　ジョーズにて女子レジデンシャルスクール、日本語教師・協力隊員の百合草さんと平賀さん、ドラッグリハビリテーションセンター六郷さんとの夕食会。マレイシアに来て英語・中国語は見聞きするが、本来知るべきマレイシア語を覚えないという意味を考える。たったの数語、アバカバ（こんにちは）、バスの車体のＳＥＫＯＬＡＨ（学校）、ＪＡＬＡＮは通りと言う意味か。百合草さんが勉強のことをブラジャーというと教えてくれる。面白いので覚える。

8．27　ドラッグリハビリテーションセンター10:25着。麻薬患者の厚生施設だが職業訓練を受けながら更生・社会復帰する。藤細工・農作業・自動車整備・製パンその他様々な職業訓練。各職業ごとに軍隊式の挨拶を受ける。更生程度によって赤・黄・緑・白とシャツの色が変わることを興味深く感ず。六郷隊員は自動車整備担当。理髪・ミシン作業・木工芸・バンド演奏もある。正面から写真は撮れない。写真を撮られるかも知れないと意識してか、俯き加減に「上を向いて歩こう」を演奏してくれたのが印象に強く残る。

午後2:15　シンガポールの通関手続き。混雑した検問所の雰囲気は厳しいと聞いたが我々には簡単な検査であったのだろうか。しかし、さっきまでのマレーシアからあっと言う間のシンガポールへと来て、これが国境かと不思議に思う。

3:45ケインホテル着。シンガポールドルとの交換でマレイシアとの経済力の差を感じる。8月22日のクアラルンプールでのマレイシアドルは1ドル58円弱。本日のシンガポールは1ドル約87円。夕食をニュートンサーカスでとる。旅行全体を通じて中国料理を食べる機会が多かったが、特にシンガポールではこのニュートンサーカスの雰囲気に中国人の多さとか、シンガポールと中国人の歴史を感じさせられる。

8．28　ＪＩＣＡ事務所訪問。シンガポール事情を聞く。非常な経済発展だがデメリットもある。淡

路島の大きさと聞く。私の実家は神戸の淡路島に近く、過去4、5回行っているのでその大きさが感覚的によく分かる。狭い国土の将来が心配されるとのこと。日本などから技術を導入する。「提案制度」「チームワーク」「根回し」「交番制度」などソフトウエア面でも日本から学ぶという。この根回しや交番を理論づけて導入という点に興味を持った。一方、工業化にあまりにも力を入れすぎることの反省も出ており、伝統文化や芸術方面を見直すことを考えつつあるというのはうなづける。

午後2:10ワールドトレードセンターのＪＳＩＳＴ訪問。JAPAN-SINGAPORE INSTITUTE OF SOFTWARE TECHNOLOGYの略。日本・シンガポールソフトウエア技術研修センター。事前に読んだ「アジアの熱い風」をこの報告の為に読み直すと、ＪＳＩＳＴのことがシンガポールの最初に出てくる。先端技術の導入に懸命と書いてあるが、そのとおりのようだ。同センターの教師との懇談は和気あいあいであった。私と話した男性教師とは教育制度の話しになる。大学進学率は５％くらいとか。

夕食シャングリラホテル。シンガポール教師との懇談。友好交流で日本へ来たことのある人達。中学校歴史の教師ＣＨＥＮさんと隣合わせる。同テーブルに中国人女性・家庭科WONG WEN LIさん、インド人男性・商業担当のそれぞれ若くて明るい感じの青年。日本の歌もよく知っている。英語が完全には通じなくてもかなり話しはしたように思う。そのことを嬉しく思う。

8．29　10時　ウエストコーストの日本人学校（中学校）着。元小学校も一緒であったとか。世界最大の日本人学校と聞く。日本へ進学希望かなりあり、学校としては日本の学校へのお願いにあがるなど相当の努力がいると聞く。その進学の関係からこちらの卒業式に戻って来ない生徒も出てくるという。そのため卒業式を１月25日にしており３年生は既に２学期の授業に入っている。校内見学。

午後マウントフェーバーよりロープウェーでセントーサ島へ。WAX MUSIUMの「シンガポールの先駆者達」「降伏の間」で歴史を勉強。その後市内をバスで回る。時間を２回。「マーライオン」「日本占領時死難人民記念碑」ほか。　オーチャード通りで買い物。

ＪＡＬ710便22:25発

成田空港着午前6:34着　北海道・沖縄などの遠方の先生、それぞれ再び飛行機で。

終わりにこのような旅行の機会を与えて下さったＪＩＣＡ関係者の皆さんに大変感謝を致します。旅行中、中川さん山田さんには大変お世話になり感謝しております。青年海外協力隊の方々の活躍ぶりを

見てすがすがしい気持ちになりました。その一人は僻地は自分にとってはプラスイメージと言いましたが、こういった人達に会うことができたことは大変嬉しかったことです。10月に文化祭があり、旅行中に撮影した写真を展示する計画にしております。

# マレーシアでの研修に参加して

氏　名　片山　茂
所属学校　三重県立松阪高等学校
担当教科　英語

今回の研修で、私たちはマレーシアとシンガポールという２つの国を見て来たわけであるが、私自身にとっては、マレーシア国内で見聞きしたことの印象が非常に強く、逆にシンガポールでは異国としての魅力を感じるものは発見できなかった。実際、マレーシアに滞在した期間の方が長かったわけだから、これは当然かもしれないが、マレーシアは今まで全く未知の国であり、また、初めてこの地にとび込んで実感したものが自分のイメージと大きく違っていたことへの驚きもあって、大変すばらしい体験ができたという気がするので、この国で見聞きし、感じたことをまとめておこうと思う。

マレーシアは現在1700万人の人口をもつ国であるが、政府は西暦2000年までに2000万人まで人口を増加させなければならないと言っているそうで、開発途上国に多い、人口増加に悩むパターンとは異なり、積極的に国民を繁栄に導こうという政府の姿勢がうかがえる。

国民は、主として三つの民族で構成されており、マレー系民族が50％と１番多く、政治面ではこの民族が中心になっていると思われる。また全体の30％は中国人であり、抜け目のない商売根性でこの国の経済の実権を握っている。全体の10％と言われるインド系民族であるが、この民族はいつも表面に出て働くことをせず、目だたない仕事を担当させられているようである。

私たちの宿泊したホテル・フラマは中国人街にあり、朝７時ごろ外にぶらりと散歩に出かけると、すでにそこには露店が並び人があふれていて、街を行く人々の顔には驚くほど活気が溢れていた。また夜９時過ぎに街に出ると人の群れは最高潮に達し、12時近くになっても街が生き生きしているのである。このような街の活気が私にとっては非常に新鮮に感じられた。

ただ、マレーシアの人々は、仕事面においては日本人のようにこつこつと働くのではなくて「のんびりした」感じが強い。１日の労働時間は7.５時間と決まっているらしいが、途中で休憩もはいったりして実質の労働時間はかなり少ないらしい。働きたい時に働くという主義のようで、それがいかにもこの国らしい。

さて、これから先は、もう少し分野別に述べていきたいと思う。

〔教育〕

この国では、ブミプトラ政策というマレー人優遇政策がとられており、教育においてもマレー人だけがかなり優遇されている。したがって中国人はかなり努力をしないとマレー人とは肩を並べることはで

きないし、中国人はほとんど大学には入れないということだ。

教育制度は、この国がかつてイギリスの植民地であったため、イギリスの制度に近い。イギリスのパブリック・スクールに似たレジデンシャル・スクールという全寮制のエリート養成学校が国内に6校置かれている。

私たちは、アラム・シャー・スクールというレジデンシャル・スクールで日本語を教えている3人の女性協力隊員の活動を見る機会を得た。この国の人々は日本語への関心が高いと聞いていたが、6校のレジデンシャル・スクールで日本語を選択して学ぶ生徒は年間1500人程度で、アラム・シャー・スクールでも、アラビア語、フランス語、日本語の中から今、日本語を選択しているのは全部で133名と、絶対数はかなり少ないのである。しかし、現在の日本とマレーシアの関係を考えれば、国際交流という観点からも、彼らに日本語を知ってもらうということは意義のあることだと思うし、この任務に携わっている隊員の人たちには是非頑張ってほしいと思う。私たちは、この学校で、2年生の日本語の授業を見学させてもらった。テキストは隊員達によってオリジナルに作成されたユニークなものが使われていた。「箱の中に3本のえん筆があります」というようなごく簡単な表現だったが、生徒たちは目を輝かせて大きな声でくり返し練習していた。

ここで日本語を学んだ子どもたちが、将来において日本とマレーシアの交流に貢献してくれることを祈りたい。

〔産業〕

この国の代表的な産物といえばゴムと油やしであり、なるほどこの国内を車に乗って移動してみるとゴム林、ヤシ林の広大さに驚く。私たちは農業大学を訪問した際、この大学のゴム園でゴムの木から溢れ出る樹液をこの目で見て、この国には資源が豊富であるという事実をあらためて実感した。

農業大学では、協力隊員によって、魚の養殖のための技術協力と研究が行なわれていた。中国人の多いこの国では鯉が食用としても鑑賞用としても大きな価値があり、したがって養殖に対する関心が高まっているらしく、日本の技術がこのような所でも生かされていたのである。

第二次産業においてマレーシアを代表する製品はといえば、それはこの国唯一の国産自動車、「プロトン・サガ」ではないだろうか。実際、街を走っている自動車はテクシー（ここではタクシーのことをこう呼ぶ）も含めて半数以上がこのプロトン・サガなのである。「プロトン・サガ」というのは、「種が実を結ぶ」「達成」というような意味らしいが、この国ではいちばん〝安物〟というこの車を、マレーシアの人々は産業発展の結晶として誇りにしているようで、国立博物館の正面ロビーには、この車をテレビ付きのリムジンに改造したものが展示してあった。しかし、この車は、日本の三菱自動車が技術協力を行ない、エンジンなどは全て日本製で、マレーシアで実際に作られたのはボディだけらしい。し

たがって、これもまた日本のコピーであり、本当に純粋の国産車が登場するのはまだ先のような気がする。ハイ・テクと呼ばれる日本の高度な技術に比べれば、この国の生産技術はまだまだ遅れている。

その遅れた技術を向上させる目的をもった二つの機関を私たちは見学することができた。１つはＣＩＡＳＴという、上級職業訓練を教える先生のための研修センターであり、ここでは平川さんという日本人がコンピューターのプログラムを製造過程に組み入れるための指導にあたっていた。また、ここにある機材は全てＪＩＣＡの援助で設置されていると聞き、それをこの目で見て、ＪＩＣＡのこの国に対する貢献について実感することができた。

もう１つはＳＩＲＩＭという工業研究所で中小企業をサポートするための機関であった。ここでは、マレイシア鋳造技術協力事業というプロジェクトを見学し、チーフアドバイザーとして働く原さんを含む３人の日本人専門家に会うことができた。ここは、やはりＪＩＣＡの協力もあり立派な設備が整っていたが、この国の中小企業ではそのうちのごくわずかしか普及しておらず、これからのマレーシアの産業発展のためには、いかに国内の中小企業の技術、設備の向上をリードしていくかが鍵であるということだった。

〔宗教〕

この国では、マレー人はイスラム教、中国人は仏教、インド人はヒンズー教というように民族の違いで信仰する宗教も明確に分けらてるが、特に目についたのはやはり回教徒にまつわるものだった。モスクと呼ばれる回教寺院は国内のあちこちに点在し、私たちの目をひいた。回教徒は１日に５回、メッカの方角に向かって礼拝をするため、ホテルの天井にはメッカの方向を示す矢印がつけられている。１日の最初の礼拝が朝５時半ごろということで回教徒たちは早起きである。私たちが訪れたレジデンシャル・スクールでは生徒の日課の中に礼拝の時間がちゃんと設けられていたし、農業大学のキャンパスには、学生用の立派なモスクが建っていた。この国の人々の生活は宗教と密接に結びついて成り立っており、そのせいか、この国に滞在していると、異文化に接しているという感じが強かった。

〔麻薬〕

麻薬はマレーシアの国内において最も大きな問題の１つである。現在、国内には14万人の患者がいるといい、国も麻薬所持に関しては非常に厳しく「10グラム以上の麻薬を売る目的で持っている場合は死刑」とされており、外国人でさえも処刑の対象となった例もあるという。

政府は対策事業として国内に19の麻薬患者更正施設を作り、年間1900万ドルの予算を用意してこの問題にとり組んでいる。ジョホールバールにも400人が収容されている施設があり、ここにも協力隊員が勤務しているということで、私たちは内部を見学する機会を得た。見た目には正に刑務所であるが「ここはあくまでリハビリセンターである」ということだった。〝生徒〟たちはこの施設の中で家具の製作、

家畜の飼育、調理、バンドの演奏など社会に復帰した時に役立つ訓練を受けているのである。この施設の中の机、椅子など設備のほとんどは生徒の作品であった。

静岡のある自動車会社に勤務していたという協力隊の六郷隊員は、ここで生徒たちに自動車整備の技術を教えていた。自動車整備はここでは人気のある職種だという。彼はここでの勤務や生活には満足しているように思われた。もっとも、ジョホールバールやクアラルンプールにいる隊員は、奥地に勤務する隊員に比べれば、様々な点で恵まれているのだろうけれど。

とにかく、今回の研修で訪問した協力隊員の職場の中で、私が1番印象に残ったのはこの施設であった。

〔最後に〕

私にとってこれまで、マレーシアという国は全くなじみのない、関心のない、遠い国だった。しかし、この研修を終えて、この国がいかに日本と密接に結びついた国であるのか、日本がこの国の発展のためにいかに貢献してきたのかということがよくわかった。日本の途上国への援助については、数々の問題点も指摘されてはいるが、相手国にとってプラスになっている面もかなりあるということを感じた。雑誌「週刊新潮」の9月6日号に、「青年海外協力隊をこんなに堕落させたばらまき」という見出しで協力隊員の実態とＯＤＡ（政府開発援助）に対する批判の記事が載っていた。マスコミは批判を好む。私たちは、日ごろマスコミではあまり報道されることのない開発援助のよい点をマレーシアで見ることができたというふうに思っている。

そして最後に、この研修で、コミュニケーションの手段としての英語の必要性をあらためて認識し、これから先、国際的な場へ日本の若い力を送り出していくためにも、私たち英語教員は日本の英語教育の問題点を反省し、改善のために努力しなければならないと感じた。

氏　名　西田哲章
所属学校　福井県立坂井農業高等学校
担当教科　農業

## ― マレイシア連邦国　クアラ　ルンプールでの感激と新たな道 ―

この度、私は国際協力事業団（ＪＩＣＡ）のお取り計らいとお力添えをいただき、全国高等学校海外教育協議会、福井県高等学校海外教育研究会、福井県立坂井農業高等学校のご理解とご協力をいただいて、平成２年度高校教師海外研修派遣団員として、以下のとおり研修をして参りましたので感想をもって報告申し上げます。

### 1. フルーツの王Kingと女王Queenのふるさとで

首都クアラ・ルンプール市内にあるクラマホテルの正面は、華僑係のチャイナタウンである。露店や屋台が通りの両側に立ち並び、夕方からの賑いは一際である。私たち一行が、ホテル近くの飯店で遅い夕食をとった初日のデザートがドリアンDurianであった。あの特有の臭い、独特の味覚は、３年前学校の文化際で「トロピカルフルーツを訪ねて」と題してクラブ員の生徒を指導し、展示、試食したのを一瞬にして思い出させてくれた。

さて、フルーツといえばそれぞれ名前がつけられているが、その名前である種名や品種名が王とか女王と名ずけられたり、国名で呼ばれるのは世界でも栽培がおのずと限定され、しかも収穫後直ちに食しなければ品質を損ねるものではなかろうか。

ドリアンはボボルネオのほか西マレイシアが原産とされ、その名前のDuriはマレイ語で「刺」の意、anは接尾語「なになにする物」であって、「刺のある果物」と解されるそうである。また、学名がDurio zibethinus MURR。で、Durioはマレイ名Durianから出たもの、zibethinusはイタリア語で麝香（じゃこう）、ZibettoまたはCivitから出たもので「強い香気がある」との意味だそうだ。ドリアンの果実の表面は鋭く尖った硬くて大きな無数の刺で覆われており、丁度、栗の毬（いが）をネットメロンにした大きさである。熱帯性で耕土が深く肥沃土を好み、多湿な気候が適地とされていることから、熱帯性雨林型気候をもつ東南アジアでも原産地以外あまり栽培が広まっていないことがこれでうなずけるのである。

成木は樹高20～30ｍに達し、熟すると果実は自然にドスーンと落果するのであるから、樹木の下を通るのは極めて危険な状態となろう。マレイシアでは、８～９月が成熟期で完熟して落果した果実をすぐ食べるのが一番うまいそうである。その後は、保存が効かないので樹上に小屋架けをし、夜通

し張り番をして果実を捨い集め、翌朝これを市場へ出荷するそうである。日本での落ち栗を捨う収穫法に似ている。ＪＲ北陸本線　芦原温泉駅の近くに本校の特設農場があり、９月は栗果の穫れの最中である。生徒も先生も落ち栗ひろいに追われる毎日が続くのであるが、頭や背中に容赦なく落ちてくる毬は秋風も手伝って、当れば犬でもワンの一鳴きでは済まされぬ痛さである。

落果したドリアンは早く捨わないと臭いを求めて象や虎、猿、シャム猫など動物が寄ってきて、むさぼり食うといわれている。重さ１～３kgでおまけに鋼鉄製の刺を持つ落下物に対処する一方で獣と競うありさまはさしずめヘルメットに鎧をまとう夜の忍者さながらで、どちらにしても命さながらの闘いと想像する。ドリアンは、その適地を選ぶ気難しさ、果面に鋭い刺を備えた偉容さ、そして近づき難い強烈な香気は、まさに王Kingと呼ばれるに相応しいとヨーロッパ人が名づけたのである。

ドリアンが甘くてクリームのようなコクのある味に対し、マンゴスチンは甘酸っぱく上品であっさりしていて、肉料理の食後のデザートにぴったりの感じがする。紫色の厚い殻で被われ、果頂部を押し広げると中の白い果肉が出てくる。外観は柿果をひとまわり小さくしたのに大変良く似ている。

資料によると、マンゴスチンはマレイ半島およびスンダ列島の原産とされマンゴスチンMangosteenの学名Garcinia mangostana Linn の mangostana は、マレイ名から由来したものであることがうなずける。また、雌雄異株であるが単為結果性の果樹であると報告されている。今はキウイも日本で栽培されるようになってきたが、　初めの頃は苗木屋さんも不案内であったためか、一般の方から学校へよくこんな問い合わせがあった。

「もし～、先生ですか。あのお－　うちんとこでのお－　苗をこおてのー　４～５年たつんやけどのお－　花はぎょうさんとのお－　よけーとさくんやけどのお－　なーもならんのやってのおー。なんでやのお？」

（私が苗木を購入してから４～５年栽培してみましたが、花はたくさんといっぱい咲きますが実は、全く成りません。なぜですか？）

「ほんかー。　ほんならのお－　雌の木ばっかりでないんかの－？　雄の木こおて植えなあかんのでねんかのお。」

（そうですか。それならば　雌木の品種だけしかないのとちがいますか？　雄の品種も買って植えなければダメでしょうね。）

これは、我が国の果樹で雌雄異株についてあまり馴染みがなかったことによるトラブルの例と思う。ところで、熱帯果樹についての詳しい研究報告が少なくマンゴスチンの生理生態についても未だ明らかでない点があるようである。例えば、先程の単為結果性について果実を試食してみた結果、一個の果実の中に無種子の果肉片は若干形成されているが、残りは発芽能力の無い種皮の周辺に果肉がついているものと１～３個の立派な発芽能力をもつ充実した種子の周辺に果肉がついているものの三つの

形態から構成されていた。察するところ、マンゴスチンの中に単為結果性のやや強い系統もあるように思うのであるが、クアラ・ルンプールの屋台で求めたものや昼食会で出されたデザートのみの判断で、この辺り機会があれば実際に確かめて明らかにしたいと願う次第である。

さて、その昔、英国のビクトリア女王（ 1827～1901 ）が「我が領土にマンゴスチンがあって天下第一の美果といわれているのに、これを味わい得ないのは遺憾である」と嘆いたとのエピソードは有名である。小果で可食部が割合少ないので、案外とぜいたくな果物である。そして栽培適応地が狭く、本当に気にいった所でなければ簡単には作りこなせない気位の高さは、まさに女王Queen に値するそうである。現在、北緯3°、東経 101° 40 付近であり、この原産地でフルーツの王と女王を味わえたことに深く感謝したい。

## 2. ルック・イースト政策の中での学校教育と生徒たちの表情

マレイシア連邦国の人口は約1,700万人で、その内50％強がマレイ系、30％が中国系、10％がインド系、他10％弱がボルネオ島集合の原住民部族より構成された多民族国家である。イスラム教の教えと共に経済の発展は目覚しく、10年前の日本に似ており、現在は低迷ぎみの錫生産や天然ゴム、ヤシ油に代わる石油輸出など工業立国を目指している。国の要人はマレイシア人で占め、マレイ人優先のブミプトラ政策をもとに現マハティール首相のルック・イースト（東方に学べ）政策が全ての面で徹底している。特に、日本の高度経済を見習うべく、マハティール政策で日本語をマレイシア国の第3の言語に位置付けたいとする姿勢があらわれている。

マレイシア人が通う学校は、英国式の教育制度を取り入れている。初等教育（6年）、中等教育（7年）、高等教育の3段階で、6・3・2・2・4制である。義務教育はなく、小学校への就学率は、ほぼ100％とのことで授業料も無償である。

初等教育である小学校（PRIMARY SCOOL）の修学年限は6年、就学年齢も日本と同じく6歳からである。

中等教育は3段階に区分される。下級中等学校（LOWER SECONDARY SCOOL）、上級中学校（UPPER SECONDARY SCOOL）、大学予科または専門学校等に分かれる。下級中等学校は日本の中学校に該当し、修業年限は3年の普通科総合コースである。就学率は約85％である。上級中等学校は、日本の高等学校2年までに相当し、修業年限は2年。普通教育（文科系・理科系）、技術教育、職業教育の各学校に分かれ、就学率は約48％である。その後、大学準備過程（修業年限は2年）へ進むものと教員養成学校（2、5年制）やポリテクニック（5、3、2年制の3種類がある）などがある。就学率は合計で約16％である。

高等教育は大学（文科系は概ね3年、理科系は4年が多い。医科、歯科系は5～6年）と大学院である。

さて、私たち一行は、クアラ・ルンプール市内のアラム・シャー中学校（SEKOLA ARAM SHAH）を訪問しました。初めに威厳あふれるラオス校長先生より学校の内容や生徒の様子などについて説明を受けました。ラオス校長先生は母国語に誇りも持たれており、終始マレイ語で説明されました。通訳はＪＩＣＡ（国際協力事業団）青年海外協力隊員で日本語教師として派遣されておられる東　貴子先生です。ラオス校長先生の説明によると、当学校の特徴は全寮制の男子校である。生徒は小学校を終えた段階で入学試験があり、選抜されて入学してくる。生徒は全員学校の寮に入り、月に一度しか帰宅できません。マレイシア国の全寮制学校では、校長1名、教頭2名、学年主任、学習指導教員、ＰＩＧＴ（ＰＴＡ）より構成されている。現在、77名の先生がおり、ほとんどは4年制大学を卒業されているが、何名かは2～3年の教員養成専門学校である短期大学出身の先生もいます。そして、外国人教師としては日本より2名派遣されている。また、全校生徒は623名で学年別人数はおおよそ100～110名くらいである。人種別ではマレイ系がほとんどであるが、わずかに中国系、インド系マレイシア人の生徒もいます。3年生になるとＳＲＰ（国家統一テスト）があり、4年生（高校1年）の文科系か理科系へ進学する。学校案内の資料を見ると75%の生徒が理科系に進学しており、工業立国として近代化を目指す生徒達の意気ごみが感じられる。

1クラスの生徒は約30名で、1～3年生の履修科目はマレイシア語、英語、歴史、地理、現代数学、総合理科、宗教の科目、道徳教育、商業、保健体育のほか、必修選択科目としてアラビア語、日本語、フランス語を設けている。また、美術、音楽も履修させている。

4～5年生になると、中学で履修した理科がそれぞれ化学、生物となる以外はほぼ同じ教科であるが、学校長の講話だけ新たに習うことになる。資料では単位数の記載がないので分からないが、英語については3教科になっているので相当重点的に教えているようである。また、生徒は全員必修クラブがあり、ほとんど日本とよくにた種目である。しかし、Silat Gayung（マレイの柔道）や太鼓クラブの国技・伝統芸も設けてあり、大変ユニークである。

4～5年生の生活時間は、朝5時30分起床、シャワー、お祈り後、朝食7時20分朝礼、7時30分より13時50分まで40分授業が9時限ある。

4時限目終了後、20分間休憩になり、お茶の時間と称して生徒は食堂で茶、菓子をいただくそうである。私たちも部屋で校長先生や教頭先生より紅茶とケーキを何度も勧められ、その好意的な接待振りに大変感激しました。

また、授業の始まりも終わりもチャイムは鳴らず休み時間なしの連続授業が続き前時間の授業が遅

れていると次の授業の先生は廊下で待機させられているそうです。後ほど校長先生の案内のもとで2年生の授業を参観しました時、ちょうど日本語の授業の最中で、先生が熱心に教えておられました。予定時間も少々オーバして終了したのですが、私たちが教室を出ると廊下で次の授業の女先生がにこやかに待っておられたのが大変印象的でした。

さて、生徒は9時限目の授業が終了すると昼食をとりシャワー、2度目のお祈りの後、寮に帰って休憩。15時よりまた教室に戻り、16時30分まで自習時間になります。ときには、この時間に補講も実施するそうです。そして、午後のお茶の時間に移り、17時15分～18時15分まで必修選択のクラブ活動なり、スポーツを中心に活動しているとのことです。生徒はシャワーを浴びてから夕食をとり、20時～23時までにまた教室へ戻り、夜の自習時間に入るそうです。ラオス校長先生の説明を通訳しながら日本語教師、東　貴子先生が、「授業の進度が遅れていたり学期の途中でも入学してきた生徒は、この自習時間に出校して教えることが度々です。」「日本人教師が担当している授業は、一応、13時50分の午前中で終えるが、生徒は4年間習っても日本語の初級が終了しなし。3～4年生の段階で補講するとなんとか日本語で日常会話が出来るようになれます。」と自分の経験も織り混ぜて話され、同じ教職の身であるものとして大変感動を覚えると共に勇気ずけられ、頭の下がる思いでありました。これよりも益々頑張っていただきたいと願うものであります。

生徒は帰寮し、最後のお祈りを済ませて21時30分に床へ就くのが一日の生活時間である。マレイシア全土に31校の全寮制エリート学校があり、その中には女子校も設置されている。女子校はもっと厳しいとの説明でした。説明をいただいた後、2年生の日本語の授業を参観しました。教室へ入ると黒板に、

八月二十四日　きんよう日
きょうしつに　つくえが　あります。
しょくいんしつに　せんせいが　います。
しょくどうに　ねこが　います。

と書かれてあり、10名程の生徒が日本人の尾形有紀子先生より一つ一つ言葉を習っているところです。生徒達の発音も正確で、先生のあとに続いて皆で繰り返し呼んでいました。黒板の右側には、カレンダー、へび、ベット、カーテンの単語が書かれてあり、どうも、「あります。」と「います。」の違いについても学習している様子でした。授業時間も終了に近づき、これまでに習ってきた学習の成果をいよいよ発揮する時が来ました。尾形先生から生徒一人一人への質問です。「マレイシアはどんなくにですか。」「たべものがおいしいです。」「　～　です。」と考えながら答えます。少しでも怪しい解答だと、先生が正しく訂正され全員で復唱します。最後に生徒全員が起立し、私たちの方を向いてお礼の言葉を日本語で発表してくれました。とても流暢な発表には、熱心な先生のご指導の賜物と思います。

授業を参観し、どの子も規律正しく姿勢に優れ、先生の一句一字を逃すまいとする食い入るようなその真剣な眼差しは、子供たちの表情から大変頼もしく感じられた。そして厳しくも誇りを持って学んでいるマレイシアの生徒達を見ると、やがて我が国と肩を並べる経済大国も間近いと強く印象づけられました。

最後に、我が国における教育も、時代の進展に伴う先端技術の導入、国際社会に生きる人材養成、多様化した生徒の対応など教育課程においても全面的な見直しが迫られている。現在、我が国の高等学校は新しい学校のあり方について検討され、生まれ変わろうとしている時である。物質的な豊かさもさることながら、二十一世紀を担う子供達が国際社会でいかに貢献できるか、これからも教育の大きな役割ではないかと思うのである。即ち、「心の教育」が鍵であると言っても過言ではないと考えているのである。

今回、マレイシア国を訪問する機会に恵まれ、アジアの中の日本として眺められることができ得ました。派遣していただいた方々に心より感謝申しあげる次第です。

氏　　名　池　田　佐和子
所属学校　和歌山県立田辺高等学校
担当教科　英語

最初に、東南アジアの国々について全く無知であった私に今回貴重な体験を得る機会を与えて戴きました国際協力事業団、研修中いろいろお世話になりました関係の方々に心からお礼を申し上げます。

## 1. 研修の主眼点

(1) かなり批判的に捉えられているＯＤＡの実態。
(2) 被援助国の人々のＯＤＡに対する反応、意識。
(3) 途上国の次代を担う青少年の意識や青少年に対する教育。
の三点について情報を得たいと考えました。

## 2. 国際協力の現場で

アラムシャ全寮制中学校、マレーシア農科大学、麻薬患者更生施設の他は鋳造技術指導、職業訓練指導、上級指導者養成所、シンガポールソフトウエアセンター等、私たちには殆んど未知の分野でありましたが、開発援助の具体的な内容がわかり大変参考になりました。又、技術指導、協力隊員の方方の真摯な姿に感動致しました。「たとえ一時的に高価な機材が埃をかぶっていたとしても、人材が育っていけばいいのではないか。」といの技術指導の方の言葉を私は次のように受けとめました。「国際協力には一朝一夕にその効果を期待、要求すべきではなく、その評価には長い時間が必要なのだ。」と。

協力事業受け入れ側の現地の人々の意見に接する機会が限られていたため、様々の事業がどのように受けとめられ、一般の人々の生活向上にどのように役立っているのか等について十分な情報を得ることができなかったのは残念です。が、各協力事業のプラス面は正当に評価され、より広く積極的に国民全体に紹介されるべきだと思います。

## 3. 今後の教育指導に生かす具体的方策

欧米諸国に関する話題が圧倒的に多い現在の英語教育教材の中で、今回のマレーシア、シンガポールを含むアジア諸国の実態、日本のアジア諸国との関係を扱う教材を英語科の授業に取り入れていくことにより、アジアに対する、又日本の担うべき役割等について生徒の関心を呼び起こしていきたい

と考えています。

4. 感想、意見

(1) 時期については、帰国後九月新学期までに一週間程度の余裕は必要だと思います。

(2) 訪問先のご都合もあると思いますが日程に関してもう少し時間の余裕があればよかったと思います。例えば、ＣＩＡＳＴの研修生の人達との懇談、農科大学の学生達との交流、全寮生学校での先生や生徒との交流等、直接言葉を交わす機会があれば、訪問先の理解に大いに役立ったと思います。又、一晩でも民泊の機会があれば収穫は更に大きかったのではないでしょうか。訪問先では、麻薬患者更生施設が特に印象に残りました。又、本来なら外部には知られたくない筈の施設への訪問受け入れには、マレーシアの人々の卒直さ、大らかさが感じられ感銘を受けました。

(3) 英語教員として、研修期間中は絶えず日本の英語教育のあり方について考えていました。「必要は発明の母」といわれますが、「必要は学習の最大のモティベイション」だと言い換えられます。多民族国家のマレーシア、シンガポールでは、英語はイギリス植民地の名残とはいえ、今や生活の必需品であります。それに比し、日本語のみで日常生活に特に支障のない日本での英語学習の目的は、現在の大学入試以外はかなり抽象的なものになってしまいます。そして、入試英語を頂点にする学校英語は批判され続けているのです。用途別、学習者の必要に応じた英語教育がなされるべき時期ではないかとマレーシア、シンガポールでつくづく思ったのです。そうすることによって教育効果も上り、マレーシア英語、シンガポール英語に対峙できる日本英語の使い手を育てることができるのではないかと思うのです。
更に、英語教育についてだけではなく、多くの制約の中で、国際協力に目を向け、心開いた青年をどのようにして育てていくのかという課題も背負い込んだ気がします。「途上国に援助に出掛けるというのではなく、誰とでも協力していける、語学力もあり心開いた人材を学校は育てているでしょうか。」と指摘された技術指導者の方の言葉が今も耳の奥に残っています。今回のマレーシア、シンガポール研修によって遠い存在であったこの国々が非常に身近になり親しみを感じられるようになりました。又実に様々なことについて考えさせられました。今後この経験を生徒を初め多くの人々に役立っていきたいと考えています。非常に有意義な九日間でした。有難うございました。

氏　　名　市 場 義 延

所属学校　島根県立出雲農林高等学校

担等教科　農業

1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

(1) ＪＩＣＡが実施している国際協力の実態。

(2) 現地での協力プロジェクトの内容と協力隊員の活躍状況。

(3) 開発途上国の生活・文化・教育の状況。

2. 国際協力の現場で

(1) 参考になったこと

ア．今回の研修でＪＩＣＡの実施している国際協力の現場を実際に見ることができ、国際協力の一端が理解できた。

イ．多くの日本の協力隊員が海外で開発途上国のために色々なプロジェクトを行ない、その国の発展のために活躍していること理解出来た。国民性の違う現地にとけ込み現地の指導者を育てその国の発展に寄与している現状に触れ感動するとともに、国際社会の一員として生きていくためには、日本人の常識で他国を判断することなく、その国の習慣や文化を理解することが国際理解の第一歩であることを強く感じた。

(2) 気になったこと

協力隊員の現地での活躍は高く評価されているが、帰国後の就職に問題がある。海外協力事業に熱意を持つ青年に対して、帰国後にメリットある施策が必要と思う。

3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力プロジェクト等

プロジェクト名

(1) マレイシアにおける職業訓練指導員・上級技術訓練センター・日本語教師の協力事業

(2) シンガポールにおける、ソフトウエア技術訓練センターの協力事業

その理由

マレーシアで多分野にわたって100人もの協力隊員が活躍していること。シンガポールに対する技術協力は高い技術水準の協力を行なっている、特に日本的風土の中で培われた制度の「生産性向上」「交番制度」等相手国社会に移しかえるソフトウエア分野の協力が重視されている

こと等、もっとＪＩＣＡの事業を国内において（特に教育現場）においてＰＲすべきである。

4. 今後の教育指導に生かす具体的な方策あるいは材料として考えていること。

今回の研修で撮影したスライド・ビデオを編集し、マレーシア・シンガポールの文化や生活の現状、ＪＩＣＡの協力事業、協力隊員の現地での活躍ぶりを生徒達に紹介し、国際理解・国際交流に対する認識を深めさせたい。

特に国際協力は開発途上国に対して与えることでなく、育て発展させていくことであること、国外にも視野を広げるとともに私達の生活実態や地域社会における役割等についても国際人の一人としての自覚を持たせたい。

5. 所感および意見

(1) 研修の時期および期間

時期については適当と思う。期間についてはもう少しあってもよい。自分の専門（特に研修したいこと）については小人数で見学する時間がほしかった。

(2) 研修日程及び訪問先

研修日程に無理もなく大変良かったと思う。訪問先も適当に配慮されていて良かったが、個人な希望を言えば一般家庭や農村部（農家）や現地の小学校も視察したかった。

(3) その他全般的な所感

私にとって初めての海外研修でしたが、ＪＩＣＡ本部事務局・現地事務局のみなさんのご配慮でなんの不安もなく有意義な研修ができましたことを深く感謝申し上げます。今回の研修で国際理解に一歩近づけた感じがします、今後この研修の成果を生徒に還元出来るよう努力したいと思います。

氏　　名　内山文夫
所属学校　愛媛県立南宇和高等学校
担当教科　社会

## 1. 研修・視察のねらい

この夏、国際協力事業団から高校教員海外研修の機会を与えられ、去る8月22日（水）より8月30日（木）までの9日間、マレーシア、シンガポールを視察することができたことは、かねてより海外事情をつぶさに見て回りたいと切望していた私にとって、この上もない幸せであった。

今日、日本は、国民総生産において米国に次ぎ世界第2位の地位まで発展してきたが、その急速な経済発展のつけとして、公害問題や貿易・経済摩擦などの様々な影の部分を背負い込んでいる。また、高度経済成長期に見失われた望ましい人間の生き方、あり方については、各方面から指摘されているようだが、物質的な豊かさとは裏腹に、充実した人間社会が実現されつつあるとは言い難い状況にある。「日は沈む」のか、「また昇る」のかは別として、日本経済、日本の生活文化、そして日本人の生き方について、いま真剣に問われていると言っても過言ではない。

では、日本を手本として経済成長を押し進め、発展しようとしているアジア世界の状況はどうであろうか。経済問題、政治問題、文化・民政問題、あるいは国民生活全般に対して、どの様な配慮をしながら、日本がたどった路をどう参考にしようとしているのか。国民は政府の諸政策にどう応え、どう貢献しようとしているのか。例えば、ＮＩＥＳといわれるシンガポールでは、資源のない国情をどの様に逆手に取って国際社会の中で生き延びようとしているのか。いま、日本は多くのことを発展途上国に伝え教えようとしているが、逆に彼らから教えられることが多くあるのではないか。

シンガポール国民の活力を直に自分の目で確かめたい、また、マレーシアは1次産品の輸出において国家経済を維持しているといわれるが、どの様にテイク・オフ（離陸）しようとしているか、さらには複雑な民族問題をどう解決あるいは調整しつつ全体の和を保っているのか、さらに、華僑の経済支配と実態はどうかなど、教科書では伺い知ることができない事情も多くある。

えてして、教育現場での情報は、遅れた部分、影の部分、どろっとした人間的な部分は省略される傾向にある。これらのところを肌で感じることができれば言うに越したことはない。むしろそれこそ生きた教育になる。

そしてＪＩＣＡ、青年海外協力隊員がどの様に活動しているか、その活動場面を高校生にどう伝えることができるか、さらにこれら事業に関心をもたせ、あわよくば事業参加への動機付けをしたい。感覚的にはアフリカなどと比べて、スマートな地域での技術協力活動が行われていると思われるが、

果してその実態はどうであろうか。今回私は、以上のような狙いを設定し、マレーシア、シンガポールの海外研修に臨んだのである。

また、将来ＪＩＣＡの方では、シルバー・エイジの海外派遣を考えていると伺ったが、高齢者がその構想の中で活躍できる場を見い出せるか、単刀直入に言えば、私もその協力隊員として参加できるかどうかをも、見ておきたいと思った次第である。

そうしてこれらの観察や体験から得たことは、社会科の授業や国際教育関係の部活動・クラブ活動において教材化できるであろうから、その狙いを持って、より多くのものを見、記録に納めたいと考えたのである。

## 2. 国際協力の現場をみて

今回、視察・訪問した各事業を列挙すれば次のとおりである。

| | |
|---|---|
| ８月23日（木） | ＪＩＣＡマレーシア事務所訪問 |
| | ＳＩＲＩＭ：鋳造プロジェクト（ＦＴＵ＝マレーシア鋳造技術協力事業） |
| ８月24日（金） | ＡＬＡＭ　ＳＨＡＨ（中・高等学校）日本語教育現場 |
| | ＣＩＡＳＴ（職業訓練指導員・上級技能訓練センター） |
| ８月25日（土） | マラヤ大学水産学部：ＪＩＣＡ派遣専門家視察 |
| ８月27日（月） | 麻薬患者更正施設：自動車整備（協力隊員） |
| ８月28日（火） | ＪＩＣＡシンガポール事務所訪問 |
| | ＪＳＩＳＴ（日本・シンガポール　ソフトウエア研修センター） |
| ８月29日（水） | シンガポール日本人学校 |

人を介しての技術移転を中心にみてきたが、鋳造技術、自動車整備技術、ソフトウエア開発技術、水産養殖（バイテク）技術など、その国が現在必要としているものである。プロジェクトを組むにしても、ただ闇雲に人を派遣し資金を供与しても、効果や有難さはないであろう。その地域・国が求めている、needs にあったものを提供するのが、技術先進国の義務であろうと思われる。さらには、その技術水準にしても、一昔前のものであっては国際信義に反することになろう。たとえ当事国の技術水準が低いものであっても、より進んだ技術を提供し、教授することが求められている。この点に関して言えば、今回視察した各種のプロジェクトは、良心的であったと考える。将来、その国の発展につながるものであれば、たとえ日本の競争相手として成長するであろうとしても、惜みなく求めに応じるのが、ロング・ランで見ると、結局は日本のためになるであろう。国際分業としての貿易問題も、垂直分業よりも水平分業に重きをおいて進めたことが、国際経済の中で求められている。将来の日本のよきパートナー、理解者を作る上でも発展途上国などに対するこのような関わり方は大いに推進す

べきであろう。そのことがひいては国民生活全般の底上げになり、発展途上国の国力、生活水準向上に資する。その意味で、今回視察した事業の有意性を見いだし得る。

日本語教師による協力活動もあったが、これも単に日本語を習得させるというにとどまらず、日本の良き理解者を育成するということで、大いなる意義があると思われる。戦前、日本が東南アジア諸国において犯した悪行を償い、ネガティブな印象をぬぐい去るためにも必要なことである。

その国の国作りに日本もお手伝いしていけるという気概をもって、協力隊員の方々はそれぞれ努力されているように見受けられた。自分の仕事に、個人的な意味だけでなく時代的な意味付けをしながら取り組めることはこの上もなく幸せなことだと思った次第である。

ただ、次のような点で気がかりがあった。

その地域・国において技術を指導され習得した現地の人々が、それをどの様に社会に還元し、他の人々に伝えていくのかが不明瞭であった。自己の技能・技術習得や生活基盤の確立に終わるのでなく、すなわち没個人的な事業で終わるのではなく、協力事業で身につけた技能や技術をどう共通の資産として活用し底辺を広げているかということである。そのようなシステムや考えを発展途上国の人々が持っていないと、日本の技術援助やＪＩＣＡ事業が単に中・上流の人々の階層固定化やその強化に寄与しただけになってしまうのではないか。

このことは、プロジェクト事業の内容が、どれだけ汎用性の高いものであるかに関係している。例えば、確かにソフトウエア開発技術は、その国の産業高度化にとって、また経済発展にとって不可欠のものである。その技術のもたらす波及効果も十分予想のつくところである。しかし、この技術を担う人々は、同国においては大変恵まれた階層の人であったと思われる。その人たちがシンガポールを担って行こうとする自負心や気概は多いに認めるが、そこには、さきに述べた心配が潜んでいると思われてならない。

また、視察した地域が、マレーシアにおいても、シンガポールにおいても、いわゆる先進地域であったかと思われるので、なおのこと心配なのであるが、国内の、より未開発の地域において必要とするものはなんであろうか、生活に密着したプロジェクトは何であろうかと、考えざるを得なかった。

さらに、技術移転と簡単に言うが、その生産様式・技術体系はその国の文化を背景に持っている。稲作の技術にしても、籾の直蒔文化のある地域に、苗を立て田植をする文化を移植するには大変な時間と苦労がいるであろう。それと同じく、工業技術の移転についても、当事国の生産関係や労務関係、いわゆる文化を無視しては不可能であろうと思われる。そうなると、日本的な生産関係・文化基盤の上で十分に機能するからといって、他の文化・土壌の上でもそうあるだろうと考えるのは禁物だ。例えば、イスラム教が支配的な社会において女性の職場進出や、社会的地位の向上をうたっても、どこまで実行できるであろうか。衣服の問題、清辱の問題等、文化が違うと様々な厄介な問題が出てくる。

そのことを考えての国際協力はもちろんなされているであろうが、隊員の多くの方も、ある程度時間をおいて気づかれるようだ。事業はそこから始まるのではなかろうか。すなわち、協力隊員の方の任期が2年というのは短かすぎると言うことだ。エンジンが調子よくなってから離任・交代するのでは、どうか。本当に文化までも移植する覚悟と時間がいるのではないか。

さらに、このような話を聞いたことがある。日本以外の先進国の援助は、地元に感謝されている。根付いている。ところが日本のそれは、額が多いにもかかわらず、当事国の人々に感謝されない、むしろ不平不満を持って受け取られている。どこに原因があるのか。ニーズを的確につかんでいないのか、運用面で不備があるのか。これは、事業内容がどこまでも汎用性を持っているかにも関わっている。上辺だけの事業ではこのようになりやすい。もっと地域に根付いた、地域に密着した協力事業であって欲しい。今回の視察ではそのような事業を余りかいまみなかったので、心配である。実際にはサバ州などで行われているが。

### 3. 協力事業の紹介について

高度の技能や技術を持っている者しか、海外協力隊員になれないとすれば、有意の青雲の士を殺すことになる。その意味では、職業高校を卒業し、実社会で技能を磨いた者が参加できる仕組みは有難い。自動車整備にしろ鋳造技術にしろ、海外での活躍の場があれば、高校生にも大いに宣伝できる。夢を持たせて進路指導をすることができる。無闇に高度な技術移転は、確かにそれを求めている国も多いであろうし、必要だ。しかしソフトウェア開発や、養殖の高度バイテクについて、高校教育を受けた者しか派遣できないものであれば、実業高校の生徒などは、切り捨てられてしまうことになる。

麻薬患者の更正施設での自動車整備技術の指導については、単に生産技術の協力だけでなく、民意向上にも協力していることを合わせて情宣活動をすれば、国際協力事業団の仕事内容についても、また、日本の果たしている国際的役割についても理解を深めさせることができるのではないかと思われる。

そうして何よりも大切なことは、発展途上国で訓練を受け学んでいる人々の熱意を伝えたい。若い国のエネルギッシュな活力を伝えることができれば、その中で働いている隊員の努力も報われると思う。生きがいや、人間の生き方を強調して伝えることもよいではないか。

### 4. 教育指導に生かす方策

かねてより、熱帯アジア、または東南アジアの教材化を考えていた。フィリピンのバナナ栽培プランテーションについては、各種の参考書によって、ある程度の教材化を完成したが、東南アジアにお

ける華僑の経済支配と多民族社会、ゴム・油ヤシの農業形態、自然環境などに関して、その教材化と資料の収集にある程度のメドをつけることができたことは大変有難いことであった。特に物理的なシステムでなく、ソフトウェア的なシステムについて直接観察できたことは収穫であった。

例えば、日本同様に資源小国のシンガポールが進むべき路についても、実際にその工業地域や産学共同のシステムを見ることができた。教科書的な通り一辺倒な記述では物足りないところを、様々な生きた教材を手に入れることができた。日本が、今後国際社会においてどう生きるべきかの手本をシンガポールに見た思いもする。「背負う子に教えられ」の諺どうり、色々な教訓をこの研修において学んだが、これは経済単元においても、また視点を変えれば倫理単元、政治単元でも十分教材となり得るものである。

## 5. 所　感

事前に説明を受け納得したが、いま少し早めの時期か、冬季休業の時期に実施されてもいいのではないか。現地の気候に合わせて、今回は大変に好都合ではあったが、時季的に大変うっとうしい季節もあって、それこそ大変であることを理解するのもいいのでないか。

訪問期間については、シンガポールであと１、２日、マレーシアで１日ほど多くあれば、さらに様様な協力実態を見ることも可能であった。今回感じたのは、余りにも都会的で、本当に協力事業が必要なのかと思われたことであった。かなりの僻地においては、別の形での協力形態・実態が視察できたであろうし、その方がよりＪＩＣＡの事業理解として適切であったと思われる。

ただ、全般的には旅程もゆったりとしていたし、現地の方々や事業所の協力もあり、そして何よりも事業団のお骨折りで、不快なことに会わないですんだことだ。クアラルンプールの夜店・露店の活気ある賑わいや雰囲気は今も忘れられない。ただ難を言えば、英語を話せない教員については、現地の事情がいま一つよく分からなかったことや、交歓会では現地の人から余り相手にされなかったような気もする。この辺りの配慮が欲しかった。ともかく今回、海外研修の機会を与えられ貴重な体験を得ることができ、外から日本を見、自分を見ることもできた。このことを個人的な財産とするだけでなく、広く生徒諸君にも還元して行きたいと思う。大変有難いことであったこと、感謝申し上げる次第である。

氏　　名　高 場 正 喜
所属学校　長崎県立諫早商業高等学校
担当教科　社会（地理）

1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

(1) ＪＩＣＡが実施している国際協力の実情をマレーシア、シンガポールでのプロジェクトを見聞することによって理解すること。

(2) 青年海外協力隊員およびシルバー海外協力隊員の現地における活動や生活の現状を見聞すること。

(3) マレーシア、シンガポールを次のような観点から地理的に把握し、一部ではあるが熱帯地方についての理解を深めること。

ア．気候条件

イ．プランテーション農業の変貌の実態

ウ．工業化の現状

エ．多民族国家の政治・経済や生活の状況

2. 国際協力の現場で、参考になったこと

現代社会の環境・資源・人口・食糧問題などについて考えるとき、グローバルな目でみることが必要である。しかしながら、世界全体が同じ水準の生活をしていない現実をみると、どうしても先進工業諸国・開発途上諸国間にみられる経済格差の問題である「南北問題」の解消が急がれる。

こうした状況を解決するためには、政治的なことはさることながら経済的な面で国際間の協力体制を作り上げることが急務である。日本も政府開発援助（ＯＤＡ）のなかで45カ国に対するプロジェクト方式技術協力や51カ国にたいする無償資金協力といった形で開発途上諸国の経済開発や福祉の向上を支援している。

今回の海外研修で我々が訪問したマレーシア、シンガポールも経済面の充実と向上を目指している国々であるが、人的・技術的・資金的にも日本に対する期待は非常に大きかった。

マレーシアは、多民族国家である。マレー系50％、中国系30％、インド系10％、その他10％、人工約1,700万人、政治の実権はマレー系が、経済の実権は中国系の華僑がにぎっている。この国は、独立以前からゴムや油ヤシなどの栽培を中心としたプランテーション農業が盛んであった。これは世界経済の影響をもろに受ける不安定なモノカルチャー的経済であり、国内経済は常に不安をかかえて

いた。このような経済状態からの脱却を計るために、マハディール首相が提唱した“ルック・イースト”（Look East：Eastは具体的には日本、韓国をさす）のスローガンのもとに、日本の経済開発や技術を手本にした国内経済の自立と向上を目指している国である。しかも“ブミプトラ（マレー系の人々優遇）政策”で、マレー人による経済自立を計っているところに特色がある。この点、将来、民族間の軋轢が危惧されるところであるが……

(1) レジデンシャル・スクール「セコラ・アラーム・シャー」の日本語教育

この学校はマレー人の子弟のために創られ、イギリスの教育制度を採り入れた全寮制の5年制中等高等学校で、将来のエリートを育てる学校である。ルックイーストのスローガンにあるとおり、日本の技術を吸収すべく日本語が第3外国語に指定され（選択）、各学年、週3時間の日本語教育が実施されている。5年生になると日本語による日常会話ができる程度になるそうである。ここを卒業後日本の大学に留学するためには、更に2年間、日本語と学科を勉強することになる。この学校には3人の協力隊員が派遣されて日本語教育に情熱をかたむけていた。現在、日本語教師になるために10人のマレー人が日本に留学しているが、マレー人の日本語教師がでるまでは援助が必要である。校訓は、“Cita（希望）・Usaha（努力）・Jaya（勝利）”で農業社会から工業化社会への脱皮の意気込みを象徴しているような気がした。この学校を卒業した生徒たちは主にアメリカやイギリスに留学をし、日本への留学はまだ少数派。他にもマレーシアにおける日本語教育は盛んで、一例をあげれば、公務員で日本語を修得したい人には、3カ月間仕事が免除され集中講義が受けられるようになっている。このため、最近は日本に留学し、日本で学位を取る希望者もでている。

(2) マレーシア職業訓練指導・上級技能者養成センター

工業生産の目標を国産自動車（Proton-Saga＝現在日本の三菱自動車と技術提携して生産しているが、エンジンなどの重要な部品は日本製部品を使用している。部品自給率は60%程度、年産8万台、国内シェア約60%）部品の完全自給化におき、それによって獲得した技術を他産業におよぼしていく方式をとっているように思えた。このプロジェクトは、自動車工業を含めた上級エンジニア養成機関で日本の技術移転と技術普及のための職業訓練をしていた。技術者の指導者を育成することを目的とする1982年に始まって以来、自動車科、工作機械・金型科、重工業科、電気・電子科、計装・自動制御科、金属加工科の技術を修得したマレー人約4,000人。また、技術の普及を容易にするために外国の技術に関するマニュアルをマレー語に翻訳する作業も急がれていた。

(3) 鋳造プロジェクト（マレーシア鋳造技術協力事業）

1988年から始まったプロジェクト。大企業が存在しないマレーシアでは、工業・輸出指向型産業育成のために外国技術への依存から脱皮し、部品を国産化し国内需要をカバーできる水準まで基礎産業を育成する必要がある。ここでは、マレー人が技術を確保するのに必要な鋳造技術（造型、溶解、模型、試験検査、品質管理、鋳物仕上げ）を指導していた。自動車のエンジンやギアの鋳物部分の試作が行われていた。また、民間の鋳物企業の技術指導も実施している。

(4) マレーシア農科大学海洋水産学部本部

マレーシアでは、食糧自給率の向上も欠かすことのできない経済政策の一つである。広大な敷地の中に農業・畜産・水産養殖の実験施設をもち、農民の指導（技術普及）・機械化・品種改良・バイオテクノロジーの応用など第一次産業の近代化への試みが実施されている。主に水産養殖の指導現場を視察したが、鯉養殖の技術指導が行われていた。水産関係では、漁労、養殖学、海洋学、航海学、水産資源学、孵化技術、魚病学、栄養学、漁獲物処理などの指導助言が行われている。海洋ではクルマエビの養殖技術も指導しているそうである。マレーシア産の養殖エビが日本の食卓をかざることになる日も遠い将来のことではなくなった。

(5) 麻薬中毒者のリハビリ施設での自動車整備技術の指導

マレーシア社会の悩みの一つに麻薬の蔓延がある。人口 1,700 万人、この内14万人が麻薬に汚染されているといわれる。このような麻薬中毒者に技術を修得させ、社会復帰を促すのがこの施設である。全国に更正施設が19カ所あり、１人の生徒に対して政府から年額 330 マレーシアドル（約 16,500円）が支給されている。

ここには、警察を経由して来る人、自発的に来る人とまちまちであるが、訓練は精神面の治療・道徳の修得・軍隊訓練や職業訓練が行なわれる。24万エーカーの敷地の中で自動車整備・籐製作・木工・工芸・理容・パン製造・農畜産・園芸・音楽など16部門の技術を各自の選択で２年間の訓練を受けたのち社会復帰していくことになる。自動車整備の部門で協力隊員が活発に生徒たちの指導をしていた。

以上が開発途上国から中進国への脱皮を目指すマレーシアにおける視察の状況であるが、日本の農林水産業・工業技術への期待は大きく、また、日本の青年海外協力隊員の受け入れは今後もしたいようである。それは、協力隊員とマレーシア人と一緒に生活させて、日本人の勤勉さと合理性を学ばせたいとの意向からである。

シンガポールは、1965年にマレーシアより独立した多民族国家（中国系 75％、マレー系15％、インド系６％、その他４％）である。面積は淡路島くらいの大きさが人口 268 万人。マラ

ッカ海峡をひかえて地理的に重要な位置を占め、国際金融センター、中継貿易、運輸・通信や観光立国と同時に知識集約型の工業立国を目指している。政治的には安定しているが国内に資源がなく大きな悩みをかかえている。ただ、この悩みは、逆に保護すべき資源や産業がないことが関税の必要をなくし、外国から安いものを輸入できるという利点につながっている。これは、中継貿易を繁栄させる原因にもなっている。能力主義を採用しているシンガポールでは、多民族国家にありがちな民族的な対立もみられない。日本は、シンガポールが先進国と肩を並べるまでは知識集約型の先端技術協力のみをＯＤＡの中で実施していく。協力の中で特殊なものでは交番制度があった。日本の交番と同じ制度を採り入れ治安の維持をはかっている。犯罪検挙率も向上していた。ことしは交番の数を80カ所から91カ所に増やす計画がある。技術移転が成功した例である。

(1) ＪＳＩＳＴ：Japan-Singapore Institute of Software Technology（日本・シンガポールソフトウェア研修センター）

資源のないシンガポールでは、人的資源を育成して産業の生産向上や知識集約型の産業立国を目指している。これの一環としてコンピューターサービス産業の成長に力を入れている。このセンターは、1980年、技術協力に関する日シ政府間合意に基づいて設立された。これまでに日本から長期専門家 16 名、短期専門家 47 名を派遣し、コンピューター・ハードウェアやソフトウェア等の機材を供与してプログラマー、システム分析・設計技術者を養成するとともに日本で現地教官23名を養成した。これまでに高卒 499 名、大卒 553 名が養成されて国内企業や多国籍企業の中で働いている。現在進行中の技術協力は、データコミュニケーションやソフトウェアエンジニアリングの実践強化を目標にして実習環境整備や教材作成支援をしている。

(2) The Japanese School（シンガポール日本人学校）

シンガポール在留邦人の子弟を対象に1965年に創立した半官半民の小中学校。職員は文部省派遣教師 75 名、現地採用教師と講師 35 名。小学校 44 学級、生徒数 1,691名、中学校14学級、生徒数 515 名、規模では世界最大の日本人学校である。入学資格は、日本国籍と、シンガポール国籍以外の子供で日本語ができることが条件。カリキュラムは文部省の学習指導要領に基づいて実施。校則は常識の範疇で処理している。生徒の 99.9%が日本国籍。親の転勤（平均４年在勤）などによる生徒の移動が多く、また、日本経済の海外進出にともない海外勤務が増加したことが生徒数の増加にもなり、質的にも多様化している。生徒数の増加による施設の拡充が問題点の一つ。問題点の一つに中学校卒業後の高校進学がある。卒業生の１／３はアメリカンスクールか、イギリス系のインターナショナルスクールに進学するが英語

力がないと受け入れてくれない。2／3が日本の高校への進学をするが、日本側の受け入れ体制が難問。親の勤務の都合で寮の設備があることが必要なこともあり、公立高校よりは私立高校への進学が多い。生徒一人当り6～7校の受験をする。進学地域は、関東60%、関西30%、その他の地域10%。また、校長は毎年約40校くらい受け入れ高校への訪問をしている。“帰国子女にたいしてもっと好意の目でみて欲しい”と言っておられた。

以上、視察の見聞を記してきたが、日本の企業進出はめざましいものがあった。進出企業はもちろん、都市にかぎらず、至る所で日本企業の看板がみられた。また、日本の技術導入にたいする期待は大きいものがあった。半面、こうした日本の経済進出に不安をいだく人たちの存在も忘れてはならない。加えて、工業開発を急ぐあまり密林が工業用地として伐採されている所を多く見てきた。自然破壊が急速におこなわれている。大いに気になることである。技術協力にあたっている国々は、都市問題・環境破壊・公害が起こらないようバランスのとれた協力体制つくりが必要である。

3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

マレーシア職業訓練指導・上級技能者養成センター
日本・シンガポールソフトウェア技術研修センター

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

今回の研修と行程中の事物のスライドを作成した。授業その他国際理解に関連のある場所で使用しながら生徒たちに今回の体験を還元していきたい。

5. 所感および意見

(1) 研修時期および期間

研修時期を考えて欲しい。北の高校は、二学期早々、南の高校は帰国後すぐ二学期では、慌だしすぎてどうにもならない、視察前の打ち合せでは、他の行事の都合もあり、どうしてもこの時期しかないとの説明があったが、行事の全体的な見直しも必要なのではないか。期間はちょうどよいのではないか。

(2) 研修日程および訪問先

ある程度の余裕をもった研修で全体としてはよかったのではないか。

(3) その他全般的な所感

国際協力の現場を視察できる機会を持たせてもらったことをたいへん嬉しく思っています。いろいろと勉強をさせていただきました。

地理の教員をしている私にとって今回の研修は、熱帯を体験するまさに絶好の機会でした。現地を見聞し、授業中で扱っていることのチェックをしながら歩き回ることができました。「群盲巨象を撫でる」という諺がありますが。私は象のしっぽしかさわらなかったかも知れません。それで全体をつかんだつもりでものを言う気ではありませんが、授業のチェックができたことに大きな収穫をえました。

また、全国から14名の先生方がインスタントの視察団を編成しましたが、すぐに打ち解けて和やかな雰囲気で視察を終ることができ、しかも全員無事に帰国できたこと、視察中いろんな情報交換ができたことをありがたく思います。お互いにご苦労さまでした。

おわりに、今回の研修の世話をして下さいましたＪＩＣＡの中川、山田氏に心からお礼を申し上げます。

氏　　名　識名盛安
所属学校　沖縄県立中部農林高等学校
担当教科　農業

国際協力事業団主催による平成２年度高校教師海外研修マレーシア・シンガポール班に参加できたことは、大変幸運なことでした。しかし実のところは、私は教師歴もまだ一年目で、この様な海外研修に参加しても良いものなのか。また、年齢的にも若く、参加なさる事業団関係者、先生方に迷惑を御掛けしないか。など不安に思いながら研修に参加しました。以下にこの研修先で学び感じたことを報告します。

８月22日　東京発（10:00）ークアラ・ルンプール着（15:50）の便が、東京発（13:00）ーシンガポール経由ークアラ・ルンプール着（21:50）に変更となり、結局、この日ホテルFURAMAに着いたのは夜の11時を過ぎていた。その日の遅い夕食をホテル近くの大衆食堂に全員で行き、焼きそば（マレーシア風・中華風？）を食べ、安いビールを飲む。そこでドリアンと唐がらしを食べながら外国に来たことを感じました。

８月23日　10：00　SIME　DARBYビル18階にあるＪＩＣＡマレーシア事務所を訪問し、駒沢、湊、両次長の説明をうける。説明を聞くまでマレーシアの国は農業を中心とした国であるとしか考えてなかったが、説明により工業及びハイテク産業に力を注いでいることを知った。また、日本及び韓国に学ぼうとするルックイースト政策（Look East Policy）、マレー人優先政策であるブミプトラ政策などがあることも知り勉強になった。日本語教育に関しては、とても熱心でマハティール首相は日本語を第３の言語とも考えており、日本もその要求に対応して努力していることを知る。湊次長のプロジェクト協力の説明で、プロジェクト協力は、単に物質的協力・期間内協力だけでなく、その国に技術が根づくよう現地の人に技術を身に付けさせることを考え、アフターケアやフォローアップも行っていることを知った。このように途上国への本当の意味での技術協力は、焦らず、長い目でじっくり行うことが必要なのだと感じました。

同日2:00pmからマレーシア鋳造技術協力事業を、長期専門家の原、正本、深井氏の説明により視察した。ここでもマレーシア経済が現在発展しているのは、工業発展によるものであり、それを促進させるためには、現在日本より輸入している鋳造製品を自国で生産できるようにしたいとのことであった。また、余談ではあるが、クアラ・ルンプール市内の車を見るとマレーシア工業発展のシンボルである国産の自家用車プロトンサガが多く走っている。プロトンサガは、マレーシア政府と日本の三菱の合弁会社で造られ、生産台数も今年は昨年の２倍の８万台生産されている。マレーシアの国民もプロトンサガの話になるととても誇らしげに話していた。それだけ工業発展に期待していると言うことだろう。

8月24日　10：00　ALAM　SHAH学校を視察。ラオブ校長、ナイム、アイム両教頭、協力隊員の東、尾形、小林が暖かく迎えてくれました。協力隊員の三氏は、ALAM　SHAHの学校で日本語教師として派遣されており、その事からもマレーシアの国が日本語習得に力を注いでいることが窺えます。ALAM SHAH学校は、生徒数623人の全寮制男子校で、年齢は13歳から18歳まで、丁度日本の中学校と高校に該当します。小学校終了時に、全国で試験があり選び抜かれたエリートの生徒達が通う学校であるため、規律も厳しく自宅に帰れるのは月に一度、朝は5時半に起床し夜11時半に眠るまでびっしりスケジュールが組まれていました。語学は、母国語のマレー語と英語が必修科目、日本語、アラビア語、フランス語が選択科目で1年生から学習している。そのため3，4年生になると簡単な日本語会話ができる生徒もおり、"こんにちは"と声をかけてくる生徒もいました。協力隊員の尾形さんの授業では、鉛筆を使い1本（ポン）、2本（ホン）、3本（ポン）と読み方の違いを教えていました。日本語教科書は今までの協力隊員の努力により作られたものを使用しており、とても立派で苦心した後が見られました。

8月24日　15：00　職業訓練指導員・上級技能訓練センター（The Centre for Instructor and Advanced Sikll Training）CIASTを視察。CIASTは、1981年、鈴木善幸元首相が「ＡＳＥＡＮ人造りへの協力」構想に応えて計画され、日本側の協力は、1981年より始まり1990年まで行われた。現在は、フォローアップ期間で協力期間も最終段階のようだ。このセンターは、日本の協力がうまくいった典型的な例であろう。1984年から現在まで、4000人が卒業しておりマレーシア経済の高成長（工業の）に貢献したのではないかと考えられる。また、他のＡＳＥＡＮ諸国からの研修生も受け入れており、周辺諸国への間接的な協力にもなっている。

8月25日　9：30　マレーシア農科大学の水産学部を視察。大学校内は、広大でかつ樹木の手入れが行き届いており、とてもきれいな大学だった。同大学に個別専門家として派遣されて瀬野氏は、鯉の養殖に取り組んでおり、視察中でもふ化したばかりの稚魚を真剣に観察する姿は印象的であった。

8月26日は、クアラ・ルンプールからジョホールバールへの移動日であった。移動中バスから見えるのは、ゴム園とアブラヤシ園が代わる代わる続く光景と、時たまバナナ園、稲畑が見えるだけであった。ジョホールバールで夜、協力隊員との懇談会（夕食会）があった。私達のテーブルには、北海道出身の平賀牧恵さんが同席した。彼女は、大学を休学して隊員になっており、現在は日本語教師として頑張っているとのことでした。寮の部屋にはシャワーもなく水浴びで我慢しているとのことでしたが、同年代の日本で生活している女性と比較してたくましさを感じました。

8月27日　10：00　麻薬患者のリハビリーセンターを視察。この施設は、二年がかりで麻薬患者に自動車整備・家具造り・農業などの技術を身に付けさせ、更正させていくことを目的としている。現在マ

レーシアに麻薬患者が14～15万人いると言われ、それが大きな社会問題となっている。この施設の校長先生が麻薬患者は、罪人ではなく病人であると言われたのは、彼らは麻薬さえ扱わなければ一般の人と何ら変わらないということであろう。その日の午後、シンガポールへ向かった。

8月28日　10：00　シンガポールＪＩＣＡ事務所訪問。説明でシンガポールは、資源がなく深海に囲まれた小さな国であるが、逆にそれをメリットとして生かしたとのことでした。それは関税をなくして自由に物資を輸入し、深海のマラッカ海峡を利用して出入国を増やすことで（立地上も東西南北の中心にある）、世界の事情がいつでも入ってくる国となったのである。説明を聞きながら沖縄に留学しているシンガポール人が、シンガポールの財産は知能であると言った言葉を思い出しました。

同日　14：00　日本シンガポールソフトウエア研修センター（ＪＳＩＳＴ）を視察。このセンターでの職員との懇談会の時、沖縄国際センター（ＯＩＣ）で研修を受けたTan Sock Yanさんと話をした。沖縄で研修を受けた人が実際現場で活躍しているのを見て感動しました。また、東南アジアにおける国際交流において、沖縄県も何等かの形で貢献しているのだと思いました。

8月29日　10：00　シンガポール日本人学校を視察。教科の中に英会話などがあるのが特徴であった。学校終了後、塾に通う生徒も多く学力は高いとのことでした。

以上に長々と日程に準じて述べてきましたが、この研修を通してとても大きく感じたことは、日本の経済的・技術的援助が想像以上に役立ち、現地の人々に喜ばれていることであった。ＪＩＣＡの所長が言われてましたが、日本の報道機関は日本の援助の失敗例だけでなく、成功例も両方報道して欲しいとのことでした。私もその考えに同感です。最後にこの海外研修をお世話していただいた関係各位に厚くお礼を述べます。

氏　名　齊藤　実

所属学校　東京都立松が谷高等学校

担当教科　現代社会・政治経済

1. 視察等に際して特に主眼をおいた点

(1) 技術協力の現場が技術移転後も当事国の自助努力で円滑に稼働しているかどうかといった点

(2) 技術協力に参加活躍中の専門家の現地での生活ぶり

(3) 機材供与や援助施設の具体的な状況

(4) 現地での日本に対する評価

(5) ＪＩＣＡ現地事務所の機能と職員の状況について

(6) 青年海外協力隊の活動状況と現地生活の実情

2. 国際協力の現場で

(1) 参考になったこと

ア. ＯＤＡの問題は、実に多岐にわたっているが、具体的には資金協力の方法を技術協力を含む贈与方式をとるか、円借款方式をとるかといった二者択一の問題に帰属する（国際機関の出資や拠出を除外すれば）。東南アジア諸国に対する援助が戦時賠償からスタートしたことにより二国間援助方式に集中しているが、今後のわが国の国際協力のあり方を大局的見地から展望した場合、多国間協力方式に転換して行くことが必要であると思われる。

イ. 機材の供与等を有効に機能させて行くためには、現地に見合った改造や技術指導を先行させなければならない。そのためにも人的資源としての専門家派遣が重要な要素である。専門家の現地での地道な活動ぶりや、青年海外協力隊員の純情な努力に敬意と感動を憶えた次第である。

ロ. ＪＩＣＡ現地事務所が、少ない人的スタッフで多額で多様な仕事をこなさなければならない現実がある。現地邦人のボランティアを動員するとかして、人づくり、国づくりの協力援助のソフト面の開発にも着目していく必要性を感じる。

(2) 気になること

ア. 各プロジェクト内における専門家派遣が多国間協力でティームティーチング方式で、カウンターパートの育成指導にあたるといった協力体制の確立も今後必要になるのではないだろうか。その前提として多言語理解や多国の異文化理解といった事柄が前提となるが…。

イ．ＣＩＡＳＴ（マレイシア職業訓練指導上級技能者養成センター）の工作機械・金型科には、大型の施盤機械が機材供与されていたが、技能訓練用として十分に活用されていないように思えた。技術指導専門家派遣に問題があるとすれば、民間協力を活用しながら、意欲的で有能な人材を導入することも検討する必要がある。

ウ．とかく、援助関係に関係しているスタッフの入れ替わりが多く、地域研究を専門に調査・研究しているキャリア組が在外公館等では少ないように思われる。今後この点にも人材を投入し、当事国との信頼関係を高める必要性があることを痛感した。

エ．ＯＤＡをどの国のどんなプロジェクトにいくら資金を拠出するかという決定は通常四省庁体制（外務・大蔵・経企庁・通産）によるといわれているが、各省庁間の連絡調整に時間がかかり過ぎる。援助要請に対してタイムリーな援助やＯＤＡの使用状況を被援助国の内政干渉にならない程度に、独立性の強い会計検査院が担当する事も必要ではないだろうか。

オ．ＯＤＡに関しては、援助する側、援助される側双方に明確な理念を相互に確立しないと、有効性を発揮することは出来ない。すなわち、援助する側は、「援助してやっている」といった意識を持たずに、援助を受ける側も自力努力を怠ったり、援助依存症を生み出すことのないように十分配慮する必要がある。自立を促しながら共存・共産できる関係を維持する継続的努力が主要である。

3. 我が国の協力ぶりを各方面に紹介すべきだと考えられる協力、プロジェクト等

ア．マレイシア標準工業研究所（ＳＩＲＩＭ）の鋳造技術部門

1986年、産業の基礎技術である鋳造技術の向上を目指して、わが国に対してプロジェクト方式技術協力を要請してきたもので、マレイシアでは唯一の鋳造技術研究開発施設として88年10月からスタートしている。

協力期間……５年間

専門家派遣……長期派遣４名、短期派遣必要に応じて派遣

研修員受入れ……９名

供与機材……鋳造技術移転に必要とする機材一式

現在ＳＩＲＩＭは"A Friend and Partner of Industry"をモットーに従来の試験業務重視型から高度工業化を先導する研究開発型の研究所に脱皮しようとしている。

イ．マレイシア職業訓練指導・上級技能者養成センター（ＣＩＡＳＴ）

背　景……56年1月鈴木前総理がＡＳＥＡＮ ５ケ国歴訪の折、「ＡＳＥＡＮ人造り構想」を提唱し、各国の賛同を得、特にマレイシアより人造りプロジェクトとして職業訓練の技法

及び上級技能訓練の普及を目的に、60年8月30日開所された。

資金協力……無償協力約38億円

協力機関……労働省

内　容……(1)　職業訓練指導員養成のための指導技法訓練

(2)　職業訓練指導員、監督者及び技能労働者に対する監督技法訓練

(3)　次の職種の職業訓練指導員・監督者及び技能労働者に対する上級技能訓練

①自動車科　②工作機械・金型科　③重工業科　④電気・電子科　⑤計装・自動制御科　⑥金属加工科

ウ．日本・シンガポールソフトウエア技術研修センター

背　景……シンガポール政府は、経済の急速な発展により従来の労働集約型産業から、知識集約型産業に移行する必要性から情報処理技術者を養成するための研修センター設立をわが国に要請してきた。

協力期間……昭和61年1月13日～平成3年1月12日（5年間）

協力機関……通産省・郵政省

4. 今後の教育指導に生かす具体的方策、あるいは材料として考えていること

(1) 三年の政治経済、一年の現代社会を担当する社会科教師として、教科指導を通じて、経済協力の実情や、今後のあり方について具体的に写真や見聞事項を指導内容に活用したい。併せて青年海外協力隊等についても啓蒙し、人材育成に寄与したいと願っている。

(2) 東京都国際教育研究協議会の研究会はじめ各種会合等で今回の視察報告を実施して、国際協力について一部マスコミの偏向した報道に左右されることなく、正しい実態把握と理解に立った今後の国際協力のあり方の思考を深めたい。

(3) 日本教育連合会の「教育の国際化委員会」のメンバーの一人として、視察報告や今後の研究活動の資料として活用するとともに、学校内外の教職員に対する啓蒙活動にも活用したい。

(4) ＰＴＡの広報活動や文化祭での写真展示等を実施し、国際理解教育、国際協力に関する資料提供にも活用したい。

5. 所感および感想

(1) 研修時期および期間

夏季休業中の前半に、懸賞作文入選者生徒派遣と同時期に実施した方がＪＩＣＡ現地事務所と

しても合理的に事務処理が出来るのではないだろうか。参加する教員にとっても夏季休業中の後半より前半の方が都合が良い。期間的には適切な企画である。

(2) 研修日程および訪問先

○研修日程のスケジュール把握がもっと事前に知ることが出来れば良かった。

○協力隊員と懇談する時間的余裕がもっとあれば良かった。

○日系進出企業の見学が出来ず残念であった。

(3) その他

○ホテルの宿泊は、一部屋２人でも良かったと思われる。メンバー同志の交流や諸般の事情を考慮して、その方が合理的だと思う。

○今後の研修日程の中に、現地人との交流を深めるためにもホームステイの企画を取り入れるよ配慮願えると有難い。

○現地でのツーリストとの連携をもっと工夫し、エスコートとしての役割が現場視察での通訳も含むものと解釈していたがそれが不明確であった。

○訪問先等に対する簡単なおみやげ品の用意や交歓会での出し物など班編成の事前オリエンテーションで準備しておくと良かった。

○訪問先に配布するメンバーズリストには顔写真と住所・氏名・学校名を記入したものを用意すると良かった。

○一同健康で無事だったのもＪＩＣＡ関係者のおかげと心から感謝申し上げます。